
BLACK CAT & 仮面ライダーW = THE TEMPEST GUILTY =

T K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK CAT & 仮面ライダー || THE TEM
PEST GUILTY ||

【Nコード】

N4188U

【作者名】

T K

【あらすじ】

大物賞金首を求めて、トレイン、スヴェン、イヴの3人の掃除屋は国境を渡ってはるばる風都へとやって来た！そこで彼等に待ち受けていたのは、未知なる怪人ドーパントとそれに建ちう向かう風都の戦士、仮面ライダーの存在だった！

本作品は2000年から2004年にかけて週刊少年ジャンプにて連載された矢吹健太郎氏原作のアクションコミック、「BLACK CAT」と仮面ライダーWをコラボしたファンフィクションです。

サブタイトルはまだ良いのが思い付かないのでその内書しつつと
思います。

2011・10・1 追記 サブタイトルを追加。

プロローグ（前書き）

はじめに。

本作品は2000年から2004年にかけて週刊少年ジャンプにて連載された矢吹健太郎氏原作のアクションコミック、「BLACK CAT」と仮面ライダーWをコラボしたファンフィクションです。

設定としては、Wとトレイン達は同じ世界の住人と言う事にしています。

でもロシアとかアメリカとか実在する国が普通に出てくるような世界です。

時系列についてWは最終回から「MOVIE大戦COEA」の間、ブラックキャットは完全無視のオリジナル。

理由は黒猫の方は原作とアニメの方では設定と物語の進行状況が大幅に違っている為です。

なので、どちらかと言うと原作よりな雰囲気になりつつアニメの設定がちよこつと入るかもしれないと言う曖昧な事になる可能性があります。どうかあしからず。

「なんで今頃黒猫？」とか言う疑問に対しては、いずれ活動報告などで書くつもりです。

では、「黒猫W」、はじまります。

プロローグ

日本ではない、何処かの国

煉瓦造の建築物が立ち並ぶ街中で、一台のワゴン車が疾走している。かなりのスピードが出ているがココは高速道路ではない。多くの通行人達が慌ててその車を避けてくれるが一歩間違えば大事故になりかねない。それだけこのワゴン車はスピードを出していた。

「へへへ、コレだけ通行人の多い場所ならパトカーも追ってこれねえよな！」

運転手の男がにやけながら言う。

「流石つす兄貴！アレだけの数のパトカーに追われても全く動揺も絶望もせず、冷静に人ゴミの中を走ってパトカーをまくなんて！！」

助手席の男が褒める。

「おうよ！どんな困難な時でも冷静に、そしてポジティブに物事を考え行動すりゃ、現金輸送車なんてお手のもんよ！」

「はい！俺、一生兄貴に付いていくっす！」

助手席の男は目を輝かせて運転手を褒め称える。

車の後部座席には大量の札束が入ったバックが置かれていた。そう、この二人は強盗。つい数十分前街外れの銀行を強襲し、現在警察に追われていたのだ。だがこの人混みの為、パトカーは追跡がし辛くなり、あえなくこの二人の車を見失ってしまったのである。

このまま行けば確実に逃げ切れるだろう。

しかしそのポジティブな考え方をもつと別なことに使えないのだろうか？

「ん？なんだアイツ？」

「え？」

と、ここで運転手の男が前方の何かに気付く。助手席の男も前方をみた。

すると、自分達から100メートル以上の遙か目の前に一人の青年が立っていた。

外見からして年齢は20代前半。

ボサついたダークブラウンの髪にパンキッシュな黒いジャケットに内長外短なロングスリーブを着ている。

その青年が此方に向けて片手で拳銃を構えているのだ。

「なんだアレ！？俺たちに向けてるのか！」

「でもあんな距離で当たる筈がありません。このまま突っ切っちゃいませよ！」

そう言つて強盗二人を乗せた車がそのまま直進した。

銃を構えた青年はそれを見てニヤリと笑みを浮かべる。

「そうそ そのまま動くなよ・・・」

他の通行人は車から逃げてくれるので視界も良好。

男は拳銃（砲身が三角形に伸びた変わった形のリボルバー）を100メートル先を走っている車の左前輪に狙いを定め、一発の銃弾を放った。

瞬間、車のタイヤはポオオン！と言う鈍い音と共に破裂し、バランスを崩し、失速する。

「うえあわ！？なななんだ！？??」

「そ、そんな！あの男あんな遠くからタイヤを！？」

「へ、だがタイヤ一個パンクしたくれえじゃ止まらねえさ！」

車は往生際悪く左折し、尚も逃走を図る。

「あらら、パンクしたら直ぐ車捨てて逃げると思ったんだけどな。まいいや、今度は姫っち、頼むぜ！」

拳銃の男が車を眺めながらそう叫ぶと、今度は男たちの前に11、

2歳くらいの少女が立ちはだかった。

外見は流れるように腰まで伸びたロングの金髪、レースやフリルの付いたゴシックアンティーク調の黒いドレスが印象的で、その姿はまるで中世ヨーロッパの人形かお姫様を彷彿させる。

「こ、こんどは何だよ!？」

「か、かわいいノノノノ」

「馬鹿!んな事言ってる場合か、おらどけ餓鬼!轢いちまうぞ!」

助手席の男が少女を見て鼻の下を伸ばしてるの余所に兄貴と呼ばれた男は乱暴にクラクションを鳴らす。

だが少女はその場から微動だにしない。いや、それどころかなんと恐がる事なく車に向かって走り出したではないか。

少女の行動に驚く強盗二人。次の瞬間更に目を疑う光景が展開される。

何とその少女の流れるように美しい金髪が、巨大なハンマーへと変化したのだ。

「!?!?!?」

訳も解らず目を見開いた瞬間、少女は車に走って近づき・・・

「えいつ!」

と叫びそのハンマーで車を横から弾き飛ばした。車はバランスを崩し、轟音と共にそのまま横転。

「うわああ、くっそう逃げるぞ!」

「へ、へい！」

バックを片手に何とか自力で車から這い上がり、尚も逃走を試みる強盗二人。

それを見た金髪の少女が叫んだ。

「スヴェン！」

「はいよ！」

何処からか二人とは違う、別の男の声が出たかと思うと今度は二人の男の上に大きな網が覆いかぶさってきた。

「うわ、何だこりゃあ!？」

「兄貴い!!！」

二人が網の中で暴れている間に、全身を白いスーツと帽子を身に付けた30代くらいの男が軽く笑いながら彼等の前に立ちふさがった。髪の毛は緑で右目には眼帯をはめている。

「どうだ。本日の天気、にわか網(雨)なんてな」

「おいおい、スヴェン。とうとう親父ギャグ咬ます歳になったのかよ」

「お、オヤジ!？」

仲間である先程の青年とちょっと苦い表情で見られ、まだ自分は若いと思っていた白スーツの男は軽くシヨックを受けている間に、金髪の少女がスマートフォンを手にとって、表示された指名手配犯リストを確認する。

「あつたよスヴェン、トレイン。”連続強盗犯ブーンとグリーン”。

二人合わせて賞金80万。この人達で間違いないよ」

「へへ、そう言う訳だお二人さん。大人しくお縄についてもらうぜ」

そう言つて黒服の青年はリボルバーを男たちに向けた。男は観念したよような声で聞いた。

「お・・・お前等・・・サツか？」

「違う。俺達は掃除屋スワイパーさ」

青年は不敵な笑みを浮かべて答えた。

場所は変わつて此方は日本。

エコの街、風都。

いたるところに風車が見える環境に優しい街。

そんな街の片隅に、一人の女性が血相をかいて走っていた。その表情は何か追われて恐怖にひきつった表情である。いや、実際誰かに追われているのだが。

「ふふふ。 待ってましたよ」
「ひい！」

だが途中で自分の目の前の木の陰から一人の若い男が現れた。 何やら女性を見てニヤリといやらしい笑みを向け、「さあ、私の元へおいでなさい」と近づく。 彼の姿を見た女性は恐怖で足がすくみ、一歩一歩彼から後ろへ遠ざかり、震える声で男に言った。

「も、もう・・・お願いです・・・止めてください!・・・何度も言ってるじゃないですか! 私にはもう婚約者が・・・」

女性の口から婚約者という言葉が出た瞬間、男は強烈な殺気を女性に向けた。

「何故です! 私はこんなにも・・・」

そう低く唸ると、懐から何やら10センチくらいの奇怪な大きさのUSBメモリの様な機械を取り出す。

そして、それについてあるスイッチの様な物を押すと音声があった。

マグマ!

「貴女の事を・・・愛しているのにーーーーー!!!」

地の底から響かせるように叫びながら、男はそれを右手の甲に差し込んだ。

瞬間、男の肉体が謎の光に包まれその姿徐々に人では無い物に変化する。

光が消えた時、そこに現れたのは先程の男ではなく全身を燃え盛る炎で身を包んだおぞましい怪人だった。

これはこの風都の間で闇ルートで出回っている、メモリ型のアイテム、ガイアメモリによって変貌を遂げた怪人、ドーパントである。

「ひいつー!!」

『ふっはっはっはっは！ 見なさい、この燃え盛る炎を！ コレが私の貴女に対する情熱だ！ さああ！ いざ私の元へ！』

灼熱のマグマの力を宿した怪人、マグマド パントは強く叫んだ女性の元へと駆け出した。

「いやあああああー!!」

女性が恐怖で己の身を伏せた、その時だった。

「おらあああああつっつ！」

突如として何処からともなく、ハンフリー・ボガートばりのソフト帽をかぶった青年が現れ、ドーパントの横からとび蹴りを喰らわした。

突然の出来事にド パントは『ぐう!?』と叫んで怯む。

「テメエだな。この依頼主を追いかけまわしてるストーカー野郎は」
青年の名は、左翔太郎。この風都に住む若き探偵である。今回彼は後ろの女性から「数週間前からずっとストーカーに狙われてお

り、そいつから自分を護衛してほしいと依頼を頼まれたのだ。青年は蹴りで少し焦げた服の箇所を軽く振りはらう。すると、彼の直ぐ横からまた一人の少年が現れた。

「マグマのメモリとは、これはまた随分と懐かしい相手だね」

少年は顎に指をあてながら特に興味も無さそうな目をドーパントに向ける。

彼はフィリップと言い、翔太郎の心強い相棒である。

女性は翔太郎達の姿を見て「探偵さん！」と叫び安心したような笑顔を浮かべる。対するドパントの方は怒りをあらわにするように体の炎を増量させる。

「つくそう、何だ貴様等は！？ 私とその人の熱い愛を妨げる気か！？」

「僕たちは二人で一人の探偵さ」

「まったく、嫌がる女を一方的に追いかけてまわして愛もへったくれもあるかつての！ フィリップ、変身だ！」

「OK翔太郎」

若干不敵に笑みを浮かべた少年は先程の怪人が変身に使ったメモリと同じような（ただし、デザインは此方の方がメカメカしく色も鮮やか）緑色のメモリを取り出す。

青年、左翔太郎はそう叫ぶと懐からベルトのような機械、「ダブルドライバー」を取り出しそれを腰に巻く。

それと同時にフィリップの腰に翔太郎が付けたのと同じドライバーが出現。

同時にフィリップと似た黒いメモリを取り出し、二人はそれをほぼ同時にスイッチを押す。

サイクロンッ！

ジヨオーカーア！

「変身！」

二人ともそれぞれ別々の音声が響いた後二人は叫んだ。フィリップはメモリをそのドライバーに装填。メモリが消え、それが翔太郎のベルトの元に現れ、次に翔太郎が自分のメモリを装填した。そして最後にベルトの中心にある機械を「W」の字の様な形に展開する。

サイクロンッ！

ジヨオーカーア！

その瞬間、翔太郎の体の周りに強い風が吹き荒れ、彼の姿を徐々に変えて行く。隣にいたフィリップは突如意識を無くし多様に地面に倒れ込む。

風が止んだ瞬間、翔太郎の姿は左が黒、右が緑という特徴的な鎧を身に纏った更迭の戦士となっていた。

『お、お前は仮面ライダー！？』

「この野郎、街を泣かせやがって！」

戦士、仮面ライダーWは怖じ気付く炎の怪人、マグマドーパントに

駆け寄った！

『ぐああああ！！』

Wの強力なパンチによって殴り飛ばされたマグマは叫びながら地面を再び転がったが、今度は直ぐに立ち上がりWに怒り任せの反撃を行う。

『くっそお、調子に乗るなあ！』

マグマは体の炎から数十発の火炎弾を飛ばし、Wの動きを防ぐ。

「っち、相変わらず熱いなちくしょー！おいフィリップ、あん時はどう対処してたっけか？」

『僕がルナで奴の火球を防いだ』

Wからフィリップの声が聞こえると右側の眼が点滅する。

「んじゃあそれだ！」

ルナ！ジョーカー！

Wは一度緑のメモリを外した後今度はそこに黄色いメモリを装填、瞬間先程まで緑色だった右半身が黄色く変色したかと思うと、Wの右腕がまるで鞭の様に伸び縮みし火球を弾いて行く。

『おおおおおおおおおおおお！！』

全て弾いたと思ったその時だった。マグマが全身を火だるまにして体当たりを食らわしてきた。

既に戦った事がある相手だと少し油断していやWはもろに喰らい吹

き飛ばされてしまう。

「うわあ！」

地面に倒れたWにマグマは今度はその燃え盛る炎を体に覆いながら抱きかかって来た。

Wは何とかそれを回避する。

『しっかりしてくれたまえ翔太郎、同じメモリでも適合者は違えば戦いかたも違う』

「わりい。ならこっちも接近戦だ」

Wは上半身だけを起こし、マグマの突進が来る前に素早くメモリを装填。

ルナ！メタル！

今度は右側の黒いボディが一瞬にしてメタリックな銀色に変貌すると、長い棒形の武器「メタルシャフト」を構え、突進してきたドパントに乱舞を喰らわす。

ドパントから繰り出される炎のパンチもW・ルナメタルはお得意の棒術で何度も防ぎ反撃を繰り返す。次々と攻撃を受けたドーパントは遂に立っているのがやっと言うくらいに状況まで追いつめられる。

「ぐ……ぐああ……」

『翔太郎、そろそろメモリブレイクだ』

「おう、行くぜ相棒！」

メタル！ マキシマムドライブ！

音声が鳴ると、Wの持っていたシャフトの先端がまるで先程のルナの腕の様に伸びだす。

「メタルイリユージョン！！」

そしてそれを勢いよく振り回しシャフトから金色の輪を大量に描き出す。最後はそれを次々とマグマドーパントに向けて飛ばしづつけた！

マグマの体はその攻撃に耐えきれなくなり、遂にその場で耳を割くような程の断末魔を上げながら、大爆発を起こした！

『ぐあああああ！！！！？？』

黒煙が立ちこみ、ドパントが居た場所には先程の男が気絶して倒れておりすぐ側には碎け散ったマグマのガイアメモリの破片が落ちていた。

これがこの街でドーパンに立ち向かえる唯一の手段、メモリブレイクだ。怪人に変身した人間を殺さず力の源であるガイアメモリだけを破壊する。

戦闘が終わり、翔太郎はドライバーからメモリを外し変身を解除。

フィリップもWの中に移していた意識が戻り、起き上がる。

ストーカーの犯人も後で翔太郎達と呼んだ警察に捕まり、女性は何度も二人にお礼を言いながら頭を下げた。

何はともあれ、これで今回の事件は一件落着である。

しかし、ここで翔太郎達は気づかなかった。

少し離れ木の陰から、一人の金髪の女性に先程の闘いをずっと監視されていた事に。

「アレが仮面ライダーね。噂でしか聞いた事無かったけど、あんなに凄い力を持つてるなんて・・・よし、使えそうね！」

女性は不敵な笑みを浮かべて自分の車に乗り込み、愛車のバイク、ハードボイルダーで去っていく彼らの後を追った。

「しかし、一体何時になったらこの街からガイアメモリは消えるんだよ」

「愚痴を吐いても解決しないよ翔太郎。ミュージアムが作っていたガイアメモリの数は底知れない」

ミュージアム。 1年前までこの街で市民にガイアメモリを密売していた秘密結社。

ガイアメモリ犯罪の根源であるミュージアムが消滅し、そしてそれを支援する財団Xが風都をさつてから1年が経過した。ミュージアムが独自に開発していたメモリは数知れず壊滅後も何処かのルートで「ミュージアムを継ぐ者」なるストリートギャングたちの手に渡り、彼らによってメモリはばらまかれ裏での密売は未だに続いて

いるのである。

「まあいいさ。どれだけドーパントが出ようと、この街を泣かせる奴は皆”俺が”相手してやる」

「”俺達が”、だろ？」

「おっと、そうだったな」

フィリップと翔太郎は互いにやけながらバイクを降り、事務所へと入って行った。

「亜紀子、戻ったぞ」

「あ、翔太郎君フィリップ君お帰り」

「貴方達が探偵さん？」

ふとこの事務所の所長、鳴海亜紀子の調子のいい声の後、聞き覚えのない声が横からしたかと思うと、部屋の端にあるソファーに金髪にセミロングの見知らぬ外人女性が座っていた。一目見た瞬間思わず翔太郎も口笛を吹きそうになるのを我慢してしまう程の美女であった。

「そうだが、あんたは？」

「まあ、お会いしたかったわ。わたしはエレナ・カーソン。今回貴方達に依頼したい事があるの」

とあるレストランの一席。

先程の3人のやり取り。

「ぷっはー！ いやあ、久々にたらふく食べたぜ！」

「ったく、トレイン！ お前少しはその大食漢何とかなんねえのか！ ランチ8皿も平らげやがって！」

「良いじゃねえか！ここ数週間の間ずっとインスタント生活だったんだから！ ちょっとくらい贅沢させるよ！？」

トレインと呼ばれた黒いジャケットの青年と白スーツの二人が言い争ってる事などお構い無

しに、金髪の少女は趣味の読書に時間を費やす。彼等がこの様にもめるのは日常茶飯事。なので彼女にとっては相手にするほど大した出来事ではないのだ。

青年の名は、トレイン^{サーター}ハートネット。

左の鎖骨部分に描かれたXIEIEIの刺青が特徴で、黒き装飾銃「ハーデイス」を操る凄腕のガンマンである。一見身勝手でひょうひょうとした男に見えるが、彼には暗い過去を背負っておりそれはその刺青に関係していたが、それはまた後ほど語るとしよう。

白スーツの男の名はスヴェン^{ボル}フィード。

この3人の中では一番掃除屋歴が長いベテランである。特殊武器を制作に手なずけており、掃除屋稼業に必要な装備を詰め込んだアタッシュケース型の自作武器「アタッシュウエポンケース」を常に携帯している。『女・子供・弱者には優しく』をモットーにしており、「紳士」を自称する。

もう一人は金髪の少女はイヴと言い、

あまり表情を表に出さない、読書好きで少し好奇心の強い物静かな

少女だ。

彼女は遺伝子に”ナノマシン”と呼ばれる極小の兵器を持ち肉体の一部を自分のイメージした物の通りに変化させる特殊能力を持つ。先程強盗二人の車をやっつけたのもその能力である。トレインからは色々あって”姫うち”の愛称で呼ばれている。

三人は先程の様に何時も巷を騒がす凶悪賞金首を日夜追い求める掃除屋と呼ばれる賞金稼ぎ。

今日もようやく捕まえた賞金首の強盗一味を捕獲し、手に入れたお金で久々の豪華な食事とするつもりだったが、何分このトレインと言う男が大食漢で調子に乗って5人分びランチを注文するものだからスヴェンは大激怒するのだった。先程も言った通りこう言う事は日常茶飯事で妙な気まぐれで賞金首を逃がす事もあれば、相手を捕獲する時に公共の産物をうっかり壊してしまったりと、この男のせいで折角手に入れた賞金も直ぐに底を着かせてしまう事は少なくない。

相棒とは言えスヴェンにとってトレインは正に言う事を聞かない扱い辛い飼猫の様な男だった。

「まったく仕方ねえ。また新しいターゲット探すか」

「そんな事言ってもスヴェン。この街で出回ってる賞金首の殆どが80万を超えないランク人達ばかりだよ？」

隣の席のイヴにそう言われ、怒りつかれたスヴェンは「ちっ」と舌打ちをする。煙草を吸おうとしたが、未成年の前で煙をふかす訳にはいかないと我慢した。

「どいつもこいつも。掃除し甲斐のねえ奴らだぜ」

「よし、んじゃあさこごドローンと危険度もギヤラもMAXな奴探

そうぜ。そうすりゃ貧乏なカップラーメン生活ともおさらばさ」

ニカツと自信ありげに笑うトレイン。掃除屋の仕事として、捕まえる賞金首にはそれぞれランクが着けられており、ターゲットが重罪になればなるほど、賞金額が上がる。勿論命にかかわる程その人物の危険度も上がる。

「私は結構好きだけどな……」

「姫っち……お前まだ若いんだからもう少し栄養のあるもの好きになれよ……」

「トレインの方こそいずれ肥満になるよ。そんな食べ方してたら」

「俺はちゃんと運動してっから良いんだよ」

そう言っつてコップ一杯の牛乳を飲もうとした時だった。

「ターゲット探しならいい情報がアルツすよ兄貴〜！」

突如後ろからお調子者気質な小太り気味の中年風男が現れ、3人を驚かせた。

「ウドニー！お前、何でこんな所居るんだ？」

「兄貴に助けてもらったご恩をあっしは忘れてませんぜ！兄貴達の為ならどんな所でも駆けつけやすよ」

男、ウドニーは豪華に笑いながらトレインの背中をばしばし叩き、そのあまりの様気ぶりに3人は少しこまりはてる。

彼はひよんな事から危ない所をトレインに助けてもらい、それに恩を感じた為今はこうして彼等の役に立てるよう情報やとなっているのである。

また、一見中年に見えるこの男、実はまだ20だと言っただから驚きである。

「で、今回は兄貴達に耳寄りな情報をお持ちしやした」

「耳より？」

「へい。兄貴達は”ギル・アルフィルク”って男をご存じですかい？」

「”ギル・アルフィルク”？」

「私知ってるよ。最近急激に拡大しだした巨大犯罪組織のボスだよな？前にリストで見た事ある」

「確か組織名は”コリオレイナス”とか言ったな」

巨大犯罪組織コリオレイナス。

武器や麻薬の密売、臓器移植等のあらゆる悪行に手を染め、裏の世界では名高い超極悪犯罪組織の一つである。

危険度Sクラス、賞金額も1000万イエン（トレイン達の居る国の通貨）と格段に跳ね上がった。

トレイン達もいずれは狙いに行こうかと目を付けていたのだが肝心の居場所も組織の情報が何一つ掴めないでいたのだ。

そんな状況の矢先に噂とは言え少しでもこの様な情報が舞い込んでくるのは有難い事だった。

「で、ウドニー。まさかソイツが今何処に居るのか知ってるのか？」

「あくまで噂なんすけどね？」

大物の情報を手に入れ胸を弾ませるトレインに聞かれ、ウドニーはニカッと笑いながら人差し指を立て、小声で彼らに話した。

（何でも、ジパングの”風都”って街に居るって話ですぜ？）

「フウトオ??」

あまり聞きなれない街名に3人は顔を見合わせた。

「成る程な。つまりエレナさん。あんたはFBIの秘密捜査官で、その”ギル・アルフィルク”って言う奴を捕まえる為に海外からはるばるやって来た。こう言うことだな？」

女性、エレナから大筋の話を聞いた翔太郎、フィリップ、亜希子の三人。

「ええ。奴がこの街の何処かに潜んでるって事は解るんだけど下手に警察を動かすと感ずかれて国外逃亡って事になりかねないわ。それで貴方達の力をお借りしたいの。もし見付けて逮捕できたら、報酬を増額するわ」

「はい！　ウチ等めっちゃ頑張るッす！」

エレナが”報酬”という言葉聞いた瞬間亜希子が満面の笑みで彼女の手を取る。エレナはちよつと困り顔で苦笑いした。そんな亜希子に翔太郎が湯を入れる。

「おい亜希子お！　お前金に目眩んでんだろ!？」

「まあまあ翔太郎。わかりましたエレナさん。その依頼僕たちが引き受けましょう」

「よかつたわ、これで交渉成立ね。じゃあ御互い何か掴んだらまた会いましょう」

そう言って、エレナは事務所を出て行った。

途端、エレナは不敵に謎めいた笑みを浮かべ呟く。

そして、ある程度所から離れた場所で、セミロングの髪の毛を引っ張り取り外す。いや、正確にはカツラを取り外すと、その下から鮮やかなパープルのショートヘアが露わになる。

「さて……後は頼んだわよ。仮面ライダーさん？」

彼女は遠くから探偵事務所を見つめながらウィンクした。

この風の街で、一体何が起ころうとしているのだろうか……

プロローグ（後書き）

プロローグでいきなり長い……。ですが、トレイン達と翔太郎達を目立たせるには仕方なかったと開き直ってます。

今回出てきた紫の髪の美女。黒猫ファンならもうお分かりですよ？

本作品もおそらく不定期連載になると思います。

? I 引き寄せるM / 来日する猫 (前書き)

前回言い忘れておりましたが作者は黒猫のアニメを最後まで視聴していません。

あと、トレインは原作の必殺技「レールガン」を持ってません。

今回は戦闘シーン無しです。ではどうぞ。

? I 引き寄せるM / 来日する猫

ウドニーから情報を貰ってから次の日の事。

14時間のフライトを終え、トレイン、スヴェン、イヴの三人は大物賞金首ギル・アルフィルク率いる犯罪組織「コリオレイナス」が潜んでいるとされる風都へとはるばるやって来た。

掃除屋は賞金稼ぎ。いかに小さな情報でもターゲットの居場所が掴めばどんな場所でもひとつ飛び。

繁華街を歩きながらトレインが気の抜けた声を上げる。

「うっは、ここが”ジパング”か。」

「トレイン、それは私達の居た国の呼び方だよ。 此処ではジパングの事を”ニホン”って呼ぶみたい」

「解ってるって姫ツチ。しっかしさあスヴェン、今更疑うのも何だけどよウドニーが言ってた事ホントに信用できるのか？」

「まず間違いないだろう。アネットもコリオレイナスが此処に潜んでるって情報を持ってたからな」

スヴェンが持っている資料を見つめながら答えた。

アネットとはスヴェン達とは知り合いのベテランの情報屋女性の事である。とある国のロシアと言う名の小さな町で「ケットシー」というカフェを営み、世界のあらゆる情報屋とのコネクションがある彼女には、トレイン達も何度も世話になっている。まだ情報屋としてのキャリアの浅いウドニーの話を知らせを、彼女に聞かせた後それが彼女自身も掴んでいる事が解り、トレイン達は直ぐに日本へ飛び立ったのだ。

「とは言ったものの、どうも引つ掛かるな……」
「なにがなのスヴェン？」

資料を見ながら少し苦い表情になるスヴェンにイヴが尋ねる。

「いや、だからあの話だイヴ。アネットの言ってた……」

「あの話……」

スヴェンに言われ、イヴは日本へ飛び立つ前に立ち寄ったケットシ
ーでアネットとの会話を思い出した……

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【ドーナツ？ カメラライダー??】

【アネットさん、それって一体?】

ウドニーから話を聞いたトレイン達は早速アネットの元へ足を運び、
ギルがこの風都に居ると言う事実を知った。

彼の目的、また街の何処に隠れて居るかは明確な事は把握できてい
ないが、そのような情報が入っているだけでも探しだす甲斐がある
と言うものだ。

しかし、風都が如何なるばしょなのか?と言う会話になったとたん
彼女から聞き覚えのない単語が飛び出したので、3人は同時に首を
傾げた。アネットは煙草をふかしながらその単語の意味を伝える。

【風都には、数年前から人間を凶悪な怪人、すなわちドーパントに変貌させてしまう”ガイアメモリ”ってアイテムが問題になってね。そいつは裏社会を通して街の住民に販売されてるのさ。そしてそのドーパントに勇敢に立ち向かう特殊なスーツに身を包んだ戦士を仮面ライダーと呼ぶそうだよ】

- - - - -

「・・・正直あまり信じられん。メモリで人が怪物なんてな。薬の方がまだ納得がいくぞ」

「何言ってるんだよスヴェンちゃん、俺たちだって散々化け物みたいな奴等と戦って来たじゃんか？ そのガイアメモリってのも要するに神氣湯しんきとうと似たような物だろ」

「いや、そうかもしれんが・・・」

溜息を吐きながらスヴェンは帽子に手を添えた。

神氣湯とは、道士タオシーと呼ばれる者へのみ制作でき、それを飲んだ人間に「道タオ」と言う人間を超越した特殊能力を備えさせる飲み薬の様なものだ。

飲んだとしても限られた人間にしか能力を手に入れる事が出来ず、才能無き者はそのまま命を引き取る、正に一か八かのロシアンルーレットな薬である。

トレイン達はその「道」の能力を宿した集団と何度も拳を交えており、今更そんな人間の原型すらない怪人など驚くに足りない気分ではある。

使えば超人的な力を得ると言う部分は確かにガイアメモリも神氣湯と似てはいる。

しかし、正直あれはこれまでの人生経験の中のほんの一握りの出来事に過ぎない。

何時も出会った賞金首達がそんな超能力者とは限らない。いや寧ろ普通の人間の方が格段に多い。

だがこの街ではそんな常識外れの闘いが犯罪として認識され、当たり前のように人々の生活の中に溶け込んでいる、となると流石のスヴェンも嫌気がさす気分だ。

イヴも正直な所、この街に来てからはいかせんアネットの情報を疑いたくなった。

風都は見たところ到る所に風車が見え、優しくそよ風が吹きぬく喉かな街だ。

その裏ではそんな恐ろしいアイテムが人々を狂わせている。

情報によるとガイアメモリは一度使用した者は、メモリの依存症に毒されて破壊衝動が強くなるという麻薬の様な物らしい。

「そんな物がこの街に出回ってるなんて……」

無理だと知っててもその情報がガセである事を祈らないと心苦しかった。

「しっかし、その仮面ライダーって奴はスゲーな。いつつもそんな怪物と戦ってんだろ？そんな奴が居るんなら実際会ってみてえよな」

しかし、そんな二人の心境を打ち破る程のお気楽なセリフを吐くトレン。そんな彼にスヴェンは「お前なあ。俺達は観光に来たんじやないんだぞ。直ぐにここいらの情報を集めて、ギルの居場所を掴まねえと。無関係な事には首突っ込むな！」と釘を指す。

トレインは「まあまあ」と軽くあし払った。

「それより腹空かね？今日は朝からまだ何もくってねえしさ。俺一度で良いからさ、”タコヤキ”って奴が食ってみたかったのよ！お、良い店発見。行こうぜ〜！」

「あ、おいトレイン待て！」

そう言つてトレインは近くにあるファミリーレストランに目を付けさっさと歩いて行つた。

彼は何時何処に居ても自分のペースを崩さない男なのだ。

「ああ！あの馬鹿、ホントに解つて……」

ぐ~~~~~

スヴェンがトレインに対し愚痴を溢そうとした時、彼のお腹が解りやすい音を出す。

「スヴェンもお腹すいてる」

イヴに指摘され、思わずひきつった笑みを浮かべる。コレでは紳士も何もあつたモンじゃない。

「アイツ……頼むから食費は浮かせるよな……」

ギルが見つからず、また捕まらなかつた時、などの無収入な事態を考へて、帰りの便の為に金欠だけは絶対避けたい。スヴェンはイヴを連れて急いでトレインを追つた。

一方、ギルの情報を探しに翔太郎と亜紀子は一息つく為に、トレイン達より先にそのファミリーストランに入店していた。

「い、いらっしやいませ！」

扉を開けたと同時聞えて来るのは、まだ新入りなのか緊張気味の若い店員からの挨拶と、昼のレストランらしい大勢の客の話声。

此処は最近出来たばかり味も申し分なく、今街中で評判の店らしい。

溜息混じりに席に付くふたり。

「なぐんにも手掛かり無しだね翔太郎君……」

「クインとエリザベスも今の所何も掴んでないらしいなあ……」

「何か「キーワード」を見つけないとフィリップ君の「地球の本棚」も使えないもんね……」

エレナから依頼を受けてから一晩明け、翔太郎は何時ものように街中を歩き回った。

しかし、今回の相手は海外から来日した犯罪組織の首領。

色々な知り合いに尋ねてきたが、流石に海外の闇社会まで知る者は少ない。

あの女性の言うとおりのかつに警察を尋ねれば何処から情報が漏れるか解らない。

同じ仮面ライダーである照井 竜や学生の頃から親しい刃野刑事などにも伝えたかったが彼等はド パント犯罪専門の超常犯罪捜査課ガイアメモリが絡んだ可能性のある事件でなければ彼らも動く事が出来ないだろう。

「ま、何にせよまだ依頼は始まったばかりだ。これ食ったら直ぐにウォッチャマンの所に行こうぜ」

「そうだね。ああ、アタシお腹ぺこぺこだよ」

ウォッチャマン、クイーンとエリザベスとは翔太郎とは仲の良い情報屋である。まだあと一人、一年中サンタ服のサンタちゃんという人物もいるが、皆これまで数多くの事件を解決に導く為のヒントを貰って来た頼もしい仲間だ。

もう直ぐ夏も近い季節と言う事で、外の気温も大分高くなったし今回の事件もまたまた骨の折れる事件になりそうである。

翔太郎がそう思った矢先。彼に災難が降りかかった。

先程の店員が二人の元へ水が入ったコップを持ち運んでいた。緊張しているのか少し焦っていた様子だった。

「い、いらっしやいませお客様、ご注文の方は・・・ってわああ！」「おわああ！！」

その時、途中で体制を崩し誤って持っていた水を翔太郎の服にかけてしまったのだ。

「ああ！この服まだ買ったばかりなのにい！？」

「す、すみません、すみません！！」

「お客様！ いかがなさいましたか！？」

騒ぎを聞きつけたこの店の店長も翔太郎達の元へと駆け付けた。

「全く何をやっているんだ君は！？ それに先程頼んどいた24番テーブルの片づけはどうした！？」

「す、すみません！本当に申し訳ございませんお客様！」

「あ、ああいえ。大丈夫ですから、あはは・・・」

水は全身翔太郎の上着全体に降り注ぎ、店員は何度も申し訳なさそうに頭を下げながら手持ちのハンカチで彼の服を嘖いて挙げた。

翔太郎はシヨゲてしまい、亜紀子も気の毒そうに彼を見た・・・

その頃、トレイン達は翔太郎達は一席開けて背中合わせの状態になる場所に座っていた。

「あの店員さん、何だかかわいそう・・・」

一生懸命やっててわざとじゃないのに怒られる店員を見て、イヴは同情の視線を向ける。

「仕方ないさイヴ。誰にだって失敗は付きもんさ。それで怒られても尚も立ち直っていくで同じ失敗をしない様にするのが大人になる近道なんだぞ」

まるで自分の娘を教育するような優しい口ぶりのスヴェンを見てイヴの方は熱心に耳を貸すも、トレインは心の中で（うわー・・・オヤジ臭え・・・）と少し冷めた目つきを彼に送っていた。

そんな時、トレイン達のテーブルに店員が注文の品を届けにきた。

「お待たせいたしましたー、ご注文のたこ焼きでございますねー」
「おお！キタキタ！」

トレインは待つてましたと言わんばかりにたこ焼きを串で刺し、パクパクと満足げにたこ焼きを口に入れて行く。

そう言えば、たこ焼きってどんな料理だ？ ふと日本の文化の一つを気になり出したスヴェンはイヴに尋ねた。

「なあイヴ。”タコヤキ”ってどんな食いモンか知ってるか？」

「たこ焼きって言うのは小麦粉の生地の中にタコの小片を入れて、球状に焼き上げた日本の料理だよ」

「タコ………もしかして、あのうねうねで不気味なアレか？」

「うん」

「はあ！？ この国の人間はあんなモン食うのか！？ おいトレイン待て早まるな！！」

スヴェンは日本には馴染みが無いので日本の文化もあまり馴染みが無い。海外人の彼からすればタコやナマコなどの得体のしれない者を食べる等、何かの罰ゲーム以外に考えられないのだ。しかし、そんなスヴェンの言葉など全く気にせず、トレインが二人にもたこ焼きを進める。

「大丈夫だってホラ。お前等も食べて見ろよ。イケるぞ？」

トレインは様気に串で刺したたこ焼きをイヴとスヴェンに見せつけた。朝から何も食べていない二人の前にたこ焼きのジューシーな香りが鼻をくすぐる。苦い顔を崩せないまま、スヴェンは黙って

それを受け取り、思い切って口に運ぶ。

「……………上手い……………な……………」

もぐもぐとじっくり味わいながら、スヴェンは正直な感想を述べる。イヴも「うん、美味しい」と思わず顔がほころばる。トレインは「だろぉ?」とニンマリした笑いを二人に向けた。

レストランの中は様々な客で溢れ、にぎわっていた。

幼い息子にお子様ランチ食べさせる両親、これから何処に行こうか話し合うカップル、次の仕事について同僚と話し合うサラリーマン達。

何時もと変わらぬ平和がその場には流れていた。

しかし……………平和と言うのは何時も唐突に乱される物である……………

突如、レストランに囚人服を着た一人の男が乱暴に入口を蹴り開ける。

いきなり持っていた銃を数発天井に向けて乱射し始めた。

電気が割れ、突然の出来事に辺りは一面騒然とし、レストランの中は一瞬にして客達の悲鳴の海となる。

男はすぐ側に幼稚園児くらいの少女を連れた母親を見つけ、突然彼女を突き飛ばし、片手でその少女を抱きかかえてこめかみに拳銃を突きつける

「騒ぐな！ 全員床に伏せろ！ 携帯持ってたら俺の見える所に置け！」

翔太郎達やトレイン達を含む、レストラン内の人間に一齐に静寂が広まった。

? I 引き寄せるM/来日する猫(後書き)

戦闘シーンは後少し先になります。この度はこの作品を読んで頂き、
ありがとうございます。

？ I I 引き寄せる M / 遭遇した猫

「全員その場に伏せて両手を頭の上に置き。騒げばどうなるか・・・
解ってるよなあ？」

男は拳銃で拘束している少女のこめかみを軽くつつく。

客達は全員男の言われたとおりに床に伏せた。

とらわれた少女は恐怖で全身を身震いさせ、消え入りそうな声で「
ママァ！」と母親に助けを求める。

「お、お願いです・・・どうか娘を・・・」

側に居た母親が目には涙を浮かべながら必死で呼び掛けた瞬間、男の銃弾が母親の右方を軽くかすめる。

母親は「きゃあー！」と小さな悲鳴をあげ身をかがめた。

「二度も同じ事言わせるなあ・・・死にたかあねえだろお？」

男の冷酷な対応に、母親はなすすべなく体を地面にうつぶせに倒し
両手を頭の上に乗せる。

最後に少女もクマの出来た目でギョロリと睨みつけて「お前も騒ぐ
なよ？」と再び拳銃で軽く頭をつつくと少女は小さく悲鳴を上げた
後、ピクリとも動かなくなった。

男はテーブルの椅子を入口の中央まで持って来て、ドカツとそれに
腰を下ろす。

銃身は常に人質の少女のこめかみに向けており、腕で束縛された彼

女は逃げる事も出来ない。

暫くして、外から数十台のパトカーのサイレン音が鳴り響いてきた。客は全員床に伏せているので外の様子が一向に解らない。だが沢山の足音が聞えて来ることから大勢の警官達が車から降りて来たのは解る。

警官の内の一人が外から店の中の男に対してメガホンを使って力強い声で呼び掛けた。

> 志藤雅彦しとうまろひこ！ お前はもう完全に包囲されている！ 大人しく当行しろ！<

志藤と呼ばれた男はそれ見て不敵な笑みを浮かべて「来たか」と咳く。次に近くで伏せていた店員の一人に携帯をよこすよう呼び掛け、それを使って警察に「こっちは人質が居る。今すぐ県外まで行ける逃走用の車を用意しろ」とよ呼び掛けた。

(志藤雅彦だと?)

両手を頭に乗せたままの翔太郎は、男の名前を聞いて何かを思い出したように反応した。

横にいた亜紀子が(知ってるの?)と小声で尋ねる。

(ニュースで見た事ある。二ヶ月前、覚せい剤の罪に問われて警官を2人も殺害した凶悪犯だ。どうやって脱獄したんだ?)

(そんな! ヤバいじゃん、そんな奴の人質にされてるなんて! 早く助けなきゃ!)

(落ち着け亜紀子、俺だつてそうしてえよ。けど迂闊に刺激したら不味いだろう?)

(そんな事言つてられないと思うよ。見てよあの子の顔)

亜紀子に顎で促され、翔太郎はテーブルの足の隙間から人質の少女に視線を移した。

少女は依然、犯人の腕の中でじつとしている。

しかしその事に翔太郎は違和感を覚えた。アレくらいの年の子ならもつと恐怖で泣き出し大きく騒いでもいい筈である。なのにこの子は随分と大人しい。どうしてか?

それは彼女の表情にあつた。

一件じつとしている様に見える彼女の体は、まるで氷でも貼り付けられたかの如く小さく震え、恐怖に引きつった表情で息が荒い。

翔太郎は直感した。彼女は今極限の恐怖心のお蔭でパニック状態に陥ろうとしている。

もしこのままあの状態が続けば、彼女が精神的に耐えられるかは保証できない。

事件が解決した後でもあの少女は両親以外の知らない大人に対しては、誰であろうと恐怖心を覚えてしまい外も出られないという後遺症が残る可能性がある。

亜紀子の言つとおり、一刻も早くあの子を急いで志藤の腕から離してやらなければ。

(しかし、どうやって……)

外の警察も人質が居るのを知っててつかつに動けないのだろう。歯がゆい気持ちで唇をかみしめながら頭をフル回転させ、この状況の打開策がえる。

一方、翔太郎達から少し離れた後ろの方では、同じく志藤に言われた通り地面に伏せるトレイン、スヴェン、イヴの三人が居た。

(くっそう。さっそく面倒に巻き込まれちまったぜ・・・)

スヴェンは呆れたように溜息をついた。面倒事は慣れっこだが、来日して初日にいきなりこんな事件に巻き込まれる事は全く予想していなかったのだ。彼はトレインに小声で話しかけた。

(トレイン、やっぱりこつから銃を狙撃するのは無理か?)

(出来なくはねえ。だが此処から奴を狙撃するには立ちあがるか移動するかしねえと・・・)

(いくらトレインでも、そんなあの子に対して危険すぎるよ)

イヴがトレインに言った。

地面にうつぶせに伏せながら、スヴェンの問いかけにトレインは冷静に状況を分析する。

志藤からトレイン達の距離は15メートルはある。トレインの腕前なら、ここからの狙撃などお手の物だろう。

しかし、彼の目の前には沢山のテーブルと椅子が立ち並んでいる。それにもし出来たとしても、志藤が椅子で座っている位置はレスト

ランの入り口の前の壁の前。おまけにしつかりと人質の少女を自分の体の前に持って来て盾にしている為、何処を撃つても兆弾した破片があの子に当たる危険性がある。

あの男、かなり用心深い様だ。

閃光弾を使って志藤の眼をくらましてる間に少女を救うと言う手もあるが、此処からでは距離が離れている為大した効果は得られないだろう。

やはり何よりも人質を無事救出する事が先決だった。

(くそ、落ち着け考えるんだ。何か手が有る筈だ……)

自称紳士としてあの少女を救わない訳にはいかない。歯ぎしりを立てたながらスヴェンが呟いた時だった。

(じゃあ・・・私に考えがあるわ)

((?))

不意に、隣に居るイヴが二人に告げた。

翔太郎は随分前にも、一度小さい女の子をドーパントに盾にされ、救いだした事がある。

その時は相手がド パントと言う事で、Wの力を使っていたが今回は犯人も自分も生身の状態。

今自分の目の前には、携帯として使っているスタックフォンを床に置いてあり、自分の手には腕時計型のスパイダーシヨックを付けている。

これ等は「メモリガジェット」と言い、普段は日用品の姿をしているが起動すると動物の様な姿で変形し自律行動がとれるようになるという、フィリップが開発した小型ロボットだ。

まずはこのスタックフォンを奴の元へ飛ばして、拳銃を弾き飛ばそう。

そのあと隙を付いて確実に志藤の動きを封じる為、このスパイダーシヨックのワイヤーで志藤を拘束する。

ここからならテーブルが陰になって志藤からは自分達の姿は見えない。

翔太郎は（よしこれだ）と頷き、すぐさま懐からガジェットを起動する為のギジメモリを取り出そうとした。

その時だった。

「待ってください」

「「!?!」」

不意に、後ろの方から声が聞こえた。

まだ小学生高学年くらいの

少女の幼い声だ。

亜紀子と一緒に後ろに視線を移すと、何と一人の金髪の少女が伏せの状態から志藤に呼びかけているのだ。

その少女、イヴの声に志藤も反応し視線を向ける。

「何だお前はあ？」

志藤は突如として目の前に現れたイヴに拳銃を突きつけた。眉間にしわを寄せ、赤く充血した眼で激し睨みつける。だが相手が自分より幼い子供だから舐めているのか、志藤は先程のような無駄な発砲をしない。

だがイヴにとつてはそつちの方が好都合だった。

志藤の行動にイヴは全く動じず、真つすぐと志藤の眼を見ながら言った。

「その子を離してあげてください。その変わり、私が人質を引き受けます」

少しだけ上半身を起こし、胸の中心に手をあてて訴えるイヴ。しかし、志藤はいかにも疑い深い目で彼女を睨む。

「お前が代わりにい？ 何の為に？ 人質はここに居る。お前と変わる事で、俺になんの得があると言っんだ？」

「前に一度、本で読んだ事があります。人間は極限までの恐怖に追い込まれると、その内発狂して手が付けられない状態に陥る程暴れだすそうです。その子を見てください。その子は今非常に大人しくしていますが、もしそうなった場合貴方にとって迷惑になるだけだと思いますか？」

志藤はギョロリと眼球だけを動かして人質に視線を移す。

少女はもはや余りの恐怖で顔面が蒼白の状態、膝の震えも尋常じゃない。確かにこのままコイツを連れて逃走しても後々ただ鬱陶しいだけの存在になるだろう。

「お前だったら暴れない自身が有ると？」

イヴは無言でこくりと頷いた。

「……………いいだろう。だがもし、変な考え起こしてたら……………お前、ただじゃおかねえぜ」

志藤は暫く考えたそう言つて、イヴに此方に来るよう拳銃で合図した。

ゆっくりと立ち上がり、彼の元へと足を進める。

「おい！ 何やってんだ嬢ちゃん！？ 馬鹿な真似はよせ！」

「そうだよ！ 危ないよ！？」

「静かにしやがれ！」

通り過ぎざまに、イヴに対し翔太郎と亜紀子は必死で止めるよう呼び掛けると、志藤に怒鳴りつけられる。

二人には訳が解らなかつた。自分よりはるかに年下そんな少女がこんな凶悪犯に立ち向かおうとする状況が直ぐには理解できず、とりみだす。

だが、そんな二人に対しイヴは視線だけ向けて小さく（大丈夫です）と訴えた。

翔太郎は不思議に思った。

何だあの女の子落ち着きよう。とても子供とは思えねえ。まるで今までもこんな状況と接してきたみてえだ……と。

(もう少し……もう少し近づいた所を……) ナノスライサー”で……)

イヴは志藤にゆっくりと近づきながら、少しだけ眉を歪めた。彼女だつてこの状況で全く緊張していない訳ではない。

志藤が自分を子供だと思つて油断するのは予想通りだった。

彼女のこれまでの掃除屋見習いとしての経験上、殆どの賞金首の相手が自分の「子供」という外見を見て油断している。

しかし、それでもイヴは最大限の注意を払つてこの男を刺激させない様にする。

ナノスライサーはその名の通り、ナノマシンの力を使いイヴの髪の毛の一部を短剣に変化させて相手に切りつける技だ。銃弾の様に無駄な破片を飛ばす事も無い切れ味抜群のこの技で、イヴは隙を付いて志藤の拳銃を切り落とす作戦なのだ。

だが……

「馬鹿かあ！ 胡散臭いんだよ貴様あ……！」

「……！！」「……」

この志藤という男、予想以上に用心深い男だった。

イヴが彼のすぐ目の前まで近づいた時、志藤は持っていた拳銃を振りかざし、力いっぱいイヴの顔面を殴りつけようとした。

翔太郎、亜紀子、トレイン、スヴェンはとっさの反応で一瞬立ちあがろうと腰を上げかける。

周りの観客も思わず目を瞑った。

しかし！

(変身、^{トランス}鋼鉄化！)

志藤にとって信じられない出来事が起こった。

理由は、イヴの顔面が一瞬にしてメタリックな鋼鉄に変貌したのである。

「!? な、何い!??」

その硬い顔面に向かって力の限り殴り付けられた拳銃は、ぶつかつた衝撃で後ろにはじき出された……

そして……

「やっと銃が離れたな……人質からさあ！」

ドンー!

「うわあ!？」

その一瞬の隙を付いて、立ち上がったトレインのハーデイスの銃弾が男の拳銃を見事に撃ち抜いた!

空中に放り出された志藤の銃は、再度トレインの数発の発砲により直ぐに使い物にならない物となった。

「くっつ……このやるおおおお!!」

湧き上がるストレスを前面に押し出し、志藤は邪魔な人質の少女を適当な場所に突き飛ばして再びイブの顔面を殴り飛ばそうとした!

イブも素早く反撃態勢をとろろしたが……

「おりゃあああああ!!」

ドゴおお!!

「ぐはあああ!？」

横から現れた翔太郎の強力なとび蹴りが志藤の顔面を捉えた! 志藤の体は大きく横に吹っ飛び、頭を壁に強打。意識を失い、そのまま地面に寝転んだ。

「まったく、子供に手を上げるなんてつくづく性根の腐ったヤロウだな。大丈夫かい小さなクールビュウティ?」

「は、はい・・・」

着地した翔太郎は帽子を軽く振り払いながらイブの安否を気遣う。イブは意外な助っ人の存在に豆鉄砲を食らったような表情で返事した。その後ろでは亜紀子が人質だった少女を母の所まで連れて行き、優しく頭を撫でてやっていた。

その瞬間外から「突撃ー！ー！ー！」という機動隊の隊長らしき声が聞こえ、数十人の機動隊員達が一齐に押し寄せ倒れていた志藤の周りに寄せ集まった。どうやら彼らも何らかの方法で店内の様子を探っていたらしい。それをみた翔太郎は「後は警察の仕事だなあ」と呟く。

遠くからずっとこの様子を見ていたスヴェンは事が終わるのを確認すると、はあああつと息を付き「心臓に悪いぜ・・・。」とすっかり安心したように煙草に火を付けて座り込んだ。

イブを一人で志藤の前に出させるのは気が進まなかったが、イブ自身の強い要望とトレインから「同じ仲間なら信じてやれ」という言葉とに押され、やむなく彼女の行動を許可したが、心配する必要は無かったようだ。

「よう、無事か姫っち」

歩み寄って来たトレインに、イブは「うん」と頷く。トレインはハーデイスを片手で器用にくるくる回しながら右太ももの掘るスターに仕舞うと直ぐに翔太郎の方を向いて話しかけた。

「ありがとな、ウチの姫っちを守ってくれてさ」

「いや、それ程でもねえよ。しっかし、その嬢ちゃんも含めて随分とクールな事するんだなアンタ等。一体何なんだ？」

「俺達は、掃除屋さ」

「掃除屋？　なんだそ

」

「ってアホオオオオかああああ！！」

スパパパーーン！

「「いてえ！？」

「いたっ！？」

翔太郎が最後まで言い終わる前だった。突如として後ろから亜紀子が氣勢を上げながら「天誅！」と書かれた緑のスリッパを両手に、翔太郎、トレイン、イブの後頭部を連続で力いっぱいひっぱいた！ スリッパはスパパーーン！と綺麗な音とともに三人の後頭部にクリーンヒット。後頭部を抑えるトレインとイブの前に亜紀子はそのまま仁王立ち。

「ちよつと君！　幼い子供に何て事させちゃってるのよ！　保護者だったら保護者なりにしっかり面倒見らんかあい！　そこのお譲ちゃんも自分のやった事反省して！　翔太郎君も何が「小さなクールビユウテイ」よ！　大人としてここはしっかり注意すべきじゃないの！？　そんな奴等はどうじゃ！　あたたたた！！」

「ててて！　おい亜希子お！　知らない人にまですっぱたくなあ！」

亜紀子は両手のスリッパで3人の後頭部を連続で叩きまくる。

色々な意味で強烈なキャラクターの突然の襲撃に、翔太郎は慣れるからともかくトレインとイブはタジタジ。

遠くで見ていたスヴェンも彼女には思わず近寄りたいたいがした。

その時だった。

マグネット！

「！！？」

「？！」

突如、翔太郎と亜紀子には聞き覚えのある機械音声が店内に鳴り響いた。「地球の記憶」を表す電子音声・ガイアウイスパード。急いで聞えて来た場所に視線を向ける。トレイン、イヴ、スヴェンの三人もそちらに顔を向ける。何かヤバい事が起ころうとしている。長い間掃除屋として危ない道を渡り歩いた直感からの反応だった。

聞えてきた場所は………志藤を取り押さえた機動隊の集団の中心！

瞬間、機動隊達の体が一丸となって辺り一面に吹き飛び、床や椅子の上、テーブルの上などに倒れ込む。

そして、警官隊達が吹き飛ばされた中心、つまり志藤が拘束されていた場所。

そこには脱獄犯、志藤の姿は居なかった。

代わり、両手には巨大な「U」の字型の磁石、後頭部には背中と直結したチューブの様なコードが何本も付いており、頭部、胸部、両肩等には巨大なボルトが刺さっており、

その外見はまるで磁石と人間が一体化したような怪人が姿を現した。

これぞ志藤が「磁石」の記憶を持ったメモリで変身した、マグネツト・ドーパントである。

> i 2 8 5 3 9 — 1 2 7 8 <

『まったく仕方がねえなあ……これはあんま使いたくなかったけどよお……』

イラついた様に片手で頭を掻き巻くマグネツト・ドパントを見て、他の人質の観客達は一目散に店の中から出て行った。

遠くから怪人を見ていたスヴェンは目を開いた。(おいおいマジかよありゃあ・・・)と。

それはイヴ、トレインも同じ考えだった。

「アレが、アネットさんが行ってた・・・」

「・・・ド パントって奴か」

確かにイヴが持つナノテクという技術や、「道」なども人間を極限の肉体を変貌させる能力が有るのは3人の知識にもあったがこの目の前に居るドーパントなる怪人はその中のどれにも属さない、全く未知の能力。

マグネットは、少しだけ呆気にとられた3人にゆっくりと視線を移した。

『さつきは痛かったぞお？。だから・・・まずは貴様等から消えろ！』

そして気絶した警官達の背中を踏みつけて一歩前に出る。

自分達を狙ってる！トレインはその一歩を見た瞬間に、すぐさまホルスターの銃に手をかけ、イヴも肉体の一部を剣に変化させる為、右手を光らせる。遠くに居たスヴェンもトランクの中からガトリングを露出させてドーパンとに狙いを定める。

ドーパントが次の一步を踏み出すまでのホントに一瞬の出来事だった。

トレインがド パントの胸部に狙いを定めた。

スタツグ
スパイダー

だが彼が発砲する前に、翔太郎のスタツグフォンとスパイダーショットクがドーパントに体当たりを仕掛けてきた。

『うわああ!?!』

小さいながらも中々の闘いぶりのガジェット達にドーパントも怯む。

銃弾を撃ちそびれたトレイン達とド パントの前に、翔太郎が立ち上がった。

「へっ。ドーパントが相手なら、容赦は要らねえな。アンタ等、掃除屋だかクリーニング屋だか知らねえが此処は俺達に任せといてくれ。フィリップ!」

トレイン達の「誰がクリーニング屋だ!？」と言う突っ込みは無視して、翔太郎はドライバーを腰に巻き付けると、側に知人が居るわけでも無いのに翔太郎は誰かの名を呼んだ。しかしこれは決して一人言等ではない。このドライバーを装着したことで、彼の声は世界中何処にいても一人の相棒の所まで伝えることが出来るのだ。その相棒、フィリップは翔太郎の居るファミレスから数キロ離れた鳴海探偵事務所の地下倉庫でギルについて調べていたところで、自分の腰にドライバーが現れる。昨日も一戦あったのに今日もか?と言う感じにフィリップは軽い溜め息をついたて。

「ふうー。翔太郎が愚痴を吐きなくなる気持ち解る気がするよ」しかし、だからと言って戦いを辞める気はフィリップにはもうとう無い。

少なくともこんなことは今となって始まった事では無いのだから。フィリップは黄緑色のサイクロンメモリのスイッチを入れた。

サイクロン!

ガイアウイスパアが鳴り倉庫中に鳴り響く。翔太郎も同じ様にスイッチを入れる。

ジョーカー!

そして二人ともほぼ同時にメモリを自分達の方の前で構え勢いよく叫ぶ。

「「変身!」」

サイクロン！ ジョーカー！

フィリップがサイクロンメモリをドライバーに差し込む。次の瞬間、そのメモリは消え翔太郎のドライバーの右部に現れ、装填。右側に翔太郎のメモリを装填すると、最後はメモリの部分のドライバーを「W」の字のような形になるよう両手で展開した。

瞬間、室内だと言うのにも関わらず、突如強い風が吹き荒れた。

「な、なんだ！？この風は！」

「一体何がどうなって・・・！」

「トレイン、あれ！」

「！」

トレイン達を見た。

目の前で翔太郎の姿が人ではない何かに変わっていくのを。

風は止んだ時、そこには銀色のマフラーをなびかせ、右が緑で左が黒く塗られた一人の戦士が立っていた。

『お、お前は！・・・まさか！？』

ド パントはその姿を見てたじろいだ。

何故なら今自分の目の前に居る戦士は、この街を脅かすド パント
犯罪を幾つも解決してきた戦士としてこの街では広く知れ渡って
いたからだ。

『そう・・・僕達は二人で一人の仮面ライダー・・・』

「仮面ライダー・・・ダブル！」

「アレが・・・」

トレインもその戦士の後ろで言葉を募らせた。その内見て見たい
とは面白半分で言っていた物の、まさかこんなに早く出会えるとは
・
・

真近で見て改めて解った。こいつはただ者じゃない、と・・・

そして次に「W」と名乗った戦士はドーパントを指差しこつ言った・
・

> i 2 6 6 4 1 | 1 2 7 8 <

「さあ、お前の罪を数えろ！」

コレが、伝説の黒猫と風の戦士の初めての出会いだった……

？ I I 引き寄せる M / 遭遇した猫（後書き）

今回出てきたマグネット・ド パント、勿論僕のオリジナルです。

にしてもどうして自分の描く権板イラストってこんな「誰？」みたいな物にしかないのか・・・？

ドーパントのイメージイラスト、追加しました。

配色はよく見かける磁石っぽく赤と青をイメージ。ただ磁石に見えるかコレ？

? I I I I 引き寄せるM / 共闘する猫 (前書き)

今回はWファンの皆さんお待ちかねのあの人も登場。
戦闘シーンオンリーでお届けします！

? I I I 引き寄せるM / 共闘する猫

『はじめて見るドーパントだ。翔太郎、まずは様子を見る形で仕掛けて見よう』

「ああ。さあて、覚悟しなあ！」

突如現れた仮面ライダーに戸惑うマグネットドーパントの胴体に向かって、Wは強烈な正面突きを叩きつける。はじめは右の拳、次に左の拳、また右、左。一発一発喰らわす毎にドパントは『ぐほっ!』と苦しそうな声を上げる。反撃に此方も拳を振り上げるがWは動きから先読みし巧みにかわし、背中に回し蹴りを入れてドパントを床にうつぶせに倒す。

『ぐああ! クソお。こんな奴相手に出来るか!』

直ぐに起き上がったドーパントは直ぐに身を翻し店の窓を割って外へ飛び出した。

「あ、待て逃がすか!」

「わわ、ちよっと待ってよ二人とも!」

『亜紀ちゃん、君は照井 竜に連絡してくれ。一緒の方が奴を捕まえやすい』

「え? あ、うんわかった!」

ドーパントのあとを追うW。そして亜紀子はスタッグフォンを耳に当てながらWを追う為店の外へ出て行った。

店内に残されたトレインとスヴェンとイヴの三人。

周りには無造作に散乱した食器と気絶した警官達が倒れているだけで、先程の騒ぎが嘘の様に静まり返った。

「……え、ええつと、さて。あの怪人は”仮面ライダー”
って奴に任せておくとして、俺達はさっさとギルの居場所を

「待ってスヴェン」

「ん？何だイヴ。まだ食い足りないのか？」

またおかしい事件に巻き込まれる前にさっさとその場を立ち去ろうとするスヴェンだが、彼の言葉は目の前を立っているイヴに遮られる。イヴはくりりとスヴェンの方を向き直り、こう言った。

「私、あの人達に加勢してくる」

「成程、加勢ね。っつてはあ！？ 何で!？」

思わず目を丸くして声を裏返してノリ突っ込み。正直言ってこれ以上予定にないゴタゴタには付き会いたくないのが本音だ。イヴは尚もスヴェンの目をキリツと見て答える。

「だって、あの人達私の事助けてくれたよ？ 自分を助けてくれた人にはお礼しなきゃ」って、スヴェン何時も言ってるよ？」

表情の歪む事が少ない彼女だが、この時は何時も掃除や活動を行う時と同じ様に戦士の意思を持った目だ。

スヴェンは「そ、そうだけどさ・・・」と歯切れが悪そうに頭をか
く。相手は未知の怪人。幾らナノテクの力を持つイヴでも上手い
事気が進まない。そんな彼に対しトレインも言う。

「まあいいじゃねえかスヴェン。さっきも見たろ？ イヴはもう大

分掃除屋の面影が付き始めてんのさ。有る程度好きにさせてやれよ。俺も付いて行くからさ」

「トレイン……」

「は……解ったよ」

相棒二人がかりの頼みにスヴェンも遂に折れてしまう。イヴは嬉しそつに「ありがとう！」と例を言っかけて出す。

「おっしゃあ。って訳で残りは払っといってくれよ」

「え？ あ、てめえ！そりゃねえだろー！ー！？」

トレインも笑いながらスヴェンを置いて店を出て行った。

「トレイン、さっきはありがとう……」

レストランを飛び出し、オフィス街を走り抜けるイヴは隣を走るトレインに素直に礼を言った。まだ正式なライセンスは取得していないが、自分は随分長い事掃除屋としてやってきた。

スヴェンは心配してくれるのは嬉しいが、自分は早く一人前になりたいと思っている。その為には実戦を多く経験しなければならぬ。そんな自分の為にスヴェンを引き止めてくれたトレインにイヴは今感謝していた。イヴが出会う前からスヴェンの相棒である彼は、自分にとってはライバルの様な存在であり、越えるべき相手して彼女は認識していたのだ。しかし、同じ仲間として感謝すべき時は感謝する。それがイヴと言う女だった。

そんな彼女に対し、トレインは二カツと歯を見せて笑顔を見せる。

「んあ？別に気にすんなよ。あの志藤とか言う野郎には俺もムカッ

いてんのさ」

「ム力ついでる？」

「ああ。あの野郎、流れ弾で俺のたこ焼き台無しにしゃがって。ちよつと痛い目みせねえとな！」

「・・・・・・・・馬鹿」

先程までの感謝の気持ちを返せ。そんな気分になったイヴは小さく頬を膨らませてさっさとトレインを追い越していった。

「お、おい姫っち、何怒ってんだよお!？」

訳も解らずトレインも走る速度を上げた。

幾つもの建物の屋根を飛び越えるド パントを追い求め、Wは巨大な屑鉄工場へとたどり着いた。ドーナツはそこで足を止め、キツソツに息を荒立てる。

『ぜえ、ぜえ・・・・・・・・』

「さあて鬼ごっこは終わりだ。大人しくメモリを渡して刑務所に戻んな」

追いついたWはドーナツに向かって右手を差し出す。

「左！」

と、ここでWの後ろから赤いレザージャケットを着た若い男が現れ

た。男は機械部分が露出した剣を重そうに抱え、Wの側まで来た所でそれを地面に突き刺した。

「照井、来てくれたのか」

「所長から連絡があった。俺も手を貸そう」

照井 竜

風都警察署頂上現象犯罪科に勤務する若き刑事で、翔太郎達とは良く行動を共にする仲だ。

照井は懐からバイクのハンドルの様な形をしたベルト、アクセルドライバ―を取りだし、腰に巻き付いた。

次に片手で赤いメモリを構え、スイッチを押してガイアウイスパーを鳴らす。

《アクセル！》

「変……身！」

掛け声のあとに照井はメモリをドライバ―の中心にセット。

《アクセル！》

アクセルドライバ―のハンドルからバイクのエンジン音を響かせ、瞬間彼の体は全身深紅の装甲を身に纏った戦士に姿を変える。

これが照井竜のもうひとつの姿。風都にすむもう一人の仮面ライダー、仮面ライダーアクセルである！

アクセルは地面に突き刺していた剣、エンジンプレードを引き抜き、

マグネット・ドーパントに向けた。

「志藤勝彦、知らせを聞いた時はどうやって脱獄した気になったが、かやはりドーパントが絡んでたか。どうやってそのメモリを手に入れた？」

アクセルに問われたドーパントは、不気味な笑い声を上げる。

『へ……へへへ……言うと思うか？』

「なら力づくで聞くまでだ。左、フィリップ、行くぞ」

『わかった』

「ああ。熱いお灸を添えてやる！」

『っけ、お断りだ！』

ド パントがそう叫んだ時だった。突然Wの目の前に建築物の骨組みに使うような鉄の柱が飛んできて彼の体を十数メートル程吹き飛ばした。

「ぐはあ！」

「左！？」

自分の身長のおよそ2・3倍はありそうな鉄の柱に突き飛ばされ、Wは壁に激突。

先程の柱が自分の腹の上に倒れ動きを防がれる。

「おのれ志藤お！」

隣に立っていたアクセルはエンジンブレードを構えながらマグネットの胴体へ駆け寄り力いっぱい何度も切り付けた。

しかし、その攻撃は突如ド パントの体表面に張りついてきた大量の鉄屑によって防がれる。

「何い!？」

『テメエも追われる身になれ!』

そう言うと、ド パントに張り付いていた鉄屑達が一斉に体から離れ、アクセルのボディに次々と接触。それに怯んだアクセルと、動けなくなつたWに向かつてドーパントは片手の巨大磁石から電流を発生させ、アクセルを攻撃した。

「うあああああ!?!？」

「『ぐあああああ!?!』」

苦しそうに叫ぶアクセルとW。電流が止むと、周りに捨てられていた彼の周りに捨ててあつた壊れた自転車や車、ネジや釘、刃物等が大量に浮きあがり、それが次々とWの元へと突進してきた。全部集めれば恐らく大型トラック一台分の量だろう。そんな量の鉄屑に普通の人間押しつぶされれば、全身骨折で一発である世行きである。

「やべえ!?!」

Wは乗しかかっていた鉄の柱を蹴り飛ばし何とか立ちあがり、アクセルと一緒に横へ転がって鉄の攻撃を回避する。だが追撃はそれだけでなく、鉄屑達は空中で方向を転換し、Wとアクセルに向かつてホーミングしてきた。

二人は目の前に有つた鉄屑の山の陰に隠れて何とか襲つて来た鉄屑をやり過ごした。

だがドーパントの追撃は続き、周りに有つた鉄屑達も再び2人に向

かつて飛んできたので、尚も二人は逃走を続ける。

「クソ、このままでは近づけん！」

『奴は磁石となりうる鉄を自由自在に操っている。接近戦は不利だ！』

「なら遠距離戦だ！」

サイクロン！ トリガー！

ジェット！

フィリップに忠告されて、Wは右片方のメモリを「銃撃手の記憶」を宿したメモリ、トリガーメモリに差し替えボディ半分が青色のサイクロン・トリガーへと姿を変え、拳銃型の専用武器、トリガーマグナムを取り出し、アクセルもエンジンブレードにメモリをセットする。

二人は一旦散開し、お互い走りながらドーパントに向かってそれぞれの飛び道具攻撃を仕掛ける。

Wはトリガーマグナムの銃弾、アクセルはブレードの切っ先からエネルギー弾を猛スピードで乱射する。

ドーパントはそれを周りの障害物を盾にしながら走ってやり過ごす。

『は、はははは！ どうしたもつとちゃんと狙えよお！』

「ならお望み通りに！」

ルナ！ トリガー！

Wは再びメモリを変え、今度は体右半分を「幻想の記憶」を宿したガイアメモリの肉體、ルナに変化させ、トリガーマグナムの銃弾を障害物を避けドーパントにホーミングさせる。

『無駄だっつってんだろ!』

だがその銃弾もド パントが自分に引き付けた廃車の破片達によって防がれる。

ド パントは隙を付いて、両手の磁石から稲妻を発生させ、それをアクセルのエンジンブレード、Wのトリガーマグナムに向けて発射した。

稲妻は見事二人の持つ武器に当たったかと思うと、それが宙を舞ってド パントの手に渡ってしまった!

「っっ!?!」

『はははは! 駄目だよ、ヒーローが武器何か使っちゃあ』

高笑いを上げた後、ドーパーントは『おらおらあああ!』と叫びながら二人に銃弾を浴びせた。

「うわああああ!」

「がああああ!?!」

ルナトリガーによる追尾弾を数発浴びせた後、今度は片手の磁石を二人に向け磁力の力を使って急接近すると通り過ぎる瞬間を見計らって、Wとアクセルをエンジンブレードで斬り付けた。激しい痛みによって体を地面に倒すWとアクセル。

最後にド パントから再び電流を浴びせられ、二人の体に周りの屑鉄達が纏わりつき身動きが出来ない様にされる。

『滑稽だな! ヒーローが鉄屑共にもて遊ばれてやがる!』

「ち、ちくしょう……」

「強い……こいつホントに只の脱獄犯か？」

『翔太郎！照井竜！　しっかりするんだ！』

鉄屑の山に押し掛かれ苦しそうな声を上げるWとアクセル。　どれだけ押しつけようとしても、その量が多すぎて身動きが取れない。
ド　パントはそんな二人を見てさぞ喜ばしいように笑い出し、自分の力に酔いしれた。

『くつくつく……すげえ……すげえな、このガイアメモリって奴は！　こんな力が引き出せるなんて……！　はっはっはっは！
仮面ライダー！　何故俺が店を襲撃した時にコレを使わなかったか解るか！？』
「何？」

突然問われてWは首を傾げた。　確かにコレだけ強力な力を持っているならば、はじめからド　パントに変身していた方が店を襲撃しやすい。　いや、むしろ一々人質なんて使わなくてもメモリの力を使えば警察達の手から簡単に逃れられた筈である。
不思議に思うW達にド　パントは尚も語り続ける。

『それはな、お前らに出会ったのが恐かったからさ！　俺はこう見えても臆病でね、お前らは今まで何人ものド　パントを倒して来たそうじゃないか。　そんな強い奴を相手にするのはごめんだ。　それに最初はこのメモリの事も実際に使ってみるまでは信用出来なかったんだ。　だからあんな風に人質なんていう姑息な手段を使って逃げればお前らに出くわす事も無いと思っただ。　だがあ！　今の闘いで、俺に自信が引付いた！　俺は強い！　お前ら仮面ライダーにも引けを取らない程に！　自身の付いた俺は強いぞあ！　今此処でお前らを潰し、永遠に逃げ切つてやるんだあ！』

「志藤、警官を二人も殺しといて逃げようつてののか!？」
『殺しただと? ふざけんな。アイツ等は俺を追いかけた時自分で階段を踏み外したただけだ』

ド パントの話を聞いてWは隣に居るアクセルに「本当か?」と尋ね、彼は頷いた。ドーパントの言った事は本当で、2カ月前に志藤を追いかけた警官二人の遺体には頭を強く打撃した跡が見られ、志藤はその次の日に別の警官の手によって逮捕される。彼が殺したという話は、状況が状況だった故にいつの間にか世間ではその様に認識されるようになったらしい。

「だがその警官達はお前を追って命を落としたのは事実だ。大人しく罪を償え」

アクセルに所に戻るよう促されえたド パントは彼にどなり散らした。

『知った事か! たかが二人死んだくらいで何だと言うんだ。奴等は自業自得つてやつだろ!』

「何だとてめええ!!!」

『翔太郎、彼はメモリの浸食により破壊衝動が強くなっているんだ、今は何を言っても無駄だよ!』

志藤の全く反省の色のない発言に、Wは怒りに燃えた。確かにフィリップの言うとおり、メモリのせいで軽率な発言をしてしまったのかもしれないが、それでも命をこつても軽々しくするような今の言葉が翔太郎には許せなかった。今すぐコイツに一度痛い目を見なきゃければ。だがそんな気持ちをあざ笑うかのように鉄屑の山が自分達にのしかかり身動きが取れない。コレではドライバーにエクストリームメモリも装着出来ない。

『おっと、おしゃべりが過ぎたな。そろそろ止めだ』

ド パントは持っていた二人の武器を乱暴に投げ捨て、「ううううん」と唸りながら持っていた磁石を直ぐ側に止めてあった4tもありそうなトラックに向けた。

すると、トラックはゆっくりとドーパントに向かって吸い寄せられ、やがて止まる。

彼は次の瞬間この巨大なトラックを2人の体に打ちつけるつもりだった。

だがWもアクセルも今は激痛で起き上がる事が出来ない。あんな巨大な物が今の彼らにのしかかればひとたまりも無い。

『潰れるやあああああ！！』

そんな事はお構いなしに、ド パントはWとアクセル向かってトラックを投げつけようと腕を振りかざす。

絶体絶命の状況に二人は仮面の中で思わず目を伏せた時だった。

ドン！ドン！ドン！

『どあああ！？？』

「『！？』」

突如マグネット・ドーパントの背中に何処からともなく3発の銃弾

が浴びせられた。

それに怯んだせいか持ちあげていたトラックはW達の元へ届かず轟音と共に地面にたたきつけられる。

『誰だあ!』と怒りに満ちた声をあげながら銃弾が飛んできた方角を振り返る。

そこには先程店で自分を邪魔した拳銃の青年が立っていた。距離はドーパントから15メートル程。

「何だ、あの男は!?!」

「あ! アイツはさっきの」

『確か掃除屋と名乗っていた・・・』

アクセル、W、そしてWの中のフィリップも驚いてその青年へ視線を向ける。

「あらあら・・・あんま効いてねえや・・・」

青年、トレイン、ハートネットはドーパントの肉体が予想以上に頑丈だった為に少し苦い顔をした。

相手が人間じゃないと言う事で躊躇なく発砲したのはいいが、長年の相棒である銃の効果が薄いと言うのは軽くショックである。しかし、敵の注意が仮面ライダーから此方にそれてくれたので今の発砲も無駄ではなかった。

『きさまああああ!!! また俺の邪魔をするかああああ』

見ず知らずの人間に幾度となく邪魔され、ドパントの怒りはもは

やピークに達していた。

右手の磁石から再び電流を走らせ、それをトレインのハーデイスに命中させた。彼の銃を奪う為に。

「どわつと!?!」

『喜べえ、俺がお前の愛銃で葬ってやるよお!』

そう言つて、瞬時にハーデイスがトレインの手から離れ一瞬でドーパントの磁石に張り付いた。

が、トレインは「掛つたな」と余裕の笑み。

その理由はドパントの磁石に張り付いたハーデイスにあった。

トレインは銃が手から離れた瞬間グリップ部分に付いているワイヤーを片手でつかみ、銃と繋がっているワイヤーはそのままゴムの様に伸ばした状態でハーデイスだけがドーパントの磁石にひつついたのだ。『何!?!』とドパントが気づいた時には既遅し。トレインはそのワイヤーを張り付いドパント毎横へ振り回し、彼の空をコンクリートの柱に叩きつけた!

『があ!?!』

壁に当たった衝撃で、磁石からハーデイスが離れ、トレインはワイヤーをひっぱつて素早く自分の手の元に戻す。

『こ、この野郎おおお!?!』

ドパントは直ぐに立ちあがると、周りに有った屑鉄を空中に浮かせトレインめがけ突進させた。

数百個以上の曲がった鉄パイプや細かく壊れた何かの部品、釘やネ

ジなどがトレインめがけて突進する。

しかし……

「おっと」

トレインはそれを澄ました顔でハーデイスではじいてしまった。
これにはド パントも驚いた。

『ば、バカな！？ 銃弾と同じスピードだぞ！？』

尚もド パントは細かい鉄屑を飛ばすも、トレインは素早い手さばきでどの攻撃も受け流してしまう。しかもこのハーデイスは「オリハルコン」と呼ばれる特殊な金属で出来ている為、コレだけの攻撃を受け止めても銃自体には傷一つ入らないのだ。

「何と言う奴だ……あの男、生身でド パントと張り合ってるぞ！」

「ああ、只モンじゃねえな……」

『彼は一体……』

トレインの凄まじい戦闘力に、ガラクタの下敷きになったWとアクセルも思わず茫然。

そんな時、突如ゴミ捨て場の入り口から巨大な装甲車が現れ、彼らの上に乗ったガラクタ達を弾き飛ばした。何が起こったのか確認すると直ぐ人達の目の前で、W専用の高速移送装甲車、リボルキヤリーが急ブレーキをかけているのが目に入った。そのリボルキヤリーのコックピットのハッチが開き、中から鳴海亜紀子が慌てて飛び出してくる。

「竜君、翔太郎君フィリップ君、皆大丈夫!？」

「亜紀子!」

「すまん所長、助かった」

リボルキャリーのお蔭で自由が戻ったWとアクセル。直ぐにドーパントの元へ向かおうと向き直った時、トレインの腹部の上に鉄の柱が乗っかって身動きが取れないのを確認した。ハーデイスを持って片手に大量のガラクタ達が張り付いき、発砲する事が出来ないようだ。

『馬鹿が。俺の電流を受けたその銃は既に周りの鉄を惹きつける磁石となった。そんな状態では幾らは銃で弾こうが鉄達はお前の銃にまとわりつく』

「ちい!」

「まずい、急ぐぞ左!」

「おう!」

Wとアクセルも急いでトレインの元へ駆け寄ろうとした時だった。

「動けない人を攻撃するのは……卑怯だよ!!」

不意に頭上から声がしたと思うと、長い金髪が特徴の少女が自分達を飛び越えて行った。イヴだ。

彼女は両手を变化させて作った巨大なハンマーを空中からドーパントの後頭部に叩きつける。

が、ふいに気配を感じたドパントはそれをかわし、イヴのハンマーは地面にめり込む。

ド パントはイヴの姿を見て愉快そうな笑いを上げた。

『ああ？ はは、なんださっきのガキか。 成程、テメエはどうしても俺から痛い目見ねえと気がすまねえらしいなあああああああああああ！！』

ド パントは両手の磁石に近くに捨ててあった三角形に尖った鉄の破片を両手にひっ付け、それでイヴに向かって切った。

だがここで、イヴの長き金髪が光り輝き、次の瞬間髪の毛が二本の剣に形を変え、ド パントの攻撃を受け止めた。彼にとってはまたも自分の眼を疑う出来事である。

ド パントは両手で鉄の破片突きのラッシュを浴びせるが、イヴもどンドンそれを弾き、最後は右手に出現させたランス（槍）でド パントを突き飛ばした。

宙を舞うド パント。その彼にハーデイスで狙いを定めるトレイン。

「ナイス姫たち。 御蔭でガラクタを退かす時間が稼げた」

『な、何い！？』

「さっきのお返し！」

ズドン

ドゴオオオオオッ！

『どあああああああ！？』

引鉄を引いて着弾した球が爆発を起こす。 今彼が撃った銃弾はスヴェンが作ったバーストと呼ばれる炸裂弾で、着弾したと同時に爆

発を起こす、いわば拳銃型のバズーカ砲の弾である。

着弾したのがトレインから近距離だった為か、流石のドーパントも人溜まり無かった。

直ぐ近くで見えていたW達も思わず目の前の光景に息をのんだ。

イヴの未知の能力も驚き要素の貯蔵庫だが、翔太郎達にとっては生身であそこまでドパントやりあえる人間を彼は知らない。

唯一ドパントと同等の力を持つ自分達仮面ライダーと生身で張り合えたの一年前に風都市内全体を恐怖のどん底にたたき落とした戦闘集団、「NEVER」ぐらいだ。

その「NEVER」にも引けを取らないほど、この二人は強い。それは今のドパントとの闘いを見ても明らかだった。

「おいおいマジかよ?」

『髪の毛が剣に・・・興味深い』

「あたし、聞いてない・・・」

「彼等はいつたい?」

啞然とそれぞれの感想を口にするW達に、トレインは呼びけた。

「おい! 止め刺すんなら今だぜ、アンタ等しか倒せないんだろ?」

「え? あ、ああ、そうだな」

トレインに促され、ハッと我に返るW達。マグネットドパントはバーストを諸に喰らった為か、全身から煙を上げ立っているだけでもふらつく状態だった。

その隙を見計らって、Wはルナのメモリをサイクロンのメモリに差し替え、デフォルトのサイクロンジョーカーへと戻る。

『奴の体は頑丈だ。同時に必殺技を叩きこもっ！』

「OK。行くぜ照井」

「いいだろう」

「ジョーカー！ マキシマムドライブ！

アクセル！ マキシマムドライブ！

お互い自分のメモリをドライバーにセットし、必殺技の準備が整う。

Wは自分の周りに竜巻状の突風を発生、体を上空に浮遊させ、アクセルはドライバーのハンドルのエンジンをふかし体全体から炎が吹き荒れ、ド パントに向かって翔け出した！

「さあ・・・振り切るぜ」

「『はああああああああああつ！』」

空中に居たWも両足をド パントに向けて突進、次の瞬間彼の体は左右が上下にスライドし（この時イヴとトレインの目を丸くさせたのは言うまでも無い）そのままド パントに向かって突っ込んだ！

それと同時にアクセルの後ろ跳び回し蹴り、アクセルグランツァーが炸裂する！

「『ジョーカーエクストリーム！！』」

「ヤアアアアアッ！！」

「うおおおお！」

それぞれの必殺技は見事同時にヒットしド パントは吹き飛ばされ、

地面に落下。

「ぐ……が……あ、あああああああああああああああああああああ
あああ！！！」

地面の上で暫く苦しみが居た後、耳を割くような断末魔と共に大爆
発を起こす。

巨大な炎吹き荒れ、ドーパントの居た場所には志藤が気絶した状態
で倒れていた。

「す……すげえ……」

「コレが……仮面、ライダー……」

目の前の戦士達の凄まじい戦闘能力に、トレインとイヴはただただ
圧倒されたちつくした……

? I I I I 引き寄せるM / 共闘する猫 (後書き)

オリジナルドーパント、ちょっと強くしすぎたかな？

それともライダー二人を弱くしてしまったのか？ トレイン達を強くしてしまったのか？ 上手くバランスが取れた共闘が出来たかどうか・・・

? I V 沈黙のW / 集まる猫 (前書き)

こんにちは。

今回は読者の皆様に折り入って相談があります。実は以前感想の方で「この小説を読んだ後トップページに戻ると目がちかちかするの
で、背景色を何とかしてほしい」と言う指摘をうけました。

僕としてはこの青系の色が一番お気に入りなのですが、作品自体にもあつてるんじゃないかと思うんですが今悩んでおります・・・
出来れば白い文字を使いたいのですが、もし「この文字の色ならこの配色にしたらどうです？」とオススメの物が有れば意見をください。

色が駄目なら背景を絵にしたい・・・と言うのもあるのですが、
一向にやり方解らない・・・

尚、今回は前回の終盤での翔太郎のキャラに違和感があったという
意見から、修正としてド パントを倒してからのトレイン達のやり
取りを変更したシーンから始まります。

ちょっと短いです。

(2011.7.24 追記：背景色を見やすい物に変えました。目
次の背景は pixiv で公開していたフリー素材をお借りして加工
して扱っております (一一一))

? I V 沈黙のW / 集まる猫

「ジョーカーエクストリーム!!!」

「ヤアアアアアッ!!!」

「ぐ……が……あ、ああああああああああああああああああ!!!」

Wとアクセル。それぞれの必殺技は見事同時にヒットしド パントは吹き飛ばされ、地面に落下。

地面の上で暫く苦しも居た後、耳を割くような断末魔と共に大爆発を起こし、燃え盛る炎のすぐ側では、ド パントに変身していた志藤が気絶して倒れていた。

この時、彼は自分達が何者かに監視されている事に気づいて居なかった。

それもその筈。その監視者はトレイン達から遙か離れた場所にそびえ立つ50階建のビルの屋上から先程の戦闘を見降ろしていたからだ。

その人物は人間の外見をしていなかった。血の様に赤く染まった素肌、胴体にはゴツゴツした鉄の鎧の様な物を見纏い、顔にはまるで縦に伸びた髑髏のような半透明のフェイスガードを付けているという凶悪な外見をした異形。

その人物はマグネットド パントが倒されるのを見届けた後、自分の右こめかみからガイアメモリを引き抜き、夏も近いと言うにも関

わらず全身を青い迷彩ロングコート身を包み、前髪だけを左右に垂らした金髪オールバックのヨーロッパ系男性に変貌する。いや、正式には戻ったと言う所だろうか？

男は懐から取り出したサングラスを着用すると、そのまま何処かへ立ち去ってしまった。

そんな事とはつゆ知らず、目の前に立つ仮面ライダーの凄まじい戦闘能力に圧倒されたトレインとイヴも思わず茫然と立ち尽くす。

「す……すげえ……」

「コレが……仮面ライダー……」

とココで息切れをしながらスヴェンが二人に駆け寄って来た。

「トレイン！ イヴ！ 無事かああ!？」

「ん？ おやつさん!？」

と、そのスヴェンの姿を見たWの中の翔太郎は一瞬彼の外見が昔の師匠とダブって見えた。全身を白いスーツに身を包み、そして白い帽子。頼り我意のありそうな後ろ姿。嘗て自分が探偵になる切欠を作ってくれた、誰よりも尊敬する男そのもの。だがその人物はもうこの世に居ない。

「って事はまたド パントか!？」

サイクロン！ トリガー！

一瞬何を勘違いしたのか、トリガーマグナムをスヴェンに向けてし

まっ。

ビックリしてスヴェンは両手を上げて急ブレーキをかけた。

「うわあ、何んだ急に!？」

「!?! おっと悪い、人違いだった!」

『翔太郎、もしかして彼をダミード パントが変身した鳴海壮吉と勘違いしたのかい?』

スヴェンの顔を見たWはすまなそうに慌ててトリガーを引っ込める。

翔太郎は以前その姿をした偽物と出会った事がる。今考えれば許せない奴だった。自分の人生の師匠の姿を使い、自分の愛するこの街の様々な人間の弱みに付け込み悪事を働かせる行為。

そんな行為を行おうとしている奴が今また現れたのかと一瞬思ったのだ。

「いやあすまねえ。それにしてもさっきは助かったぜ。 あんたら

確か掃除屋とか言ったな? 本当に一体何者なんだ?」

「掃除屋って言うのは……」

イヴが掃除屋に付いて翔太郎に説明しようとした時だった。 トレ

イン、イヴ、スヴェンのお腹から空腹のサイン音が鳴り響き言葉を切った。

「そう言えば俺ら……」

「まだまだこ焼きしか食べてなかったね……」

「腹減った……」

「「「……」」」

翔太郎達はとりあえず3人に何か奢ってやる事にした。

「俺の名前は左翔太郎、この風都で探偵をやってる」

「所長の鳴海亜紀子です！」

「もし何か依頼があつたらうちまで来てくれ。何時でも仕事引き受けるぜ？」

そう言つて翔太郎はスヴェンに名刺を渡す。

「すまねえな、こんなご馳走までしてもらつた上に」

スヴェンは何だか申し訳無さそうにポリポリと頭を掻いた。

ド パントを無事に片づけ、気絶した志藤は照井の手によって病院に運ばれた。

今翔太郎、亜紀子、トレイン、イヴ、スヴェンの5人はお互いの自己紹介を済ませこの風都では知らぬ者は居ないとまで言われている有名なラーメン屋台「風麵」に来ており、トレイン達はそこで翔太郎から奢ってもらっていた。

「いや、アンタ等は恩人だ。こんぐらい礼はさせてくれ」

帽子を押さえてスヴェンにくくりとお辞儀をする翔太郎。

その横ではトレインがこの屋台特製の巨大ナルト入りラーメンを満足げに頬張っていた。

「うっめー！ー！！　こんな美味しいラーメン今まで食った事ねえよ！」

「ホント、凄く美味しい！」

「嬉しいネ」。外人の方までに褒めてもらうなんて、屋台続けてきた甲斐あつたヨ」

屋台のマスターもそれを二人の反応を見てとても嬉しそうに麵の仕込みを続ける。

この「風麵」は風都の中では名物中の名物。翔太郎や翔太郎の知人の多くが、時々此処に食べにくる程人気のある屋台だ。

普段無表情のイヴでさえもこの時ばかりは表情が緩ませながら箸を進め、子供らしい一面を見せる。

日本に来る前も3人はウンザリするくらいインスタントラーメンを食べ尽くしていたのではじめ翔太郎に進められた時はトレインも顔をしかめたが、この風麵はそこいらの安物のインスタントと比べる事自体失礼だと食べて感じた。

「それにしても翔太郎さん、人違いって言うてましたけどどうしてスヴェンに銃を？」

スープまでしっかり完食しあと、イヴが翔太郎に尋ねた。

「あ、ああ。まあ色々複雑なんだけどな、もうこの世には居ないんだが俺には嘗て探偵の師匠が居た。だが以前ド　パントの力を使ってその師匠の偽物が現れてな、そいつは人のこころの弱みになる人物に化けてこの街の人間を次々と泣かせる奴だった。師匠はこのスヴェンって人と同じく白いスーツと帽子を愛用してたから、またおんなじ奴が現れたのかなってつい頭に血が上つちまってよ・・
・・ホントすまなかつた」

「ド　パントにはそんな力を持つ奴もいるのか。アンタ等は何時モ

あんな化け物と戦ってんのか？」

トレインの質問に翔太郎は答える。

「ああ。あれは仮面ライダーW、この風都で様々な犯罪を繰り返すドーパントになった人間と戦ってるんだ。そういえばさっきアンタ達、俺達しか奴を倒せないって事知ってたみたいだが、アレは最初からか？」

「おう。この街の事は事前に有る程度勉強しといたのさ。勿論アンタ達の言う仮面ライダーやドパントとか言う怪人の事もな。んまあアンタ等がそのライダーだったって事は流石にしらなかつたけどよ」

「ふーん。ねえ、貴方達海外の賞金稼ぎなんでしょ？ 何しに風都に来たの？ 銃を携帯してるって事は旅行って訳じゃなさそうだし。

ええっと確か・・・」

「トレイン、トレイン」ハートネットだ。んでこっちが相棒のスヴェンと姫っちゃん」

トレインが亜紀子に説明してあげるが、イヴはその呼び名が気に食わず「ちゃんとイヴって名前と呼んでよ」と不機嫌そうに頬を膨らます。

彼の言う「掃除屋」が何なのかを知ったのは、先程戦闘の後に照井から聞いてからだった。

照井は最初、トレインが拳銃を所持していると言う事で詰め寄るとスヴェンとトレインは持っていた「スイーパーライセンス」を彼に見せ、照井は手を引いたのだ。話しによると、このハンターライセンスはI・B・Iと呼ばれる海外の国際捜査局から正式に発行されている免許証で、これを持っていれば合法的にこの国にも銃を持ち込む事が可能らしい。

この武器の密輸に厳しい日本に銃を持ちむとうだけに、三人が居た国の空港やこの国の空港からも相当嚴重な審査を施され、それに時間を費やした事で3人は朝食の時間が大幅に遅れたと言う事である。

「俺達はこの街に潜んでるって言われてる、」ギル・アルフィルク
” って奴を探しに
来たのさ」

「！！ ギル・アルフィルクだつて!?!」

「え、も、もしかしてトレイン君達もその人探してんの?」

「”も” って事は・・・まさかお前達もか!?! 何でまた・・・」

「依頼があつたんだ。有る人から・・・」

「あたし・・・聞いてない・・・」

意外な目的の合致に、皆はお互いを指差し驚きの表情を浮かべる。

亜紀子も拍子に何時もの口癖が出てしまった。

「ねえトレイン、スヴェン、私今思ったんだけどここは翔太郎さん達と協力してみたらどうか。 探偵って基本顔が広い人じゃないと務まらないから、情報収集も早いし損は無いですよ?」

イヴの意見を聞いてスヴェンはうーんと唸った。確かに知り合いも居ない見ず知らずのこの街で人を散策するなら探偵ほど便りになる存在は無いだらう。

だがそれなら警察の手を借りれば良いのでは?

あんまり顔が広い人物では、何処で情報がギルに漏れるか解らない。

「考える事は無いと思うぜスヴェン、人生を楽しむコツは損得を考えねえ事だ。俺達の目的とコイツ等の目的が一致したって事はもう協力し合うしかねえって事じゃねえのか?」

あれこれ考えているとトレインが持ち前のマイペースな意見を聴き、そんな単純で良いのか？とスヴェンは翔太郎に目をやる。彼は一切嫌そうな顔をせず答えた。

「俺は構わねえぜ。アンタ等には恩もあるしたった今依頼があればいつでも引き受けるって言ったしな」

「そうそう、ウチのおバカな翔太郎君幾らでも使っちゃってください！」

「おい亜紀子、誰がバカだって!？」

「何よ〜お父さんとスヴェンさん見間違えた癖に〜！」

「あれは・・・その場のノリッつつか・・・」

「ははは、まあとりあえず決まりだな」

最後はスヴェンが話をまとめる。

場所は変わって、此処は鳴海探偵事務所内。

「おかしい・・・ギル・アルフィルク、コリオレイナス・・・どれだけ検索しても本が絞れない・・・」

フィリップは何も描かれていない本を片手に顎に手を当てながら部屋のあちらこちらを歩きまわっていた。その表情はやけに難しそうに曇っている。

「うーん、それよりも・・・さっきのあの少女が気になる！一体あの能力は何なんだ。是非とも知りたい！」

あの少女とは勿論先程Wで戦っていた時に出会ったイヴの事である。あの後彼等と自己紹介する前に翔太郎がダブルドライバーを外された為、彼とのリンクが切れてしまった。

このフィリップと言う少年は地球のあらゆる知識を備える程の頭脳と記憶力の持ち主だが、それ故に自分の知らない物を発見してしまうとどんな事でもまる一日掛けて入念に調べたがるという好奇心旺盛な部分があった。

その調べ癖は依頼した仕事をほっぽり出してしまっただけだったが、2年前と比べては大分甲斐性されてきた。

しかしそれでも自分の知識に無い物を見るとそれが一体何なのか調べたいという好奇心は未だに潰えてはおらず、このままではまた仕事に支障をきたしかねない。

ここはすぐにでも翔太郎からあのイヴについて何らかの説明や連絡が有れば良いのだが。責めて名前だけでも解れば星の本棚へのリンクしてあの能力について検索できるのだが……

そんな事を考えている時、入口が開き翔太郎と亜紀子がトレイン達を連れて入って来た。

「ようフィリップ。何か搦んだか？」

「ああ翔太郎。すまない、まだ具体的なキーワードが足りないみたいで……」

フィリップは最後まで言い終わる前に、視界にイヴが移った。その瞬間、彼はまるで

新種の昆虫を見つけた学者の様に喜んで駆け寄った。

「おおおっ！ 君はさっきの少女じゃないか！ どうして彼女が此処に!?」

「えっと・・・どうして、私の事を？」

イヴはたじろいだ。こんなに興味心身に自分に詰め寄ってくる人物に会うのは初めてだったが、それ以前にフィリップは自分とは初対面な筈。それは後ろにいるトレインとスヴェンも一緒だ。

「ああ、悪い。こいつはフィリップ、俺の相棒だ。さっき俺が変身したWは俺一人の力だけで変身できる訳じゃない。俺の持つダブルドライバーとフィリップの持つダブルドライバー。それぞれ自分のドライバーにメモリをセットすれば、メモリと共にコイツの意識が翔俺の身体に転送され、憑依して初めて変身が完了するんだ」

「まあその間フィリップ君の体は意識のない抜けがら状態になっちゃうけどね」

「それで仮面ライダー”W”って訳か」

翔太郎と亜紀子の説明に納得するスヴェンとトレイン。メモリで変身だの憑依だのと、仮面ライダーと言うのは本当に自分達のこれまでの常識を覆す技術ばかりで思わずため息がでそうである。そんな中、ひたすらイヴに興味が言ってしまうフィリップ。

「教えてくれ翔太郎！ 何故彼女達が此処へ!？」

「俺達はアンタ等と同じく、ギルの居場所追ってんのさ。そこでお互い協力して探してみないかって話になっとな」

トレインが割って出て、これまでの経緯を説明し出した。

「と言う訳だ。どうだ、職柄は違うが目的は一致している。自慢じ

やねえが俺達も掃除屋としてのキャリアは積んでるんだ。お互い損ねえと思っただが？」

「そう言う事か、ならお安い御用だよ。先程の闘いからして君達も数々の困難に立ち向かって来たのは目に見えている。是非協力させてもらおうよ」

フィリップも協力を表明し、皆はさっそくこれからどうするか話しあおうとした時、入口のドアからノックの音が鳴り響く。亜紀子がドアを開けると手にバツクを持った照井竜が真剣な面持ちで顔出した。

「所長、邪魔するぞ」

「竜君」

「照井竜？ 志藤雅彦はどうなったんだい？」

「気絶したまま病院に運ばれた。意識が戻り次第、再逮捕する構えだ。ん？ さっきの賞金稼ぎ達か。何故彼らまで居るんだ？」

照井と目が合い、トレイン達も「あ、さっきの刑事か」と一言。

「ああ、こいつ等はな」

「ちよっと翔太郎君待った！」

翔太郎はトレイン達に協力する経緯を簡単に説明しようとした時だった、亜紀子が強引に彼の腕を引っ張り耳元で小声で話しかける。

（エレナさんの言った事忘れたの？ あの人はギルの国外逃亡を警戒して警察に報告しなかったんだよ？ 竜君も刑事何だからうっかり話しちゃまずいよ）

（おっと、危ねえ危ねえ）

（やれやれ、翔太郎は相変わらず半人前が抜けないね・・・）

直ぐ側この会話を聞いて小さく笑うフィリップに（うるせえ！）と一括する翔太郎。

「どうした。何をこそこそしている」

「うんうん何でもないの竜君！オホホホ」

「？ まあいい。そんな事より左、志藤のメモリについて今回はお前達にどうしても見てほしい物がある」

「見てほしいもの？」

「コレだ」

そう言つて照井は懐から一枚のDVDを取り出し、それを部屋の奥にあるTVで再生した。

画面を付けると、そこには真つ暗で街灯なども見当たらない場所にそびえ立つコンクリート形式の建物が映し出されていた。

「これは志藤が世話になっていた留置場を監視カメラが外から撮影した映像だ。時刻は夜中の2時頃。警備員達に聞いたんだ奴は昨日の就寝時までは何も持ち合わせていなかったそうだ。そこで深夜に牢獄で何者かが奴にメモリを渡したのでないかと推測し、監視モニターの映像を手に入れたんだが・・・そこに不審な人物が写っている」

「不審な人物？」

翔太郎達は首を傾げ、照井はDVDを早送りしだした。後ろに居たトレイン達も何となく気になってTVを見つめる。

早送りしている間は建物の側の歩道には人っ子一人歩いておらず、ただただ暗闇の中に怯え立つ建物だけが映るだけだったが、有る程度の所で照井は再生ボタンを押す。映像が動き出す。

「この留置場の側に有る歩道を見てくれ」

「ん？ 誰か来たね」

フィリップが呟いた。彼の言うとおり、映像の端っこの歩道で一人の黒服の男が留置場の囲いの側まで歩いてきた。

顔はフードで覆われておりおまけに暗いうえ此処からで距離が遠くとても判別しにくい。

「此処からだ、よく見ていてくれ」

しっかりと目を凝らして画面を見つめる翔太郎達。

男は暫くその場に立ち止まった後、

「! ! !」

次の瞬間まるで編集されてその場から消されたかのように、突如その場から姿を消したのだ。

勿論これは監視カメラの映像だ。変な効果は使われてない。だがその消え方明らかに不自然である。

「この付近の住人は留置場と言う事もあってか殆どこの道を通りたがらないらしい。得に深夜とあればなおさらだ。だがここ一週間の映像を確認した所深夜にこの道を通ったのはこの男のみだ。そしてこの映像の役10時間後にあの立てこもり事件だ」

「確かに怪しいな・・・照井、こいつの映像を鮮明にした画像とか無いのか？」

「勿論有るぞ」

照井はそう言つてバツクから一枚の封筒を取り出し翔太郎に渡した。中を確認すると、そこには先程のフードをかぶった男が映っていた。若干ばやけてはいるが有る程度修正も掛けられたのでギリギリ顔だけは判別できる。見た所顔立ちが外人の様だが……

「な、そいつは!！」

これを後ろから見ていたスヴェンが急に叫びだし翔太郎達は驚いた。

「どうしたスヴェン？」

「イヴ、直ぐに賞金首リストを開いてくれ！」

「う、うん」

イヴは慌ててスヴェンのバツクからノート型パソコンを取り出し、賞金首の顔写真が大量に並べられたリストを開く。

「おいおい、何だよ急に血相かいて？」

翔太郎達もそれが気になり、スクロールするPCを見つめた。そして、有る程度の場所まで来た時、スヴェンがスクロールを止めた。

「あつたぞ！ コイツの名はスタンリー・オーブ・ガーネレイド。元陸軍兵士でコリオレイナスの構成員だ。コイツとその映像の男がよく似てるんだよ！」

「……………!?」「……………」

翔太郎達に戦慄が走った。スヴェンの指差したPCには前髪だけを左右に垂らした金髪オールバツクのヨーロッパ系の男性の顔写真が映されていた。

場所は変わって此処は何処かの部屋。

その部屋は一体何の為の部屋なのか、見当もつかない程不気味な闇で包まれていた。

壁が何処にあるのか、天井が何処にあるのか、それさえも解らない。だが完全な闇とはいえなかった。床には円を描いた様に一本道をつなげたプールが流れていて、そのプールだけが異様に青白く輝いているのだ。

そのプールの前で二人の男が居た。一人はプールの前でうずくまり、顔は暗過ぎて全く判別できないが、来ているスーツや体つきからして男性である事は間違いない。服もプールの青白い光に照らされている御蔭で色も判別しにくくなっていた。

もう一人の男はその男の側近なのか直ぐ側で立っていた。彼も暗闇のせいと顔は判別できず、服も黒いスーツなのか殆ど姿が闇に溶け込んでいる。

男はプールで飼っている一匹のシャチに餌を与えていた。片手には輪切りされた高級そうな肉を持ち、それを水面から頭だけを突き出したシャチの口元へ持つて行く。

シャチはその巨大な口を開きその肉を一口で平らげてしまったが、まだ足りないのか男に向かって巨大な口を開いたまま次の肉が来る

まで待つていた。

「胸にXサーティンIIIIの刻印の男だと？」

餌を与えていた男は後ろに立つ側近に聞いた。側近は落ち着いた声で答える。

「はい。偵察に行ったスタンリーによれば、ド パントとなったあの男と仮面ライダーの闘いに割って入って来た。他にも髪や肉体を自由に变化出来る少女および白服を来た男という仲間も一緒だったとか」

「ふ……ふふふふ……」

コレを聞いた片方の男は急に不気味な笑い声を上げる。

「間違い無い、そいつはあの”ブラックキャット黒猫”だ！ 今では掃除屋を営んでいると噂で聞いたが成程。私の賞金に目を付けたと言う事か……

面白い……」

「いかなさいましょう？」

側近が尋ねると男はゆっくり腰を上げ冷酷な笑みを浮かべてこう言った。

「殺せ……もし邪魔をするなら、仲間もろともでも構わん」

「かしこまりました……」

側近は丁寧にお辞儀した後、何処かへ消えていった。

「ん？」

一人残された男の耳に、微かな物音が聞こえたような気がした。

ゆっくりと音がした方向に足を進める。

立ち止まると、そこには幾つもの太いコンセントやチューブがつかれた大きめのカプセルが置かれていた。

男はそれに触れる。

「今こいつが何か反応した様な気がしたが……気のせいか」

男はそっけなくそれだけ言うと、その場から立ち去って行った……

? I V 沈黙のW / 集まる猫 (後書き)

今回登場したスタンリーは、ガンダム00に登場した「ジョシユア・エドワーズ」というキャラをモチーフとしています。

「え？ 00にそんな奴居たっけ??」と思つたそこの貴方。検索する事をお勧めします。

尚、前回の終盤で翔太郎がスヴェンをおやつさんと勘違いして追いかけてまわすシーンは消去いたしました。自分がこの作品を書くきっかけとなったシーンなので絶対取り入れたかったのですが、やっぱりキャラが違うとの指摘があつたので……

因みに、修正後に初めて読んだ方へ、こんなシーンでした。

立ちつくす二人に気付いたWとアクセルが変身を解除して歩み寄っていく。

「よう、さつきは助かったぜ。 あんたら確か掃除屋とか言つたな? 本当に一体何者なんだ?」

「私達は「トレイン」! イヴ! 無事かああ!?」

イヴが掃除屋に付いて翔太郎に説明しようとした時、遠くからスヴェンが息切れをしながらかけつけた。

「はあ、はあ、良かった。無事だったんだな……」

「遅えよスヴェン、何処いつてたんだ?」

「テメエの足が速すぎて見失つたんだよ!」

「やれやれ、また妙な人が現れたね。どうする翔太郎?」

ドライバーから情報が伝わっているフィリップが翔太郎に問う。

ところが、どう言う訳か彼はスヴェンの姿を見つめたまま返事をし

ない。

「？ 翔太郎？」

「左、どうかしたのか？」

「翔太郎君？」

照井と亜紀子も彼の異変に気付き、問うも彼から返事はない。

翔太郎が何故全く反応を示さずスヴェンを見て硬直しているのか。

それはスヴェンの姿をある人物と重ねていたからだ。

全身を白いスーツに身を包み、そして白い帽子。頼り我意のありそ
うな後ろ姿。

それはもう今はこの世にいない、嘗て自分が探偵になる切欠を作っ
てくれた、誰よりも尊敬する男そのもの。

「お・・・お・・・お・・・」

途端に翔太郎は涙を浮かべ、勢いよくスヴェンに駆け寄った。

「おやつさあああああん！！」

「う、うわああ！？ な、何だ急にい！？」

『落ち着きたまえ翔太郎、そんな事はある得ない・・・って、聞いてないか』

見ず知らずの男性に突然泣き顔で寄られ、慌てて逃げるスヴェン。

これが美人の女性相手だったら大いに結構なのだが自分はおっちゃん系の趣味はない。

フィリップの声も聞かず我を忘れてスヴェンを追い回す翔太郎。ト
レイン、イヴ、亜紀子、照井の4人は2人をただ目で追うしかなか
った。

・・・反省はしてます・・・

それでは、次回もまだ戦闘には至らないと思いますが、よろしくお
願いします。

? V 沈黙のW / 動き出す猫 (前書き)

今回も戦闘シーン無しです。

ただし、依頼してきたあの人メインでお届け。

? V 沈黙のW / 動き出す猫

「似てるつつたつて、これもう殆ど本人じゃねえか！」

パソコンの中に写し出された人物と防犯カメラの画像の人物を見比べて翔太郎は怪訝な表情になる。少しぼやけてはいるが監視カメラの映像とこのPCに写っている男の顔はほぼ完全一致している。

「……さつき確認したが、あの事件が発生するまで、この歩道を通ったのはコイツだけだ」

「それじゃあもしかしてこの人が、あの人にガイアメモリを？」

「可能性は十分あると思うよ。そしてこの明らかに不自然な消えた、僕の予想だと恐らくこの男も何らかのドーパントだろうね」

照井の言葉にイヴとフィリップも眉をひそめた。

「何で、コリオレイナスの一味がメモリなんか……」

「ま、まさか……今回の事件、組織ぐるみのガイアメモリ犯罪……なんて事ないよね？」

亜紀子はいかにもヤバいかも……と言いたげな苦笑いを浮かべる。確かにスタンリーがガイアメモリを所持し、拳銃に今自分たちが追っている組織の一員となると、最悪の場合そういう可能性も考えられる。

嫌な予感がよぎいきり立つ翔太郎。もし亜紀子の予想が正しければ、相手は略奪や麻薬など用意に行く犯罪組織。そんな奴等がドーパンの力を所持していると、一体何をしでかすか解らない。直ぐにまた聞き込みを再会しなくては。

「直ぐにコイツの居場所を見つけねえと・・・」
「落ち着け探偵。見つけるっても当てはねえんだろ？」
「でも呑気にしてる場合もねえだろ!？」

スヴェンの言葉をふる切り翔太郎は脚早に帽子を被りなおし出かける準備を整わせ、再びドア絵向かった。が、開けようとした瞬間、そこから今回の依頼人エレナが顔を出し手を振る。

「ハ―イ探偵くん。ギルについて何か掴めた？」

「エレナさん。すまねえ・・・。でも今回は思いもよらない助っ人が来てな」

「助っ人？」

「ああ。トレイン、スヴェンさん、イヴちゃん、この人が今回の依頼主のエレナさんだ」

「ほほう、これはこれははじめまして」

「あらご丁寧にどうも・・・」

翔太郎は紹介され、エレナとトレイン達は軽くお辞儀をしながらお互いの姿を目にした。

「え・・・？」

「・・・ん？」

が、何があったのかその瞬間4人は同時に首をかしげ・・・暫くたってエレナが「ええええ!??」と口を大きく開けてトレイン達を指差さした。

「ちよ、ちよっとちよっとおおお、何でコイツ等が此処に居んのよお!????」

「リンスだ！」
「ってイヴちゃんそれ言っちゃ駄目ええええ!!」

イヴに指差されて「リンス」と呼ばれた途端、エレナはまるで子供が駄々を捏ねた様に両手をぶんぶん振って取り乱みだした。昨日出合った時の大人の魅力は微塵も無く、翔太郎、フィリップ、亜紀子は困惑する。トレインもエレナとは交友が有るのか、親しそうに手を振った。

「ようリンス。また何か悪巧みか？」

「トレイン！ アンタねえ!!」

顔を真っ赤にしてトレインに激怒するエレナ。

「リンスう？ お前等何の事言ってたんだ？」

「というより、君達はエレナさんと知り合いなのかい？」

トレインたちばかりリンスに親しく接していて、翔太郎、フィリップ、亜紀子、照井はちんぷんかんぷんだ。スヴェンはそんな彼らに丁寧にエレナについて説明してあげた。

「成程。こいつ等にギルについて依頼したのはお前だったんだな。」

こいつの本名はリンスレット・ウォーカー。あらゆる国家の極秘情報や品物を盗み出す、敏腕女盗賊さ。まあ俺達とは行き当たりばったりで出会う、ちょっととした腐れ縁ってとこだな」

「盗賊？ って事は盗人か？」

「あーんもお！」

エレナははーっと溜息をついき、自分の金髪に手をかけ、それを外す。その髪の下からは、流れるようなパープル色のショートボブ

があらわになる。

「バレちゃしょうがないわね……。そうよ。私は依頼さえあれば報酬と引き換えにどんな物でも盗み出す、いわば泥棒請負人。今まで色んな物を盗み出してきたけどこの私に盗み出せない物は無い。世界中のお得意様が私を必要にしてるって訳」

エレナ、いやリンスは得意そうに腕を組みながら自分の正体を聞いて照井は怪訝そうにリンスに突っかった。

「ほう、要するにお尋ね者と言う訳か。逮捕する」

泥棒と聞いて刑事である彼が黙っているはずが無い。早速徐に手錠を取り出しリンスに近づくが、彼女は余裕の笑みで人差し指を振る。

「つつつつち、残念だけどそれは無理よ刑事の坊や」

「何？ どういう意味だ？」

「私はあらゆる国の政府やおエライさんのお得意様を持つてるの。もし私を捕まえても、その人達は自分の悪行をばらされない様、自分達の職権を乱用して強引に私を釈放してくれちゃうわけ。勿論自分達の悪行も完璧にもみ消してね？」

「嘘じゃねえぜ刑事さんよ。俺達とこいつと知り合っただのは随分前だけだよ、未だにこうしてまた出会ってるんだ。それが何よりの証拠だ」

「ま、捕まった事なんて無いからだけどね？」

トレインに詳細を教えてもらい、リンスは自慢げな笑みを浮かべながら髪をかきあげる。が、照井は「ふん」と鼻で小さく笑い飛ばした。

「ならばそいつ等の悪行も突き止めて刑務所へゴールさせれば良い。いいから署まで来い」

「あーやだ。それ本気？ 貴方の刑事人生も問われる事になるわよ？」

リンスが問うが照井の警察精神はそんな事で揺らぐ物ではない。お互い険しい表情で構えるリンスと照井の間に、翔太郎、フィリップ、亜紀子が慌てて割って入った。

「待てよ照井。もうちょっと話聞こうぜ？ んで、その凄腕泥棒が俺達に賞金首を探させて何しようってんだ？」

「まさか、僕たちに泥棒の手伝いをさせると？」

「そんな事、絶対お断りだよ！」

眉を歪めて詰め寄る亜紀子にリンスは手で押さえる。

「事実上、確かに私と協力する事にはなるわ。でも貴方達は普通に探偵の仕事をしてほしいだけ。ただし……」

仮面ライダーとしての仕事もね……？

「……………！！」「……………」

それを聞いて翔太郎達に戦慄が走った。

仮面ライダーとしての仕事。それはどう考えても、自分達が今まで拳を交えて来た、あのアイテムに関する仕事。

「アンタ……それもしかして……」

「そう……コリオレイナスの構成員達はガイアメモリを所持して

るの」

そう言っつてリンスは真剣な面持ちでこの話の詳細を語り出した。

— — —

話は一週間前に遡る。

ある日リンスはトレイン達の居る国とは別の国に滞在中、一人のおエラいさん（名前は伏せさせてね？とリンス。）から、彼の持つ、買えば数億はくだらない超高級な仏像をコリオレイナスから取り物どしてほしいと依頼を受けたらしい。

この組織は様々な悪行に手を染めて金を荒稼ぎしており、その手口の中には窃盗も含まれていた。

リンスはそれを取り戻す為、その仏像が組織の一員の一人の屋敷の中に保管されている事を発見、そこへ潜入を試みる。

頭は茶髪のロングヘアの鬘に黒いサングラス着用しメイクしておいたので、少しくらい顔を見られても心配は無い。

屋敷にはいたる所に全身を黒いスーツや白と白と黒に塗りつけられた明細服を着た見張り達がマシンガンや手りゅう弾、拳銃を構えながら持ち前についていた。

そんな彼等や監視カメラの目を見事にすり抜け、赤外線等を特殊なスコープ等で見極め、カード式ロックの自動ドアは数千万もの金額

を製作した特殊なカードロックキーでリンスは次々こじ開けて行く。華麗な進入でついにリンスは目的の仏像が置かれた最下層の部屋に見事たどり着く。

【ふふ、今回も楽勝ね】

見張りやトラップの手薄な通路を歩きながら、リンスは先程盗み出した身長20cm程の阿修羅像を掲げてニヤニヤとほくそえむ。

これでまたまた高額報酬が手に入ると思うとニヤケがどうしても泊まらない。

だが屋敷を出るまでが仕事。

通路を進んでいく途中、5人程の見張りを発見し、リンスは素早く壁の陰に隠れる。

見張り達は何も起きずただ銃を構えて立つだけの仕事が暇なのか、のんきに世間話にかけ暮れていた。

リンスは他に通路が無いか辺りを見回しながら、見張りの間抜けぶりを心の中でせせ笑った。

が、その世間話の中で彼の気になる会話を耳にってしまったのだ。

【そういえば知ってるか？ 今度ウチのボスが日本へ足を運ぶらしいぜ】

【ああ。何でも闇ルートに売る為の新しい製品を取りに行くんだってな】

【何だその新しい製品ってのは？】

【さあな。詳しい事は俺も知らねえよ】

【俺、知ってるぜ】

見張りの一人がそう言って、一同は興味深そうにそちらに視線を向けた。

【何でもその商品、人を超人に変えちまうとんでもねえアイテムなんだと】

（人を超人に……？ まさか、神氣湯！？）

リンスも壁に隠れながら聴き耳を立てた。

神氣湯の事は彼女自身もよく知っていた。

何故なら随分前にコレを使った戦闘集団が某国の政治家、大統領を暗殺したというテロ事件を引き起こした事でよく知っていた。その戦闘集団の名前は「星の使徒」。世間ではその彼等の力の源についての情報はと言う訳か殆ど公開されていなかった。その組織の主導者は多額の賞金がかげられ、掃除屋としてトレイン達はその主導者へと戦いを挑んでいったのだ。彼女は何度かその戦いに巻き込まれた事がある為、その薬のついての知識が付いていたのである。もともと、トレインは本人はその主導者にはある因縁が有って対決を挑んだのだ……

だが見張りが口に出したアイテムの名は神氣湯ではなかった。

【そのアイテムの名は、ガイアメモリ。何でも日本のある街に大量に売り買いされてるらしいぜ？】

【超人だ？ 何か胡散臭えなあ。そんなもんがホントに金になるのか？】

【それが結構金になるらしいんだわ。それを世界中のあらゆる闇市

に売りさばけば、ウチの組織はさらにデカクなって俺達も大儲けて奴さ】

(ガイアメモリ? 一体何のこと言ってるのかしら?)

聞きなれない単語にリンスは首をかしげる。と、そこで彼女の隠れている通路の遙か遠くから別の見張り達が歩いて来て・・・

【む!? 誰だそこにいるのは!】

(やば、ドジった!!)

その声のお蔭で先程世間話をしていた見張り達もリンスの方へ翔けていく。

瞬間何処からともなくジリリリという警報が屋敷全体に鳴り響いた。リンスは腰のベルトから一本の長い鞭を取り出し、それを8メートル程の高さの天井に配置されたシャンデリアに向かって結びつけ、鞭のゴム製の素材を利用して天井までジャンプ。 適当な場所で窓を見つけ、そこから外へ飛び出した。

— — —

「ギルの目的は、ガイアメモリの密輸だったのか」

照井の言葉に、翔太郎達は焦った。

ガイアメモリの輸出はこれまでに前例がない。

これまでメモリに関する事件は全てこの風都内にはのみ発生してきた。かつてメモリは根源である秘密結社ミュージアムの実験材料として、全て管理されていたので街の外までメモリが出回った事が無かったのだ。

だがミュージアムという管理課が無くなった今だからこそ、その様な出来事が発生してももはやおかしくない。

「んで、目的の仏像はしつかり頂戴して、後はそれをクライアントに返せば見事私の仕事は終了する筈だったんだけど・・・」

「だけど？」

「偽物だったのよ、その仏像・・・」

リンスはやるせない感じの溜息を吐いた後説明を続けた。

「それで、私は主導者であるギルを見つけ出して何としてもソイツから仏像のありかを聞き出してやるのよ！ でもそのギルが求めているガイアメモリが何なのかもついでに調べて、これは私一人だけの力じゃどうしようも出来ないって事に気が付いて・・・」

「そこで、僕達の事を知って・・・」

「依頼しに来たって訳か・・・」

「ちよっと！ そんな大変な事何で依頼の時に説明してくれなかったのよ！？」

「どうせ泥棒のお前の事だ、怪しまれるのが嫌だったんだろ？」

トレインの予想はだいたい当たっていたようで、リンスは少し齒切れが悪いような笑みを浮かべる。

「まあ・・・そう言う事ね。でも貴方達はこういう事件に慣れる訳だし、いざド パントと出会おうと直ぐに対応できるでしょ？」

「そんな無茶苦茶な・・・」

リンスの対応に、亜紀子は呆れ気味の表情を浮かべた。

「どうするんだい翔太郎？ このまま彼女と協力するかい？」

フィリップが翔太郎に尋ねると、リンスも少し不安そうに彼を見た。自分の正体が大泥棒だと知られた以上、彼はこのままこの依頼を引き受けてくれるだろうか？

それはトレイン達も一緒だった。彼女は人を殺めるような人間ではないが泥棒と言う汚名がある以上、中々真つ向人間である探偵が彼女の事を信用するのか？と。

「どうもこうもねえ・・・」

と翔太郎は帽子をかぶりなおし、

「引き受けるに決まってるんだろ！」

と、リンスを見つめていった。

「いいの？」

リンスは彼の顔色をうかがうような表情で尋ねるが、翔太郎はそんな彼女の

「ああ。例え依頼主が盗人だろうが、ガイアメモリはこの街を泣かせる悪魔の爪だ。それを風都だけじゃなく国外にまで広めようなんざ、俺は絶対に許さねえ！それに、困った女を見捨てねえのは、ハードボイルドの鉄則さ」

翔太郎の力強い言葉に、亜紀子もフィリップもそつと笑いを浮かべる。

「お馬鹿な翔太郎君なら、きっとそう言うと思ったよ」

「全く、相変わらず君はハーフボイルドだね」

翔太郎は二人に「うるせえ」と短く返した。この二人の笑い、それは長い事付き合って来た翔太郎の事をよく理解してこそ出来る仲間としての笑みである。彼は常に自分の生まれ育ったこの風都を純粹に愛し、故にその街の住人達の事を思つて探偵を続けてきた。ハードボイルドというクールな大人の男を憧れながらも、困つてる人物がいたらどうしてもほおっておけないお節介な奴。左翔太郎という男はそう言う人物なのだ。それを二人はよく知っている。

トレインとスヴェンはこの彼の判断を見て少し感心した。年齢はトレインとさほど変わらなそうだが、自分の意思をしっかりと持つてる奴だ、と。世間の意見に縛られず何を守りたいのかはつきりする奴。トレインはこういう人間はダチになって良いとも思う。それに賛同するフリリップ達の様な仲間もだ。イヴの方も風都にもすっかりこんな優しい人達がいてくれた事に安心した。

「それで、勿論竜君も協力するよね？」

亜紀子が聞くと、照井は不本意そうに溜息を付いて首を縦に振つた。

「仕方ない。メモリが関わってる以上、俺が動かない訳にはいかな
いからな。今は彼女の事についてとやかや言う場合じゃない」

「本当！？ やったー！ー！」

警察までお許しが出た為、リンスは大喜び。

しかし、いくら仲間が増えたとはいえ、照井の表情は中々晴れない。正直な話、警官である自分がいきなり盗人と一緒に行動をせままれ

るのはどうも気がすまなかつた。そんな彼の心境を察したのか、イヴがリンスのフォローを行う。

「大丈夫です。確かにリンスは物を盗む事が仕事ですけど、刑事さんの思うような人じゃないですよ？ ああ見えても結構お世話好きでおせっかいなんです」

イヴは静かに微笑みながら照井に伝えた。今言った事は嘘ではない。

彼女は本当は優しい女性。実際、嘗て自分が悪い大人に利用された所を、トレイン達に助けられた時も彼女も自分の事を心配してくれたのだから……

照井は少し迷った後、「……信じて良いのか？」と聞きなます。イヴは「はい」と答え、

「解った。そこまで言うのなら君の言うとおりにしてみよう」

と、イヴに微笑みを返した。

彼も警察ではあるが彼も鬼ではない。それはガイアメモリを使ってしまった物たちの心の闇を幾つも見えて来たからだ。確かにメモリに手を染める者達はあるが志藤のように人の命など軽く思う者も多いが、ある者は尊敬する人や愛する兄弟を殺され復讐に燃える者や、亡くなった家族の記録を侮辱された者など、そういう心の闇の影響で悪に染まってしまった者も多い。

勿論彼等の罪は許される者ではない。だが罪を憎んでも人は憎まない、それが人々が求める仮面ライダーの心だと、照井は初めて翔太郎と出会った時にこう教えられたのである。照井の表情を見て、イヴも安心したようだ。

が、上手く仮面ライダーを仲間に取りつり込めたと確信したリンスはというと……

「やったー！　これで敏腕女盗賊の名誉に泥塗らなくてすむわ！　さあ、仲間も増えだし、早速今後について話し合いましょ！

あ、そこに有るコーヒー貰うわね」

「あ、お、おいそれ俺が今入れたコーヒー！？」

「硬い事気にしないでよ、ハードボイルドなんでしょ探偵さん？」

と、悪戯っぽいウインクを翔太郎に飛ばしながら、リンスはごくごくと机に置いてあったコーヒーをまるで自分の物の様に飲み始めた。何だかずうずしい行動だが、それ以前に先程のセリフが自分の名誉の方が優先としか思えない為、照井はもう一度イヴに聞きなおした。

「もう一度聞く、本当に信用できるのか……？」

「だ、大丈夫ですよ……多分……」

イヴは何とも言えない笑顔を浮かべ、トレインとスヴェンも無意識のうちに彼から視線をそらすのであった……

? V 沈黙のW / 動き出す猫 (後書き)

どうでもいいですけど、アニメ版のリンスの声ってオーズのメズー
ルと同じゆかなさんだったのを思い出しました。

? V I 沈黙のW / 風都の猫 (前書き)

ええっと、すみません。本当は今回の最後には戦闘シーンに行きたかったんですが途中から別の提案が出たので、またまた変な所で切れてて短いです。

ほぼ週一のペースなのに戦闘シーンが無いと言つのは読み手側からしては退屈だとは思いますが、自分の決めた書きやすい流れでとしてはどうしてもこの様な形になってしまいます……

でもあまり会話シーンばかりを続けるつもりもございませんので、ご理解ください……。

? V I 沈黙のW / 風都の猫

ギル率いるコリオレイナスがガイアメモリを所持しており、それを輸入しようとしている事が判明し、翔太郎達とトレイン達はいち早く街中の調査に取り掛かる。

スヴェンは元国際警察の情報部員として実績があったらしく、それ繋がりでは照井と一緒に警察の手を借りて捜査を協力する事になった。

一方イヴの方は、16時間のフライトを終えた後に数時間にも及ぶ嚴重な荷物検査と審査、さらには志藤の変身したマグネットドールパントとの戦闘で、幾らナノマシンを所持しているとはいえ、イヴの体力はピークに達していた。

話し合いの結果、彼女は今日一日はリンスと亜紀子と一緒に事務所でフィリップの検索を手伝う事になる。

トレインと翔太郎はお互い歩き回るのが得意な上に体力にも自信があった為、成り行きで一緒に行動する事が決まった。

早速、4人の男たちはそれぞれの向かうべき場所へ向かった。

翔太郎はトレインと共に風都のとある神社の一角へ来ていた。そこはもうすぐ夏祭りが近く、至るところに屋台がたち始め、知り合いがここへ集まる事が多いので二翔太郎はここで何か情報収集がしやすいと考え個々まで来たのだ。

トレインはその屋台の一つであるりんご飴やの前で経っていた。

「おっちゃん、それ一つな！」
「ハイよ」

強面の男店員にりんご飴を一つ注文すると、後ろにいた翔太郎が呆れ顔で彼に釘をさした。

「おいトレイン、お前遊びに来たんじゃねえんだぞ」
「ハイハイ。つたく、アンタもスヴェンみたいなこと言うな？」

少し鬱陶しそうな顔をするトレイン。かれはこの場所に着いてから片っ端に屋体へ立ち寄り、焼きそばやたい焼き、かき氷や綿菓子などはじめて知った食べ物を片っ端から食べ歩いてきた。日本食と言うのは本当に種類が豊富でおいしいしん坊のトレインでさえ全て食べるのに時間が掛かると思っただ。

翔太郎は呑気なトレインに呆れ気味だ。
ここに来てからから彼は食べてばかりだ。同じ賞金首を捕まえたといとは口では言ってるがこんなに余裕こいて呑気に食べ歩いていては彼の真意を疑う。

出かける前にスヴェンからは彼の性格は本当に気まままで自由奔放な野良猫みたいな性格だと聞いたがまさしくその通りだった。
他の事への検索に夢中になった時のフリリップ程では無さそうだが、こう言う人は他人の意見に左右されない人間が多いので、接し方に困る。

「でもよう探偵、俺から食いモンを奪ったら後が困んのよ。この国に来る前に一つのことわざを覚えたんだ。腹が減っては何とやら・・・」

と、ここでトレインの視界に在るものが映りこみ、彼は言葉を切った。

「なあ、あいつらの着てる服って？」

「あ？」

トレインはそう言ってその何かを指差し、翔太郎はそちらに目を向ける。

指差す先には中学生くらいの三人の少女たちが水色やピンク色に様々な花柄に彩られた着物を着てはしゃいでいた。

「あああれか？ あれは浴衣つってな、この季節になると流行り出す日本の伝統衣装さ。あれがどうかしたか？」

「……いや、何でもねえよ」

フツとした笑み翔太郎にそう言った後、二束その浴衣姿の少女達を眺めた。

(そうか……この国はあいつの……)

トレインはふと、自分の記憶の中のある光景を思い浮かべた。

数年前の自分の記憶を……

トレインは建物の天井から牛乳瓶を片手に街を眺めていた。

全身を覆うほどの黒いロングコートに身を包み、目の前に見えるのは深夜の街を照らす巨大な満月。

東洋系の建物が幾つも立ち並び、その窓から放つ街明かりは非常に幻想的で見る者を思わず立ち止まらせるだろう。

しかし、彼の眼にはそんな風景などどうでもよかった。

ただただぼつつと目の前の街を見るだけ。

そして何時も思う。

自分が殺めて来た人物達の顔を……

人の命などどうでもいいと思うほどの冷酷さが自分にはある。その顔達を無言で振り払う為に、心の中でそう言い聞かせる。

その意識さえ捨てれば自分は以前の様な冷酷な人物でいられる筈だ。

だが消えない。 何時まで経っても消えない……………

だがそれは仕方がない事。

自分は罪人。

罪人は罪人らしく、その罪の十字架を一生背負う。

これは宿命……罪人である自分にふさわしい宿命。

辛いならばその罪の意識を根こそぎ消してしまえばいい。

そうでなくては、この組織で行きたく事は出来ない……

トレインは持っている牛乳をのどに流した。

ひたすら空を見つめながら……

ただただ無言のまま……

ただひたすら月をみつめる……

【まーたそんな顔して！】

一人の女性の顔が自分の顔を覗き込み、視界から月を覆い隠した。

髪は黒いボブカットに私服として何時も着用している浴衣が夜の風景によくマッチしていた。

年齢は自分よりも3歳は下だが、あの衣装がよく似合う女性ではある。

その外見の御蔭で初めて見た者をどこか素朴なイメージを持たせそうだが、そんな外見とは打って変わって彼女はトレインにくっついてたけのない笑みを向ける。

【もっと笑いなよトレイン君、「そんな顔してると、カラスに頭突かれるツスよ?」って何時も言ってるじゃん?】

二カッとした笑みで自分を指差す。

ある日何の前触れも無しに急に出会った女。

とても不思議な奴だった。

自分の正体を知っているにも関わらず、彼女はまるで友達感覚の様になれなれしく接してきた。

職業は掃除屋だが、まるで何時もその辺で居眠りしている野良猫の様に気ままな性格。

初めは鬱陶しいと思っていたが、接して行く内に彼女の見方も変わっていく……

何時しか、自分は彼女の生き方に憧れを抱き始めた……

そう、今の自分の生き方に切欠を作ってくれた……かけがえのない女……

(サヤ……)

トレインはその少女たちの浴衣を見て思い返していた

今は亡き……大切な友人の事を……

それは決して悲しみではなく、何処か懐かしむ様な、今の自分の生

き方を道記してくれた、改めて感謝の気持ちがいきまげ……

バチン！

「あたっ！？」

しかし、そんな彼に急にリンゴ飴の店員のデコピンが彼を現実に引き戻す。

「いってー！ 何すんだよ急に！？」

「そっちこそ商品頼んどいてぼさっとしてんじゃねえ。店の前でしみつたれた顔されるとな、味が落ちんだよ味が！」

額を抑えながら店主に食ってかかったが、向こうも恐そうな顔でリンゴ飴を一本付きだされる。しかし客が店主に暴力を振るわれたと言う事でトレインはあからさまに彼を睨むが、店主は何の悪気も無いように自分の仕事を続ける。

「ああ、悪いなトレイン。なあ尾藤さん、初対面なんだからもうちよつと優しい挨拶できねえか？」

「なんだその坊主は翔太郎の連れだったのか。じゃあ一つ教えてやる。これくらいのことぐだぐだ言ってるようじゃな、薄っぺらい男にしかねえぞ」

「誰が坊主だ、俺はもう23だぞ！ っっていうかあんな挨拶ありか！？」

「そう言う所が坊主だっただよ」

「ぬうわあ〜に〜〜！？」

「だから落ち着けての！」

「つて、あれ〜？　もしかして翔ちゃん？」

尾藤と呼ばれた店主に食ってかかるトレインを何とか抑えつける翔太郎。と此処でそんな彼に二人の派手なアクセサリーに身を包んだ女子校生二人組が彼に話しかけた。その後ろには頭をぼさぼさにした風変わりな男と、夏なのに何故かサンタクロースの格好をした男が一緒だった。

「ホントだ〜、は〜い翔ちゃん！」

「おお、クイーンとエリザベス。それにサンタちゃんにウォッチャマンまで、今日はお揃いだな？」

片方の女子校生クイーンから声をかけられて翔太郎は気さくに返事を返す。

「まあもう直ぐ夏祭りだからね〜。こう言う日本伝統の気分を皆といち早く味わいたい訳なんだ〜。所でそちらの御宅は翔ちゃんのお知り合い？」

ウォッチャマンと呼ばれた男がトレインの事を尋ねる。

「ああ、まあな。今日来日したばっかだな」

「トレインハートネットだ。よろしくな」

「はは〜外人さんかあ。日本へようこそ風都へようこそ！はいコレつまらない物だけとお近づきにね」

「え、くれんの？　あっはサンキューおっちゃん！何入ってた？」

「ビックリ箱」

「ええ！？」

サンタちゃんからの陽気なプレゼントを受け取るトレイン。ビック

リ箱って最初に言ったらビックリじゃないじゃん・・・

「へ〜結構良い男じゃん。でも、フィリップ君には負けるかな〜？」

「そ、そうなのか？」

「なに緊張してるの？ 結構かわいい所もあるんだね！」

「あ、いやあの俺は・・・」

「うーん、女の人だったら僕チンのブログに掲載していいか承諾出来たのにな〜」

「承諾？」

今時の女子校正らしいテンションの高い二人と、両手に持った二つの携帯を見て少し残念そうな表情を浮かべるウォッチャマン。どれも個性の強い人物ばかりでたじろぐトレインに、翔太郎は「まあ皆変わった奴ばっかだけど悪い奴等じゃないからさ」と笑って話を流した。しかし、トレインともあるう青年はこのくらいの事で会話が弾まぬ男ではない。と言うかさっきの店主といいこの4人と言いいコレぐらい個性の強い者が揃えば彼は「はは！風都ってのはおもしろえ奴ばっかだな！」と逆にはしゃぐ筈なのだ。それが素直にはしゃげないのはクイーンとエリザベスの着る制服が理由だった。

別に変な意味では無いが何と言うかこの服、随分前に知り合った、トレイン自身がとても苦手としている少女が着ている物と同じなのだ。

（そつだ・・・そう言えばこの国、あいつの故郷でもあつたな・・・）

そう、その少女はサヤと同じくこの日本出身。思いだして少し苦い顔になるトレイン。

その少女は嘗て自分が敵対していた「星の使徒」の元一員で、ひょ

んな事から自分に”一目惚れした”と言う理由で出会った度にしつこく付きまおうとする少女だった。

組織を抜けて自分の罪と向き合うと言う形で悪事は働かなくなったが、どんな場面でもやかましく天真爛漫に明るく振舞う、いわゆるシリアスブレイカ な少女で自由奔放気質なトレインでさえも苦手とする少女なのである。

「あ、そう言えばさっき私等も新しいトモダチ出来ちゃったもんだよね〜」

と、此処でクイーンが何か思い出したようにエリザベスが翔太郎とトレインに言った。

「友達だつて？」

「うん、何かその子も風都初めてらしくて？」

「それで、迷ってた所を僕チン達が道を教えてる内に」

「自然と意気投合しちゃったんだよね」

「直ぐそこに居るから紹介するね。」

おーいキョウコ〜〜」

「え？」

エリザベス達は一同に後ろの神社を振り返り、そこで何かお願い事をしている制服の少女を呼び出した。

「ハイイ！」

見た目はクイーンとエリザベスと同一年なキョウコと呼ばれたその少女は、トレインが自分の視界に入った瞬間驚いた様に硬直する・

・・・

それはトレインも同じだがそれは厄介な事になったと言うすこし嫌な硬直だ。こんな事が有る物なのか？ ついさっきまで思いだしていた苦手な奴とこんな直ぐにご対面とは・・・

「・・・クロ様？」

「や、やべえ・・・」

「うっわああああい！ クロ様だあああ！ お久しぶりです〜
〜！」

次の瞬間その少女、キリサキキョウコはトレインを見つけた瞬間猛ダツシュでトレインに抱きかかった・・・

? V I 沈黙のW / 風都の猫 (後書き)

皆様の御蔭でPVアクセス2万を超えました。

こんな未熟な自分の小説を何時も読んでくださって本当にありがとうございます^^

??

危険なA / 狙われる猫 (前書き)

お久しぶりです。暫く更新を止めてすみません。ここ最近他の作品の方に熱を注ぎました。

今回もそんなに長くは無いかもしれませんが。

自分の欠点は執筆速度が非常に遅い事ですので……………
それでは、どうぞ。

??

危険なA / 狙われる猫

「いやー、神様って本当に居るんですね！ キョウコついさっきその神社で『久しぶりにクロ様に合わせてください』ってお願いしたらもう叶っちゃったんですものー！ そうこれは運命。神様がクロ様とキョウコに下さった運命と言う名の赤い糸を下さったんですよコレは！ うーんコレはもうそうとしか言いようがないですよ！ っと言う訳でクロ様、再開を言わって私と合いの口づけを〜〜」

「やらねえっての！」

準備中の屋台が立ち並ぶ神社の前。

周囲に人が居る事など全く気にせず、突然キスを迫りに来るキョウコにゲンコツを喰らわすトレイン。「イッタ〜・・・」と頭のたんこぶを抑えるが直ぐにマイペースな笑みに戻る。

キリサキ「キョウコ

年齢17歳 嘗てトレイン達と敵対していた道使い専門のテロ集団「星の使徒」のメンバーだったが、トレインに一目惚れ以降彼と「人殺しは絶対にしてはいけない」と約束され、更には自分の思い通りにならければ味方さえも平気で切り捨てるリーダー各のやり方についていけず、組織を抜けた少女。

元組織の一員と言う事で、彼女もまた道使いの一人だ。体内の「ヒート氣」と呼ばれるエネルギーを高温度の熱風や炎に変えて敵を攻撃する「Heat」と呼ばれる能力。

それが彼女の能力だ。

だが先のトレインとの約束以降、能力を使った事は一度も無く、ごく普通の日常生活を送っている。

「お前、日本の女子校生に知り合い居たのか？」
「まあ・・・成り行きで知り合ってたな」

翔太郎の質問にトレインは適当に答える。とりあえず彼女が元星の使徒である事は伏せておいた。知られたら色々面倒事が増えるだけだからだ。

「へートレイン君と知り合いなんだ〜！」

「って言うか随分と進んでるっぽいじゃん」

「羨ましい〜！」

「えへへ〜、わかります〜？ 実はもうキスまで済ませた後ですて〜！」

「マジで!? 超羨まし〜！」

「おい、お前変なデマ流すなよ〜！」

トレインはこれ以上誤解を招かぬようキョウウコに怒鳴るが・・・

「やだあ照れちゃってるよ」

「やっぱかわいい所あるじゃん」

「あのなあ・・・」

彼女等も全く意に介さず、彼にちゃちゃを入れる。

で、ウオッチャまんなそんなやたらキョウウコに纏わりつかれるトレインを携帯の写真に収め、面白そうに隣のサンタちゃんにこう尋ねる。

「今と撮った映像、ブログに公開したら何人のユーザーからコメントくるかな？」

「きつと9割の人間がこう書く。『リア充爆発しろ』って！」

「そこ！ 肖像権って言葉知ってつか!? ってかリア充って何だよ

!？」

振り回されっぱなしのトレインは半場キレ気味で二人にツッコミを入れる。

「そもそもお前は何でこんな所にいるんだよ？」

只管ひつつこうとするキョウウコを鬱陶しそうに自分から離しながら、トレインは尋ねた。

「修学旅行です！　んで、本当はもう帰りの飛行機が飛んでる時間なんですけど、途中でク口様の気配を感じて空港から此処まできちやいました〜！」

「お前それ完全に乗り遅れてんじゃないか！　どうやって帰る気なんだよ!？」

「大丈夫です、学校の先生にはちゃんと連絡してますし、また次の飛行機に乗ればいいですから！」

「いや、そういう問題じゃねえだろ・・・」

トレインのまともな講義も彼女は全く気にする事は無い。いつも機関銃のようにおしゃべりでどんな時自分のペースを全く崩さない。これがこのキョウウコの性格であり、トレインが苦手としている要因である。初めて出会った手からもう一年近くなるが、この少女は全く変わって無さそうである。

「あのよ、お取り込み中すまねえんだけど・・・」

濃い大人達の間更に八チャメチャで陽気な女子校生3人。このままでは自分の存在が薄くなる事を恐れ、遂に翔太郎は自ら周りの話の腰を折る。　　というか、今日は彼等とこんな話をしに来た訳では

ない。どんな小さな出来事でも良いので、一刻も早くギルやコリオ
レイナスについての情報を集めないと。

「？ おじ様誰ですか？」

途中で割り込んで来た翔太郎に首をかしげるキョウゴ。おじ様と聞
いた途端に軽くつこけそうになった。

「ごほん、俺は左翔太郎。探偵だ。えーつとキョウゴちゃんだっけ
か？ 仮にも俺はまだ20代なんだ。おじ様つてのは遠慮してもら
いたいな」

「えー、でもその服、ドラマの再放送で見ましたよ？ 物凄く昭和
臭のするドラマでしたし、その服はおじ様が着る服と考えても良
いんじゃないんでしょうか？」

（がーん・・・まだ会ったばかりなのに・・・）

それって自分の服装は古いと言う事か・・・ 自らのお気に入り
の衣装を否定され、落ち込む翔太郎。

正直自分に探偵のセンスが無いと言われる次に傷つく言葉だ。

しかし、年下の女子校生相手に一々怒りを抱いていてはハードボイ
ルドとは言えない。翔太郎は軽く流す事にする。

風都の市民は完全にキョウゴに自分のペースを奪われていた。

彼等にとって彼女の登場は恐らく台風の眼と似たような存在だろう
な・・・

と、この時トレインは思った。

翔太郎も嵐が過ぎ去った様に若干ホツとするも、遠くから「キヨウコです〜」と返事が返って来たので「いや、名前聞いてるんじゃないって・・・」と小声で反論した。

「そう言えば翔ちゃん、僕チンに何か聞きたい事あったんじゃないの？」

3人が居なくなった後、ウォツチャマンが思い出したように翔太郎に尋ねて来た。

ちなみにサンタちゃんは「そろそろ自分の店の準備しないと」と言っただけで先に帰っている。

彼は今ペットショップの店長として働いているのだが、今日は休業日だったそうだ。

「ああそうなんだよ、実はさあ・・・」

翔太郎はトレインから後ろに居るウォツチャマンに視線を移す。

トレインは彼の話に聞き耳を立てて回りの屋台を何となく見回す。

尾藤の店はここからだと言った距離もある。

これにより、その場に入る全員がトレインから視界を外した事になる。

『よし、今だ！』

物体が叫んだ瞬間、トレインの足場に円形のラインを発声。

「！ な！？」

そのラインは瞬時に紫色に輝きだし、トレインを困惑させる。

その時だった。

「クロ様く買って来ましたく」

つい先程購入した鈴のキーホルダーを片手に持ったキョウウコが嬉しそうに駆け寄って来たのだ。なんとというスピードだろうか、先程皆と離れてまだ一分も経過してない。彼女はそのまま先程の様にトレインに飛び付こうとしていた。

「駄目だキョウウコ、来るん……」

「へ？」

トレインが叫ぶ前に、キョウウコは彼を囲むラインの中に入り込んでしい、それと同時に、二人の体は一瞬で光に包まる。

「ん？」

ほんの数秒だけ目を離していた翔太郎とウオッチャマンは、急にキョウウコの声が聞こえたような気がして後ろを振り返った。

だが二人が見た場所にキョウウコの姿は無い。それどころか、トレインの姿さえも無い。

ただ地面に鈴のキーホルダーが無造作に落ちてただけだった。

余りの突然の出来事にこれまで様々な敵と戦って来たトレインでさえも、こんな事は初めてだった。状況を判断する前に地面はほとんど自分達の元に近づいていく。

「わああ、クロ様落ちる~~~~!!」

「ちい！」

直ぐ隣で、キョウコも落下しながらこの突然の状況に混乱している。トレインは空中で彼女を抱きかかえると、ハーデイスを抜き、地面に向かって数発乱射した。発砲の反動を利用して落下スピードを下げる為の物だ。ハーデイスは普通の拳銃よりも反動が大きく、並大抵の人間が扱うにはかなり長い時間の訓練を必要とする。

銃弾6発をタイミングよく全て撃ちきる。その甲斐あって、二人の体はかるうじて無傷で着地で来た。

「た、助かったあ……」

「えへへ、クロ様からお姫様抱っこされています」

「……俺はお前が羨ましいぜ……」

全くコイツって奴は……こんな状況でも自分の姿勢を崩さないキョウコの余裕ぶりにトレインは呆れて線路の外に彼女を下ろした。

プアアアアアア!!

「」
「!!」
「」

が、ここ急に後ろから何か大きな音が聞こえた。クラクションの音だ。

(待てよ、俺達が居るのは線路の上。って事は・・・)

トレインは振り返り、そして再び戦慄が走った。

目の前に巨大な機械が猛スピードで突っ込んでくる。特急列車だ。

「!?!?!?!」

「ど、どあああああああ!?!?」

距離はもはや目と鼻先と思えるほど近い。もはや避ける暇すらない。

とっさにトレインはキョウウコを線路から離れるよう突き飛ばした。

「きゃー!」

キョウウコは地面に尻餅を付いた瞬間、さっきまでトレインが居た場所を電車が猛スピードで通過してい。

電車が完全に通過した後、そこにトレインの姿は無かった……

「……………クロ……様? クロ様! クロ様あ!」

幾ら普段能天気なコレはでもコレは焦った。突然見ず知らずの場所に自分が居て、更には折角再開した愛しの人が目の前で電車の下敷き、もしくは撥ねられるとは……

お願い、生きてて……

必死で願いながら駆け足で線路までたどり着く。

そして、そこで彼女は見た。

「あ、危ね……」

線路の中心でトレインが息を付いてうつぶせに寝転んでいた所を。あの時電車と自分との距離からしてもはや避ける暇さえ無いと判断した彼は、とつさに自らの体を線路の中心に倒し、特急列車の下の隙間に潜り込むようにしたのだ。

結果、電車は何事も無かったようにトレインとの衝突を免れ、そのまま通過していったのだ。

しかし、もし一秒でも判断が遅かったら、体系がウドニー程の太り気味の体だったら、おそらくもうこの世には居なかっただろう。

「クロ様……よかつた……ビックリしましたよお……」

「悪い、とつさの判断でさ……」

キョウコは安心したように表情を緩め、腕を掴んでトレインの体を起してあげた。

「それにしても、此処は何処なんでしょう？」

「見た所、何かの操車場みてえだな。そうだキョウコ、お前あのクイーンやエリザベスとか言う奴等と友達になつたんだろ？もしかして電話番号とか聞いてないか？」

「はい。あ、連絡しますね」

「頼むぜ」

そう言つて、キョウコはポケットから携帯を取り出して先程登録したばかりの電話番号にコールする。

その間、トレインは再び状況の確認に移った。

改めて周りを見渡すと、大量に引かれた線路の上に彼方此方にコンテナを積んだ貨車や使われてなさそうな客車やディーゼル車等が線路の上に泊まっている。車体が日本製なので海外に飛ばされてしまった訳では無さそうだ。

直ぐ近くには古びた倉庫もあり、人の気配は無い。

ついさつきまで翔太郎達と一緒に祭り前の神社に居たのに、これでは自分が瞬間移動してしまつたとしか言いようが無い。

何だか嘗て星の使徒のメンバーだつたエキドナ「パラスと言う道使いの女性を思い出す。

彼女は目の前に空間に穴を開けてそこから別の場所へワープ出来るGATE（門）と言う能力を持っていた。

（まさか今更アイツが復讐しようなんてねえよな・・・？）

一瞬そう思ったが直ぐにその考えを消した。

確かにエキドナは星の使徒内で一番クリードに忠実な女性で、組織が壊滅される最後までずっとクリードの側に居た女だつた。自分はそのなクリードを殺しはしなかつたが戦闘不能になるまで追いつめて倒したので、彼女から仕返しされてもおかしくは無い。だがあの戦いに敗れたクリードを労わる彼女の眼には殺気は無かつた。むしろナノマシンと道の力を両方を手に入れ、暴走したクリードを止めた自分に感謝さえしていた。

トレイン達と星の使徒と戦いは終結して既にかかなりの月日が経過している。報復するならとつくにやっつてるだろう。

今では何処で何をしているのやら。

p r r r r r r r p r r r r r r r p i !

『あ、キヨウコ?』

そんな事をに、キヨウコの携帯からクイーンの声が聞こえて来た。どうやら無事つながったようだ。

「もしもしクイーンさん、今私達ですねえ・・・」

キヨウコが自分達の居場所を伝えようとした、その時だった。

「!!! キヨウコ伏せろ!」

「わあ!?!」

トレインは急に異様な殺気を感じ、キヨウコを強引に地面に伏せさせた。その拍子で携帯を落としてしまう。

バァン!

伏せた瞬間一発の銃声が聞こえ、自分達が居たすぐ後ろの砂利の一部がはじけた。銃弾が着弾したのだろう。

バァン!

また一つ銃声が聞こえた。瞬間、先程地面に落とした携帯が粉々に砕け散った。

「! キヨウコの携帯が!?!」

途端に悲しそうな表情を浮かべるキョウコとは裏腹に、トレインの顔は一気に険しくなり、持っていたハーデイスを構え、戦闘態勢に入る。

Bannon!

再び銃声が聞こえたと思うと、トレインは後ろを振り向いてハーデイスで銃弾をはじいた。

はじいた球は二人の居るすぐ傍の地面に落下する。

落ちた銃弾は10センチ以上の長さを持つ狙撃用の銃弾だった。

「……キョウコ……お前は隠れてる……」

「隠れるって何処へ……」

「何処でもだ!」

叫んだ瞬間、トレインは一気に翔けだしてキョウコから距離を取る。

「く、クロ様!」

キョウコが叫んだが返事を返す暇は無く走り続ける。再び銃弾が自分に向かって来た。

何発も何発も。全速力で走りながら、彼は自分に向かってくる銃弾を次々に弾いていく。

(やっぱりな……狙いは俺か!)

次々と自分に向かってくる銃弾で、トレインは確信した。

動きながら敵の銃弾の方角を予想すると、どうやら先程見つけた古い倉庫からようだ。

3階の辺りに丁壊れた窓がある。成程、あの位置なら此方を狙いやすい。

初めにキョウコを狙ったり、彼女の携帯を破壊したのは恐らく自分を殺した所を口外させない、口封じの為だろう。

反撃に移ろうにもこの状況では無理だった。

ハーデイスの弾は先程の発砲で使ってしまったので、何処かに隠れてもう一度装填する必要がある。

だがライフルの攻撃は此方が銃弾を込める暇さえ与えないほど次々と飛んでくる。

しかもその銃弾全てが頭や胸など致命的な所ばかりを正確に狙ってきている。狙撃の腕もかなりの物の様だ。ハーデイスでガードしながらトレインは思った。

走っていると、相手からの銃撃が止んだ。

敵も弾切れだろうか？ 何にしてもコレはチャンスと思い、トレインはようやく直ぐ近くの客車までたどり着く。陰に隠れて銃弾を込めた。これで反撃が出来る。

(何処から撃ってくるのかは解った。さて、どうすっかな・・・)

銃弾を装填しなおした後、再びハーデイスを身構え、もう一度敵の正体と状況分析に応じる。

敵があのかの倉庫の窓から狙撃してきてるのは間違いない。

陰から顔を出して、敵の様子を見ようと思ったが止めた。先程あのかの倉庫からキョウコとの距離は100メートルくらいはあった。

今トレインが居る位置からまだいたい距離は変わらないが、そんな場所から携帯を撃ち抜ける程の腕前だとすると、恐らく顔を出した瞬間狙ってくるだろう。

だが此処で反撃しなければ外に出られない。

隠れてるとは言ったがキョウコの事も心配である。今の所気配は感じないがもしかしたら仲間が居る可能性も否定できない。そうなったら彼女を戦いに巻き込む事になる。彼女には戦ってほしくなかった。彼女はもうごく普通の少女として暮らすと自分と約束した。だから例え正当防衛であっても可能な限り力は使ってほしくなかったのだ。星の使徒の一員だった頃と決別する為に。

(となると・・・やっぱ一発勝負か・・・)

敵も銃弾の争点は完了しただろう。反撃とは言え、トレインは敵を殺すつもりは微塵も無い。掃除屋として、どんな悪人でも絶対に人の命を奪わないのが彼の主義である。

と言う事でこの状況下で敵のスナイパーを殺さずに生かす方法はただ一つ。この距離から敵のライフル銃を射撃で破壊する。

一言聞けば人間技とは程遠い芸当だが、もはやそれしか手は無い。

いちかバチか、トレインは決心してハーデイスを構える。

そして素早く物陰から物陰から体を乗り出し、倉庫の窓に向かって乱射した！！

ドドオン！！

瞬間、敵の銃声とトレインの銃声が同時に操車場充に響き渡る。

お互いの銃弾は只管真正面に直進、どんどん距離を縮めていく。

20メートル、

15メートル

10、

5

そして遂に互いの銃弾が正面衝突する。

ライフル銃の銃弾はリボルバーの銃弾より格段に大きい為、普通ならこの様な出来事が起きればリボルバーの弾は弾かれ、ライフルの弾はそのまま直進しターゲットに命中する筈である。

だが弾かれたのはリボルバーの弾の方だった。

何故ならトレインが放った弾は1発では無く、一瞬で2発乱射していたからだ。

御蔭で一発目にぶつかった衝撃を受けライフルの銃弾は減速、残りの二発目と衝突して弾かれた。

2発目の銃弾はそのまま直進。

数ミリの狂いも無く一直線に進んでいき……

遂にそれがライフルの銃口へ突入！

ガシャあ……

命中した場所から、何かが砕けた音が聞こえた。恐らくトレイン側の銃弾が、敵のライフルを破壊したのだろう。

トレインは尚も身構えながら小さな溜息を付いた。自分に向かってくる弾を撃ち落とす等、とても人間技とは思えないがこのトレインという男はそれが出来てしまう。

しばらく様子を見るも、再び攻撃が来る事は無かった。しかしまだ安心は出来ない。

トレインは只管ハーデイスを構えながら、狙撃してきた場所に向かった。

何者が自分を狙ったのかは確認せねばならない。

倉庫の入り口のシャッターは開いていたのでそこから侵入する。

倉庫の中は工場のような作りで、当たらずに古びたクレーンが垂れ下がっていたり、古びた客車の部品やドラム缶、ビルの建造に使う鉄骨の様な部品が重ねられている。

到る所で壁に穴が開いてたりペンキがはがれてたりしているので、

もう随分前から使われて無い事は間違い無さそうだ。

ふと、すぐ眼の前の鉄筋の積み重ねた場所から視線を感じ、銃を向ける。

「いきなり随分な歓迎じゃねえか。ここはパーティー会場か？」

警戒しながら見えない敵に声をかけた。最初は挑発のつもりでジョークを飛ばし、次は口調を尖らせた。

「とつとと出てこい……コソコソすんのは好きじゃねえ……」

トレインは愛銃を握り締め、謎の敵に警告した時だった。

アームズ！

銃を向けた場所から何かの機械音声が聞こえてた。

その音声中に聞き覚えが有る事に、トレインはますます身構えた。何故ならその音中は……

『くくく……ふふふふ、パーティーか。その通り此処はパーティー会場だ』

途端にその物陰から人を食ったような笑い声が聞こえ、何かが現れた。

『俺とお前の貸し切りのな・・・』

現れたのは人間ではなく怪人だった。

外見は血の様に赤く染まった素肌、胴体にはゴツゴツした鉄の鎧の様な物を見に纏い、顔にはまるで縦に伸びた髑髏のような半透明のフェイスガードという凶悪な外見をした異形。背中には巨大な剣をしょっており、見るからに戦闘狂という感じの身形。

トレインにはその怪人が何なのか直ぐに解った。先程聞いた音声は翔太郎達と出会った時からもう既に聞き覚えがある。

ガイアメモリのガイアウイスパ！。そして目の前に居るのはそのメモリの力を宿した超人・・・

(ド パントか・・・)

ド パントはおぞましい外見似合わず、陽気に拍手しだした。

『いやあ、お見事お見事。よくあんな芸当が出来るモンだ。流石、

伝説の”ブラックキャット”だな・・・。』

その言葉を聞いてトレインの銃を握る力が増す。コイツは何故自分の名前を？ しかも、嘗ての呼び名までコイツは口走った・・・

「誰だお前。何故俺を狙う・・・」

警戒心を一切解かず、只管睨みつけながら質問するが、ド パントはそれを拒否するかの様に天井を見上げる。

『答える気は無い。何故なら……お前には此処で死んで欲しいからな……』

「！」

次の瞬間、ド パントの両腕に直接装備されたマシンガンをトレインに向かって構え……

『DIE！！（死ねええええええ！！）』

奇声を上げながら、怪人・アームズド パントは機銃を乱射した……

??

危険なA / 狙われる猫（後書き）

本当は前回の話で此処まで来る予定だったのですが、話の転回に迷ったので切ってしまいました・・・

今回登場した空飛ぶ白いピラミッド。Wファンの方は解ると思いますが知らない人が聞けばさっぱりなのでこの回で説明するかしないか迷いましたが、その内また登場させる予定なので、その時まで説明は割合しておきます。

それと、トレインが電車に衝突の危機から脱出した方法は実際にあった事件の資料等をモチーフにしていますが、正直今の電車相手にコレで助かるのか？と、自分では少し疑問に思ったり。

次回、ド パントとガチバトル！

No. ? 危険なA / 交戦する猫 (前書き)

皆さん、どうもお久しぶりです。

この度は1カ月も更新を止めてしまい、誠に申し訳ございません。
活動報告でもお書きしておりましたが、現実世界でのやるべき事が多かつた為、正直休みの日でも心に余裕が持てない日が続いておりました。

今回ようやく更新できましたが、今月(10月)も個人的に用事が多い為、正直また月一話のペースになる可能性があります・・・

それと前回、アームズド パントの腕は両腕が武器に変化すると最後に書いてましたが、あれは僕の間違いで、正しくは左腕だけでした。すみません。

それとお知らせなんですけど、タイトルをご覧になってお解かりでしょうか、ずっと悩んでいたサブタイトルが決まりましたのでこの度追加いたしました。

その名も、「BLACK CAT & 仮面ライダー」
TEMPEST GUILTY

TEMPESTとは「大あらし 暴風雨」と言う意味で、

GUILTYは勿論「罪、有罪」と言う意味。

これらを合わせて、「罪の嵐」という意味を込めたタイトルにしました。

なぜこのタイトルにしたかは、いずれ解ると思います。

それでは、もう殆ど忘れてる人も多いと思うのでここは一つ前回のあらすじ。

ギルの居場所を突き止める為、翔太郎はトレインと共に知人の集まる祭り準備中の神社の前へ出かける。

そこでトレインは偶然キョウコと再会。

だが突如としてトレインとキョウコは何者かによって知らない場所へ転送され、

そこでトレインは突如現れた謎の敵、アームズ・ドーパントに命を狙われる事に……。

はたしてトレインとキョウコの運命は!?

No. ? 危険なA / 交戦する猫

鳴海探偵事務所の地下にはWの専用装甲車、リボルキャリアが収容されてる秘密のガレージが存在する。

窓も無く、壁はどれも鉄筋やコンクリートで作られ無機質感が半端無いがここは探偵、フィリップの立派な仕事部屋である。

「キーワードは、ギル・アルフィルク。そして、コリオレイナス・」

フィリップは今自分が喋った言葉をホワイトボードの適当な場所にマジックで書いた。

その後、目を瞑りながら両手を広げ、そのまま動かなくなった。

「亜紀子さん、フィリップさんは何を？」

側に居たイヴが彼の行動を不思議そうに尋ねた。

「地球の本棚に入ったんだよ」

「地球の本棚？」

「フィリップ君の頭の中にはね、この世界の全てって良い程の沢山の知識が入ってるの」

亜紀子はイヴに地球の本棚について説明し出した。

地球の本棚はフィリップが入る事が出来る特殊な精神世界の事である。

今彼の頭の精神は上下左右も真っ白で大量の本棚が並べられた部屋に有り、彼はそこからこのこの地球上に存在する食べ物や現象、土地、歴史、勉学、物。果てには特定の人物の事など、此処から様々な言葉を検索し、そのワードに有った本を検索し、事件のヒントを見つけて出す事が出来る。

翔太郎や亜紀子によ聞き込み調査、風都の住民達による情報や警察の協力、そしてフィリップの地球の本棚。

これらの力が合わさって、彼等は何時難事件を次々と解決してきたのである。

「凄い、そんな事が出来る人が居るんですね！」

大の読書好きな彼女なら恐らく大量の本と聞いただけでもイヴは素直に心が弾んだ。

「でもそんなフィリップ君でも知らない物もちゃんとあるんだ。そんな時は”さつき”みたいに周りが見えなくなるくらい調べ回るんだけどね」

「はあ。成程・・・」

亜紀子の説明を聞いてイヴは苦笑いを返した。

翔太郎達が出て言った後、イヴの持つ不思議な能力についてずっと気になっていたので、彼女からそれがナノテクノロジーと聞いた時はますます興味を持った。

言葉自体彼も記憶に有ったが彼の知る医療関係のナノテクと比べイヴの持つナノテクはフィリップの興味を抱かせるには十分だった。その後、すぐにイヴの持つナノテクについて検索しようとしたが「

今はギルの調査が先！」と亜紀子に強引に引きとめられて、今に至る。

「うーん・・・やはり本が絞れない」

「そんな、フィリップ君でも難しいの？」

フィリップは眼を閉じながら顔を顰める。

そう、幾ら地球の全てと”言ってい”知識でも万能とは限らない。特定の人物に関する情報が少なければ少ないほど、本棚にある的確な本は絞れない。中には中身全て破かれた様に削除されている本だけだ。

その後リンスも浮かない顔で頭をかきながらガレージに入って来た。

通常翔太郎達はこのガレージはライダーの秘密を無闇に漏らさぬよう、あまり他人入室させない事になっているのだが今回はトレイン達との協力すると言う事で特別なのだとか。

「駄目。私の知ってる他の情報屋も、奴本人についてはお手挙げみたい。ギルってこれまで何度も整形手術で顔やや名前変えたりして昔の住民登録とか自分に関する記録は全部抹消してるらしいのよ」

「じゃあ、もしかしてギル・アルフィルクって名前も？」

「多分偽名でしょうね・・・」

(どおりで本が絞れない訳だ)

フィリップは納得しながらも顔をしかめた。

顔をみた者が少ない、おまけに偽名となれば確かに地球の本棚で個人を検索するには情報が少なすぎるのだ。

「ねえ坊や」

「ぼ、坊やは止めてください。僕は子供じゃない……」

年下の少年を苛めるのを若干楽しむように笑うリンスにフィリップは少し動揺する。

「ふふ、じゃあフィリップ君。さっき映像で見たスタンリーの事は調べてみた？ そいつもコリオレイナスの構成員な訳だし」

「その事なら既に検索済みですよリンスさん。スタンリー・オーブ・ガ ネレイド。」

非常に好戦的な性格と有名だったらしく、元々は内戦の激しかったと某国の陸軍に所属してたみたいだけど、終戦して以降は軍を下りている。

だが終戦後、何らかの理由でコリオレイナスの一員となった。

でもそこまで解ってるも、ギルについて情報が繋がらないんです」

「そっか……じゃあ恐らくそいつもギルの顔は見たこと無いんでしょうね……」

「でも掘り出してみる価値はありますよ。此処はもうちょっと粘ってみましょう」

「お願いね」

フィリップが再び検索に入ろうとした時だった。彼の持つスタックフォンがコールする。

「ちょっと失礼。もしもし翔太郎か。どうしたんだい？」

《大変だフィリップ、トレインの奴が行方不明だ！》

「何だって!?!?どう言う事だ!」

幸いにも隠れる場所は電車の陰や積み重ねられた鉄骨など沢山あったが物によって所何処る隙間があり完全に攻撃を防ぎきれぬ訳じゃない。

『逃がすか！』

必要にド パントは障害物の向こうを走るトレインに発砲を続けた。走れば走る程後方の壁や手前の障害物から激しい銃撃と着弾した火花が彼を追いかける。

トレインのスピードのお陰で中々攻撃が通らないドーパント。

だがトレインも攻撃を受けるばかりではない。

一旦敵の視界の陰になる場所に隠れ……

何とその場から高くジャンプしアームズドーパントを飛び越え、

隙を付いて背中中の装甲から皮膚が露出した部分に集中砲火を浴びせた。

『むっ！？』

腹部から小さな火花を散らし、アームズ・ド パントは一瞬だけ後ろに下がる。トレインはそれを見て心の中で（よし！）とガッツポーズした。

一か八かで発砲したが、どうやら鎧で守られて無い部分は銃でもダメージを与えれそうだ。

実を言うとド パントは意外と通常の重火器が効く。流石にメモリブレイクとまではいかないが、多少のダメージは与えられるのである。

以前戦ったマグネット・ド パントに効き目が無かったのは、恐らく磁石を操ると言う強力な戦法で自らの防御に専念した闘い方をしていたからだろう。

『良い腕だ・・・だが痒い!』

だが命中はしたもののアームズ・ド パントは特に気にする事も無く腕の銃で反撃する。

「おっと!」

トレインは再び側にある大型トラックの陰に素早く転がり込んで攻撃をしのぐ。

数重発の弾がトラックの運転席を貫き、窓ガラスが粉々に砕け散った後、急にド パントからの銃撃が止んだ。

「?」

何かと思い、恐る恐る陰から顔を出し、様子を覗うトレイン。

そこで確認したのは、背中に背負っていた大剣を右手に持ったアームズ・ド パントが地上を蹴って此方に向かって飛び込んできている姿だった。

それを此方に向かって力いっぱい振り下ろす。

「!?!」

『らあああああ!?!』

間一髪の所でトレインは素早く横に転がってド パントの縦斬りを交わす。

軽トラックは真つ二つに切断さる。凄まじい切れ味だ。

『さあああつっ!?!』

「クソ、コイツ接近戦まで!」

ド パントは再びトレインに振りまくる。

生身であるトレインも隙を見つけるまでは回避に専念する。

『つつつつく。どうしたブラックキャット。もっと遊んでくれよ。

久々なんだよ、こんな清々しい気分はさ』

「知るか! んな危険な遊びに何時までも付き会えるか!」

再び距離を取り、トレインは只管あちらこちらの障害物に隠れながらド パントと激しい銃撃戦を繰り広げる。

そんな中でも、ド パントは全く余裕を崩さず、むしろこの状況を楽しんでるかのように銃を乱射しながらトレインに呼びかける。

『危険? それが良いんだろ。 見る! この互いの銃のぶつかり

合いで周りの物がどんどん壊されていく! お前はさっき俺のスナイパーライフルを破壊した。とても爽快な気分だろ?』

(っち、世の中居るんだよな。ああ言う破壊を楽しむクラッシャーが……)

ド パントの言うとおり、二人の銃撃戦は、流れ弾で窓ガラスは割れ、古びた天井に当たった流れ弾の破片や欠片が降ってきたりもした。工場の内部と言う事で互いの銃の音は耳の鼓膜が破れるのではないかと思う程やかましく響き、室内を小さな煙や火薬の臭いで充満させていく。

時々敵の背中を取って背後から発砲で来たがド パントは振り向きもせず此方の銃弾を撃ち落したりというところでもない芸当を見せつけた。

何度も何度も障害物に隠れて素早く弾を込めなおすトレイン。

撃ってくる銃弾の数からしてド パントには「弾切れ」という概念も無いようだ。

トレインは舌打ちしながらまたしても障害物に身を隠す。

非常に理不尽な状況である。此方は仮面ライダーの様な硬い装甲を身に纏っている訳ではなく完全生身で一発でも攻撃を受ければ致命傷だと言うのに、ド パントの方は多少の攻撃ではびくともしないと来た。

やはり此処はバーストで挑むしかないか？

だが少し思いとどまる。バーストは威力が高い文、弾数が少ない事と着弾するまでのスピードが通常の銃弾より遅いと言うリスクがある。

「仕方ねえ。今の内にスヴェン達に応援を……」

そう思ってトレインは再び銃弾込めながら、ポケットから自分の携帯を取り出した。

すると再び、敵からの銃撃が止んだ。

『させるかああああ!!』

と思つたら再び先程の大剣による攻撃。

間一髪、力いっぱい振り下ろされた剣を素早く横に転がって交わす。と、避ける隙を付いてド パントは直ぐに左腕の機銃でトレインの持っていた携帯を撃ち抜いた。

『つぶ。これでも応援も呼べないな?』

余裕気なド パント。

「でも御蔭で隙が出来た」

『!!--!!--!!--』

だがトレインも笑みを浮かべながら、ハーデイスをド パントの機銃に向けて発射。

機銃に着弾した瞬間途端に左腕の銃が一瞬で凍りついてしまう。

「冷凍弾だ。言つとくがその氷は簡単には溶けねえ。これでその腕は使えねえな?」

『て、テメエ・・・』

た。

彼女は嘗て一度、組織のリーダーであるクリード・ディスケンスと共に、大統領を含む某国の政治家達を襲撃すると言う大胆なテロを行った事が有る。

周りの仲間は次々と建物をガードする警官や兵士達を惨殺していく中、キョウコも目の前に配置してあるパトカーや戦車を次々と自らの力で燃やしつくしていた。

逃げ回る警官隊やボディーガードの殆どは他の仲間があの手へ送り、キョウコもそれを手伝った。

この頃の彼女はまだ組織に入りたてだった為、周りの仲間と比べて人を殺傷した人数が限りなく少なかった。

だが、人の命を奪う事に数は関係無い。

どんなに数が少なかるうとも、自らの手で誰かの命を奪うという重い罪である事に変わりはないのだから。

その時の彼女の笑顔は決して今の様な天真爛漫な可愛らしいものではなく、あらゆる物事をつまらなく感じる。そう言った感情を笑って誤魔化してただけだった。

道の力のせいも有ったのか、彼女の楽観的な性格は人の命さえもどんどん軽く思わせていった。

そんな時、彼女の心を大きく変える出来事が起こる。

トレインと出会った事だ。

彼に一目惚れしたキョウウコの心は、それまでの残忍な性格を確実に変えていた。

それからして、彼女は自分の部下さえも入らなくなれば平気で殺害するクリードのやり方に嫌気がさし、組織を抜けた。

だが途中で抜けた後、彼女はある暗殺組織の一員に「危険人物」と任命され追われる身となった。

組織の名は「秘密結社」^{クロノス}

世界経済の一部を裏で操れる程の巨大組織で、その配下には置かれた時の番人^{クロノ・ナンバーズ}と呼ばれる暗殺部隊が存在していた。

ナンバーズに追われる中でキョウウコはトレインと再会。当然彼もその組織との戦いに巻き込まれ、命の危険にさらされてしまう。

トレインが追手に始末されそうになった時、キョウウコは怒りに燃えて抹殺者達を焼き殺そうとしたが、トレインから「無暗に殺すのは俺の主義じゃねえ」と止められた。

そこで彼と交わした言葉がコレだ。

【もしお前が此処でキレてアイツ等と戦うんなら、俺は容赦なくお前を見捨てる。でも………

もしお前がアイツ等に何されても、ムカついても我慢出来るって約束するんなら………

俺が全力でお前を守ってやる！】

キョウコはその約束を全力で受け入れ、以降彼女はどんな事が有っても道の力を使おうとはしなかった。

その後、彼女は自分の前に現れたクロノスナンバーズの長である女性、セフィリア・アークスにトレインの時と同じく「不殺宣言」掲げ、クロノスの標的から外された。

二度とクロノスに敵対しないと言う条件つきだったが、彼女がクロノスから逃れられたのはホントに運が良かっただけなのだろう。

故郷である日本へ戻り、普通の子供高生として生きる事にしたキョウコ。

そんな中ムカつきそうになった事も何度かあった。

街中で明らかに向こうからぶつかって来たのに謝罪の一つも無い男が居ても、学校で自分の持っていた財布を盗んだ犯人を見つけても、彼女は何時もトレインの事を考えて怒りを鎮めていた。

彼の事を考えればこれまでのイライラなどあつという間に消えてくれるのだ。

御蔭でストレスが溜まってると感じた事は一度も無い。

だからこれからも自分は彼との約束を貫いていく。

道の力を使わない、不殺を貫く、普通の人間として生きるという約束を。

（そうだよ。クロ様が負ける訳ない！ クロ様は強いんだから！ 私の力なんて無くても大丈夫！どんな悪い奴でもやっつけられるんだから！）

彼女は全力でトレインを信じ、約束を守り続けると改めて決心した。

「あ、でもやっぱり人は呼んで来た方が良いよね？」

何はともあれ、この状況は誰かに知らせなくては。

そう思い、キョウコは操車場を出る為歩み出した。

バチイイツ！

「きゃあ！」

が、突然体中に強力な電流がはしり、彼女は後ろへのけぞる。が、今度は背中からも強力な電流が流れ、痛みを走らせる。

「いつつ！ もお何よこれえ?!」

背中をさすりながら、今電流が走った何も無い空間に軽く手を触れる。すると、キョウコの周りに位置する空間に小さな稲妻が走った。

見ると自分の周りには先程のスナイパーで撃たれていた銃弾が4発地面に落ちていた。

その落ち方がキョウコを囲むように置かれており、どうやら弾から見えない電磁バリアーの様な物を発生させているらしい。

先程のスナイパーは、しっかりと自分を逃がさない様、予めキョウコの周りに銃弾を撃っていたらしい。

とその時何処からか声が聞こえた。

「黒猫だからな！」

突然ド パントの視界全体が激しい光に包まれる。

それはトレインが何処からか放った閃光弾だった。

『うああ！ 目、目が見えん！』

突然のまぶしさに耐えられず、ド パントは思わず右手で目をふさいだ瞬間、ド パントの腹部に巨大な爆発が起こった。

『ぐおお・・・！！！？』

余りの痛みにド パントは腹を押さえその場に膝を付いた。

そして、その隙を付いて後ろから猛スピードで襲いかかるトレインの姿があった。

(この一撃で決めてやる！)

トレインは目もとまらぬ速さでド パントに近づく。

銃弾でちよくちよくダメージを与えても奴には大したダメージは無い。

理由は不明だがコイツは自分を狙って攻撃してきた。此処で蹴りを付かないで逃げ出せば、スヴェン達にも影響が有るのは確実だ。

ならばこの技で大ダメージを与え、戦闘不能状態にするしかない。

嘗て星の使徒の一員である蟲使いや、クリードにも使ったあの技で、手に持ったハーデイスに懇親を込め一閃の準備をする。

だが。

『なんてな』

「!？」

不意にアームズド パントが一言発した。

そして先程まで凍っていた左腕の機銃を自分の居る地面に突き付ける。

次の瞬間、ド パントの腕の今までマシンガン調の銃弾を放っていた銃口のしたの物とは別の、大型の機銃を発砲した。

これにより腕の周りの氷は一瞬のうちに砕け散った。

(な!?)

防御しようとした時には既に遅く、銃弾を受けた床は派手に大爆発し、トレインの肉体を巻き込んだ・・・

No. ? 危険なA / 交戦する猫 (後書き)

久々に更新して早速誤字やミスの連発でした。
お見苦しい所を申し訳ございません。

キョウコが力を使わなくなってからの生い立ちには一部、原作には無いオリジナルの設定を入れておきました。

<街中で明らかに向こうからぶつかって来たのに謝罪の一つも無い男が居ても、学校で自分の持っていた財布を盗んだ犯人を見つけても、彼女は何時もトレインの事を考えて怒りを鎮めていた。

と言つ所です。

No. IX 危険なAノ猫との約束 (前書き)

皆さん、こんにちは。T-Kです。

更新を止めて約3カ月。どのような事情が有るにせよ、執筆意欲を無くしてくして此処まで更新を止めてしまい、本当に申し訳ございません。

そしてこの「危険なA編」は今回ではまだ完結せず、あと2話程続ける予定です……。

今回はBC側であるあの子にどうしてもスポットライト当てないといけない話しになる為、それを徹底して書いてるとまたもや文字数が……

また更新は遅めになるとは思いますが、こんな僕の書く小説でもよろしければこれからもよろしく願います……。

No. IX 危険なAノ猫との約束

ドゴオオオオオオオウウウウツツ!!

「ぐあああああああああああああつっ!」

「!?!」

遠くの古びた工場から突如として響いてきた爆音。

そして微かに聞えた悲鳴。

うそ・・・ク口様だよね?・・・今の声。

見えないシールドの中に閉じ込められたキョウウコはその声が誰の物が直ぐに解った。

自分が想いを寄せてる人物の声だ。聞き間違える筈が無い。

先程の爆発、そして悲鳴。

キョウウコの心の中からどんどん嫌な予感が煙のように立ち込める。

確かめたかった。待っていると言われてもあんな痛々しい叫び声を聞いてじっとして居られる筈がない。

居てもたっても居られなくなったキョウウコは忽ち工場の方へ翔けだした。

しかし

バチイッ!

「ああ!」

彼女を囲む電磁フィールドから再び体に電流を流す。だがキョウ

コは怯まなかった。

「う！・・・ううう！・・・こ・・・このおおおおおおおおお！
」

全身のあちらこちらに稲妻が走り、痛みが流れているのにも関わらず、彼女はトレインに会いたい一心でどんどん前へ突き進み、強引に電気のフィールドの壁を付き通った。

「わっ！！」

電磁フィールドを超えた拍子に彼女は地面に弾き飛ばされ倒れ込むが、直ぐに起き上がった。

服の所々が焦げ、全身から煙が立ち込めていても今はそんな事を気にしている暇は無い。

直ぐに起き上がって一直線にキョウコは工場の元へ走っていく。
工場の中には火薬と焦げた匂いが充満していた。
はじめは真っ暗だった室内も直ぐに目が馴れて来たので、目の前の状況がはっきりしてくる。

滅茶苦茶だった。

地面には電車か何かの製造の部品の破片やら瓦礫などが散乱し、窓ガラスの殆どが割られ、彼方此方に銃弾の跡が付いてそこから小さな煙が上がっている。

「ク口様・・・何処ですか・・・？」

呼んでも返事は無い。

一体どうなったのだろうか？ まさか悪い奴に殺され・・・いや、そんな訳無い。 クロ様は誰よりも強いんだ。 絶対に生きてる。 物音も一切せずキョウウコは不安はますます高なつたが、そう自分に言い聞かせながら工場の奥へと足を進めた。

ガラッ・・・

「？」

ふと、何かが崩れる様な物音がした。 小さな小石が斜面を転げていくような、小さな音だ。 気になったキョウウコは其方に歩み寄る。

「！！！」

そして彼女はある物を見て息を飲んだ。

それは瓦礫の山だった。 建物等でよくつかわれる骨組みの部品等が大量に積み重なられている。 天井には巨大な穴が開いていたので恐らくその壊れた天井の部品だろう。

そのして、その瓦礫の直ぐ側に転がっていたのは・・・

「く・・・クロ様・・・？」

彼女が見た物。

それは頭から大量の血を流し、地面に倒れ込んでるトレインだった。服は到る所が焼け焦げ、敗れた部分から露出した肌からも夥しい数の青あざが出来ている。

「ク、クロ様あ!!」

キョウコは目に涙を溜めながらトレインに駆け寄った。

「クロ様・・・クロ様・・・何か言ってくださいクロ様!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

幸いにも、トレインは微かに目を開けまだ息をしていた。

だが気絶しているのかキョウコの問いかけには無言のままだ。

先程のアームズ・ド パントの足場を爆破されトレインは、派手に破片を散らす碎けた足場と共に下の階へと落下。

下の階層はかなり古びていたらしく、彼の体は3階、2階と次々と床を突き破っていき、

最後は直ぐ一番下の階層に止められていたクレーン車の柱に背中を強く打ち付け、建物の残骸と共に地面に叩き付けられたのだ。

この様子だと全身の彼方此方の骨が折られたようだ。

息はしていたが、トレイン自身はもう満足に喋る体力すら残っていないようだ。

『つまんねえ……つまらなすぎる……貴様の攻撃からは殺気が全く感じられん……』

ふと、キョウコ後ろから声が聞こえ振り返ると、遠くでアームズ・ド パントが瓦礫の下からた体を起こしていた。

『わざわざ上まで登ったのは、必殺技を叩き込むついでに床を破壊して俺を下まで突き落とすって猿知恵だったんだろが……俺がそのくらい予想出来ないと思ったか？ 俺が戦闘狂と知って、あるいはガイアメモリと言う名の麻薬に手を染めたので判断力が鈍いと思った……そうだなブラックキャット？』

「お、お化け!？」

突如現れた人外に、一瞬凍りつくキョウコ。

ド パントは何故か非常にイラだっている感じである。今のドパントの推理が正しければ、彼はトレインから自分は侮辱されたと思ったのだろうか？ それとも満足な戦いが出来ない事に腹が立っているのか？

しかし、キョウコは徐々にそんな事はどうでもよくなってきた。

「……もしかしてアンタなの？……ク口様をこんな風にしたのは……」

『？ お前は……何だ、普通の人間がどうやってあのシールドを

？
』

首を傾げるアームズ・ドールパント。キョウウコはボロボロになったト
レインの体を抱きかかえながら、怒りに満ちた目で激しく睨みつけ
叫ぶ。

「キョウウコの質問に答えてよ……アンタがやったのかって聞いて
るのよ！？ 何で？！クロ様に……なんの恨みがあんのよ！」
『恨みだと？ ハッ、俺はソイツに恨みなどない。俺はただ自分
の仕事をしてるだけだ』

「仕事？」

『YES。 お前、初めて見た時は無関係の一般人かと思っただが、
その慣れ親しんだ語りようだと、どうやらそのブラックキャットの
知り合いのようだ。なら知ってるか？ ソイツが嘗て何者だったの
かを……』

「……！！」

キョウウコは無意識に口を紡いだ。 自分は知っている。このトレイ
ン・ハーネットネットが嘗て何をしてきたかを。 彼女の反応を見
てドールパントは鼻で小さく笑った。

『知ってるんだな？ なら話は早い。 ソイツは命を狙われても文
句の言えない輩だからな』

「……クロ様は……クロ様はもう人殺しなんかしない！」

『おっと、喋りは此処までだ』

キョウウコを無視して、ドールパントは冷酷に左腕の銃を構えゆっくり
歩みよる。

「クロ様・・・起きて・・・クロ様・・・」

焦ってトレインに声をかけるも彼は気絶していて一切の返事が無い。ド パントは真っ先にターゲット（トレイン）に手をかけるだろう。その後は確実に自分の命も奪うつもりだ。自分は襲撃現場を目撃した、消されるのは間違いない。

（殺されちゃう・・・クロ様が・・・）

込み上げる恐怖に襲われ、だがそれは自分が死んでしまうと言う恐怖では無く、愛する者が目の前で死ぬかもしれないという恐怖の方が強かった。

自分は常にトレインを信じているが、今此処であのド パントを止めなければ確実に殺されてしまう。

せめてクロ様だけは生きててほしい。

だが自分は只の一般人だ。

携帯は破壊され、助けを呼ぶことも出来ない。

このまま自分は何も出来ないまま、あの化け物にトレインが殺されるのを見てるしかないのか？

いや・・・一つだけあった。

今この状況を打開する方法が・・・

それは自分の「道」、「Heat」の能力を解放し、あのド パン

トに挑む事……

だがこの能力は……

キョウコは前に、自分がクロノスに追われた時、トレインとの会話を思い出した。

【もしお前が此処でキレてアイツ等と戦うんなら、俺は容赦なくお前を見捨てる。】

そつだ。それは二度と自分は人殺しをしないと云う約束。だから二度と「道」も使わず、普通の人間として生きて行く。そつ彼と心から誓った。

クロノスナンバーズのリーダー格、セフィリア・アークスともこの約束を交わして自分の命を救ってくれた。今この約束を破つたらそれこそ自分を信じてくれたトレインやセフィリアを裏切る事になる……

(駄目……出来ないよ……)

人を裏切ると云う事は嫌われる証。

トレインから嫌われると云う事。う事と同じだ。

それは自分に生きる希望を失

だから、自分には……

『DEI ブラックキャット』

「！」

気が付くと直ぐ後ろでド　パントが機銃を発砲した。

彼がトレインに向けて発砲してから着弾するまでは非常に短い時間。

だがキヨウコには短い時間が1分、また3分ぐらいの様に非常に長く感じた。

その間に、彼女頭の中では色々な言葉思い浮かんだ。

（あれ？　何か周りが遅くなってる・・・？　あ、そう言えば人間って死が非常に近くなった瞬間になると、周りの景色がスローに見えるってTVで見た事が有ったなあ・・・。

あれ？

でもこれって確か自分の命が危険な時じゃなかったっけ？　あ、そっか！　今クロ様が死にそうだからか、キヨウコもスローなんだ。

やっぱりクロ様とキヨウコは一心同体なんだあ。　はは、なーんか照れるなあ、

気付くと工場の一階は火の海となっていた。

トレインの命の危険を感じたキョウコは遂に我慢しきれず、ずっと封じていた「道」の力を解放してしまったのである。

例え逃げても確実に後で追ってくる事を悟ったキョウコは真正面からド パントに挑んだ。

殺すつもりが有ったのかどうかは考えず兎に角無我夢中で挑んだ。

最初は突然の出来事にド パントも戸惑っていたのか、確かに善戦していた。

しかし戦ってる途中で、ド パントはキョウウコの攻撃パターンに気付き始め、そして今は……………

『つたく……一体何なんだ貴様は？』

いつの間にか、アームズ・ド パントは片手でキョウウコの首を鷲掴み、そのまま壁に押し付けてもう片方の腕の銃を突き付けていた。

『いやいや最初は驚いたよ。普通の民間人だと思って、ブラックキヤットの後に始末しようと思ったが……………まさかこんな力を持った奴とは……………』

「はああ!!」

首を掴まれたままキョウウコは口から火を吐こうと息を吸う。が、その前にド パントのミゾウチが彼女を襲った。

「ぐはあ!？」

『悪いな。俺は敵が女だろうと容赦はしない。命がけの戦いに歳も性別も無いからな』

「く、くうう……………」

苦しそうな声を出しながら、キョウウコはド パントを睨みつけた。

あそこでトレインを守るには自分が力を使ってコイツに立ち向かうしかなかった。

力を使った時点で、自分はトレインと約束を破った。

これで彼は自分を幻滅し、二度と振り向いてくれないだろう。そ

ういう約束だった。

だがあの時一瞬で大きな決意をした。

自分は今もうトレインに嫌われても良い。

彼が死ぬくらいなら、自分を嫌ってでも良いからトレインには生きてほしい。と。

だから全力でコイツに立ち向かった。

しかし

戦ったのが久しぶりだったので自分の腕が鈍ったのか？
いや、恐らく実力はこの化け物の方が上だった・・・

悔しかった。悔しくてたまらず涙が出て来た。でも体が戦いの痛みで思うように動かない。だから只管、睨む事しか出来なかった。それがますますキョウコの中で悔しさを倍増させる。

『は、惨めな奴。さて、お前のせいで時間を食った。これで終わりだ』

ド パントはそんな彼女を見て非常に馬鹿にした様に軽く笑い飛ばすと、

遠くで倒れたトレインに銃口を向けた。

「！ や、やめ・・・」

『DEI (死ネ)』

キヨウコが良い終わる前に、ドーパントの機銃からキャン砲の弾が発射された。

ターゲットの居た場所は

一瞬にして巨大な爆発に巻き込まれた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『こつ言つのを“リア充爆破”、とか言っただっけか？・・・・・・・・・・
下らん言葉だ・・・』

ドーパントが何か喋った様な気がしたが、キヨウコの耳には届かなかず、ただ口を開けて爆発の炎を見つめるしかなかった。
今の彼女は絶望とトレインの死を受け入れたくないと言っ感情が入

り乱れている。

信じたくない。だがあの状態でトレインが逃げられたとも到底思えない。

『よし、次は貴様だ』

ド パントはキョウコに向き直り、銃口を彼女のこめかみに突き付けるが、キョウコはただぼつと、静かに涙を流す。愛する人を目の前で失ってしまった。その絶望により頭の中はもう真っ白だ。今は自分の命が危うい事さえ気付かない。

『安心しろ。……痛みは一瞬だ……』

ド パントはそう言って、腕の銃に力を入れた途端、

その機銃に”別の弾丸”が撃ち込まれ、腕を弾き返す。

『何!?!』

弾かれた腕を押さえて、撃ってきた場所に顔を向けるアームズ・ド
パント。

キョウコも何となく其方に顔を向ける。

撃ってきた場所は、先程トレインにキャノン砲が着弾した場所で、そこには巨大な火柱と黒煙が上がっている。

と、その黒煙からの中に一体の人影が見えた。

まさかトレインが……？

「おい、そこのためえ……」

煙が晴れて行く内に、そこにはトレインではない別の人物が立っていた事に気づく。

ド パントはこれ見て何処か嬉しそうに「へえ？」と呟く。

その人物は赤い大きな複眼でド パントを睨み、一丁の銃を向けて叫んだ。

「一体何してやがんだよ！ これは……」

そこに居たのは、先程通りその場に倒れていたトレインと……

間一髪の所で弾丸を打ち落とす、仮面ライダーW・サイクロン・トリガーだった！

No. IX 危険なAノ猫との約束 (後書き)

まずは、Wファンの皆さま、翔太郎達の出番が最後しかなく申し訳
ございません。

キョウコがトレインを思う心情、そして約束を破ってまで彼を助け
る心情は書けば書くほど書きたくなって気付いたらまた次回へ持ち
越しのパターンへ(泣)

彼等の活躍は次回へと託したいと思います・・・。

No・X 危険なA/罪負う猫(前書き)

どうも、2012年、最初の更新。

今回も戦闘シンオンリー。

これからも黒猫Wをよろしく願います。
それではどうぞ！

No. X 危険なA / 罪負う猫

ルナ！ トリガー！

Wは再度ド パントに発砲し、痛みへのけ反って彼はキョウコの首から手を離し、その隙にWはルナの腕を彼女の胴体に巻きつけ、此方に引き寄せる。

「大丈夫かトレイン！ キョウコちゃん！」

『トレイン・ハートネットも重症だ。それにこの状況、一体何が有ったんだ？』

救出したWの中の翔太郎はボロボロの二人の安否を気遣った。ソウルサイドのフリップもこの状況に困惑ぎみな声を出す。

突如失踪したトレインを探すため、予め放っておいたメモリガジェットの一部である、バットショットの映像を見てここまで来た。その時はまだトレインとキョウコ、ドーパントの三人しか確認出来て無かったが、来た時には工場内は一面中焼け野原。はじめは状況が理解出来なかった。

唯一理解出来たのは、二人の命が危ういと言う事だけ。

キョウコの首を掴みながら、倒れているトレインに向けて銃口を向けるド パントを見た時、工場の直ぐ側でハードボイルーを乗り捨て、とっさに変身したのだった。

「そ・その声、さっきの探偵様？」

『？ そう言えば翔太郎、彼女は？』

「あれ？ 別の人？ って、言うか何ですかその恰好?! 腕も伸

びて!？」

「あ、ああこれはだな・・・」

キョウコも始めてみる仮面ライダーの姿に困惑する。二つ同時に説明するには話が長くなるのでWはどうすれば良いか悩んだが、遠くから聞える不敵な笑みがそれを断ちきらせる。

『ふははは・・・お前が、Masked Riderか？ お前はソイツと違って上玉なんだろうな?』

銃口を此方に向けて尚も小さな笑い声を上げるド パントに、Wは身構えた。

「フリリップ。説明は後だ・・・」

『そうだね。ハートネット、助けてもらった借りは返すよ』

例え付き合いが浅くとも、トレインは恩人だ。何故彼の命が狙われているのかは解らずとも、このまま頼っておける筈がない。

ド パントがマシンガンを発砲すると、それを伸びた腕を振り回し弾き返すW。

「キョウコちゃん、トレインを連れて隠れてる!」

「は、はい!」

「逃げる」とは言わなかったのは、恐らく二人の怪我の状況であまり遠くに行けそうも無いと判断したからだろう。

Wが支持すると同時に、敵は銃弾を放ちながら片手大剣を構えながら駆け寄って来た。

『あああああああああああ！！』

「野郎！」

Wも片手で瞬時にメモリを変更。

ルナ！ メタル！

もの影に隠れていたキョウコが「また色が変わった！？」と驚く中、メタルシャフトで応戦する。

『ふははは！ Masked Rider・・・街を守る正義のヒーロー！ 良いねえ・・・殺し甲斐が有る！！』

「つつ、何言ってるんだコイツ！？」

『おらおら、喰らいなあああ！！』

ド パントの体験とメタルシャフトが何度も火花を散らしながらぶつかり合う。

実力は戦闘経験豊富なWが上と思いきや、このド パントも引けを取らない勢いだ。

「フィリップ、奴のこの動き！？」

『ああ、かなり戦い慣れしてる。何者なんだ？』

凄まじいつばぜり合い途中、ドーパントのマシガンが火を噴き、かわしたWは一旦距離を置いた後、物陰に隠れた。

（ハートネットはギルを追っていた。そしてそのハートネットを始末しに来るド パント・・・ガイアメモリの密輸・・・どうも臭うな）

(何? じゃあまさかフィリップ。まさかアイツはギルの差し金つて事か?)

(確証は出来ない。だが念のためバットショットに奴の映像を映させた方がよさそうだ・・・)

(解った、やってみよう)

互いに会話を終え、Wはバットショットを敵に気付かれないよう密かに起動した後、再びド パントに向かっていく。

「うおおおおおおお!!」

だが真つすぐ向かっていく事で、彼には大きな隙が出来、ド パントのバズーカの弾が数段Wへ向かう。

途端、目の前が大爆発に巻き込まれる。

「探偵様!!」

『はっ、ジ・ENDか?』

先程のトレインに放ったのと同じくらいの大きさの黒煙と炎を見て、心配してキョウコが叫ぶ。

自分はその仮面の戦士の實力を知らない。道の力を使ってでも勝てなかったあの化け物に彼は勝てるのだろうか?

しばしその場に沈黙が流れるが・・・。

「おおおおおおおおおおおお！！」

そんな心配は無用とばかりに炎の中からメタルシャフトを構えたWがド パントに向かって飛び込んで来た！

『全部撃ち落としたのか……』

状況を察したドーパントは、今度は両手で剣を構える。

互いの力がぶつかり合い、つばぜり合いになったのを見計らってWは左足でド パントの膝をさばいて耐性を崩そうとした。

『うおー！』

バランスを崩し、地面に体を打ち付けようとした時でもド パントはマシンガンでWに向けて発砲しようとした。 が、

「させるかー！」

『なに！？』

瞬時にメタルシャフトでド パントの体を高く打ちつけ……

その隙に別のメモリを刺し込む。

ルナ！ ジョーカー！

「さあ、コイツでも……」

自分達の上空から落下してくる敵に狙いを定め……

「喰らいなあ!!」
『ぐはあああ!!』

左の拳で背中に重いアッパーをお見舞いした。

人間の身体能力を強化するジョーカーメモリ、ジョーカーのパンチ力は凄まじい物で、

ド パントは苦しそうな声を上げて遠くまで吹き飛び壁に激突、そのままうつぶせに地面に落下。

その圧倒的なパワーに近くで隠れていたキョウコもただただ驚いて見てるだけしか無かった。

「っ、強い……」

キョウコが一言漏らした時だった。

「う、うう……」

不意に聞えて来た声。横を見るとそこには苦しそくに頭を押さえながら起き上がるうとするトレインの姿があった。

「く、クロ様！」

「ああ……キョウコか? ……俺は……生きてんのか?」

「良かった! クロさ……」

トレインの無事な声を聞いた喜びを胸に話しかけようと思った。が、先程の自分の行いを思い出し、一つの罪悪感が襲った。

自分は彼との約束を破った……と。

「どうしたんだ？」

急に暗い顔になるキョウウコを不思議に思うトレイン。

そんな事はお構いなしに二人の戦士と怪人の戦いは尚も続く。

地面に激しく激突し、痛みにもだえるド パント。だがこの時彼はある秘策を考えていた。

『が……ぐはあ……（すげえパワーだ……だが……！）』

戦闘中、仮面ライダーはずっとあのドライバーをのメモリを差し替えて様々な力を引き出していた。今まで中々隙が見つからなかったがアレを封じてしまえば此方が圧倒的に有利な筈だ。

「さあ、どんどん行くぜ！」

ゆっくりと歩み寄るWは別のメモリに差し替える為一旦ヒートのメモリをドライバーから引き抜こうとする。その隙をド パントは見逃さなかった。

『今だ！』

一瞬でドライバーに狙いを定め、腕の機銃から特殊な液体金属弾を発射しようとした。

この液体金属弾は付着すると瞬時にその場で硬直する妨害用の武器だ。

狙いは確かにWへ向けて発射する筈だった。

しかし、急に体のあちこちに何か小さい物がぶつかりそれを妨害した。

『が！？ な、何だコイツ等は！？』

振り返るとそこには蝙蝠、クワガタムシ、カエルに模した三体の小型ロボットだった。

「よそ見にご注意！」

サイクロン！ ジョーカー！

『！？』

音声が聞こえて振り向いた時には既に遅し。W・サイクロンジョーカーはド パントの間合いに入り、疾風を身にまとった連続パンチを叩きこむ。

『ぐあああ！？』

とうとう追い詰められたド パントは、経って居られるのがやっとなのか。背後の壁に手を付けたまま、よろめいてく。

『悪いね。君の変身しているドーパント、僕達は前にも戦った事が有るんだ。攻撃手段はお見通しさ』

ゆっくりと歩みよるWからソウルサイドのフィリップが余裕気な声を出す。

「予めガジェット飛ばしたままで正解だったな。 さあ言え、お前

「は誰だ！ 何でトレインとキョウウコちゃんを襲った！」

Wの怒りに満ちた声の質問に、ド パントは虫の息で返す。

『・・・お前・・・まさか知らないのか？ そいつの・・・正体を・・・』

「正体だと？」

『一体何の話だい？』

言葉の意味を、Wの中の二人は理解できなかった。 このトレインが一体何だというのか？ そう思った次の瞬間、

『ふ、ふはは・・・あっはっはっはっは！あーっはっはははははあああー！』

ドーパントは両手で腹部を抑えて笑い転げたのだ。

『？』

「てめえ！ 何が可ましい！？」

『これが、笑わずにいられるか！ ヒハハ、け、傑作だ。ヒーローが、正義の味方が、あー、ラズベリー賞もたまげたなこりゃ！・・・良いだろう、教えてやる。』

この世にはあらゆる政治や治安、金や紛争を裏で制御する秘密組織が存在する。

その裏世界でもごく一部しか存在を確認できない、圧倒的な支配力を持つ組織が存在していた。

名は”クロノス”。

後ろから声が聞こえた。振り向くとそこには頭から血を流し、苦しそうに立つトレインの姿が・・・

「探偵・・・そのドーパントの言つとおり、俺は人様から守られて良い存在じゃねえ・・・」

「ば、馬鹿野郎出てくんじゃねえ！」

「く、クロ様・・・！」

Wとキョウコが忠告するも、トレインはそれを手で制す。

「俺は今まで・・・数えきれない程の罪を重ねて来た・・・それは紛れもねえ事実・・・悔やんでもその罪を消す事は出来ねえ・・・」

「トレイン・・・」

衝撃な真実に思わず立ち尽くすWにドパントはクスクスと笑いながら忠告する。

『そういう事だヒーローさんよ。』 罪を償う”って言葉が有るがあれは馬鹿の言う事だ。一度罪を犯した人間は命尽き果てるまでその罪を背負い、罪を重ねて生きる道がお似合いさ。どんな行いをしても、過去の罪は消せないってこつた。犯した者の道二つ、俺の様にそのまま闇に墜ちるか、死ぬか、だ』

「最も・・・だな・・・お前の言う事は・・・」

彼は震える手でハーデイスを構える。

「だから・・・さあ来いよ・・・テメエの狙いは・・・俺だろ。」

他の奴は・・・関・・・係・・・ねえ」

『健気だな。では……ご遠慮無く!』

言葉と同時に、ド パントは銃を乱射。今の彼のダメージでも避けられる攻撃では無い。

まっすぐとトレイン（目標）に進んでいく銃弾。トレインは覚悟を決めた……

だが結局その銃弾は彼に着弾する事は無かった。

何故ならWが自らの腕と肉体で彼をかばったからだ。

「ぐう!!」

「な!? 探偵!？」

『貴様……何のつもりだ?』

「お前の言う通り、トレインはとんでもない罪を抱えてるのかもしれない……けどなあ!」

Wは痛みに胸を押さえながら、別のメモリを用意しだす。同時に、ドーパントの体をスパイダーシヨックのワイヤーが巻き付き身動きをとれなくした。

『!?!』

「一度罪を犯したからずっと落ちぶれてるだと?償う事が馬鹿だど? 違うだろ! 罪を抱えてるからこそ、尚更その罪を重ねる訳にいかねえんだろ!」

ヒート! ジョーカー!

新しくメモリを差し替え、右半身が赤色になったW・ヒートジョー

カーはトレインに問いかけながらアームズ・ドーパントに只管殴りかかった。

『ぐあああー!』

「トレイン、お前だってホントはそう思ってたんじゃないのか!？」

「・・・探偵・・・」

この時翔太郎は思い出していた。自分もかつて、身勝手な行動で尊敬する恩師をしに追いやった事を・・・。

それは誰から慰められようと決してぬぐう事の出来ない罪。

この罪で自分を何度追い詰め、何度悔やんだ事だろうか。

普通の人ならば自責の念でいつそ自分をこの手で無き者にしたいとも考えたかもしもれない。

だが、翔太郎はそれをしなかった。

何故ならその恩師は、死に際に自分の信じていた物、大切な物を自分に託して言ったのだから・・・。

ソウルサイドのフィリップも今彼がその事を思い出して言ってるのだらうと理解し、ドパントに言い放つ。

『僕も、翔太郎の言う事に賛成だよ。ドパント、君の言った言葉は自責の念から這い上がろうともしない身勝手な奴の意見としか思えない』

『は、くだらん! 貴様・・・ヒーローが罪人を庇うか?』

「ヒーローなんて関係ねえ・・・」

Wは静かに言い放ちながら、ドライバーの横側に付いている必殺技を放つ為の動力部、マキシマムスロットにジョーカーメモリをセ

ットした。

ジョーカー！ マキシマムドライブ！

「罪を憎んでも、人は憎まない……俺達やこの街の皆が仮面ライダーに望むのは……そういう心なんだよ！！」

それだけ言うと、両手から赤い炎と紫色の炎をジェット噴射の如く噴き出し、上空へ舞い上がり、一度宙返りした後そのまま殴りかかろうとド パントに急降下し始める。

「はあああああああああ！！」

『ここで殺られるか……俺は……俺はまだ……まだあ！』

だが此処でアームズ・ドーパントは残った体力を振り絞って、自力でスパイダーショックのワイヤーを引きちぎり、

『まだ戦うんだよおおおおお！！』

一瞬で標準を合わせ、腕から先程放った協力的グレネード弾を3発発射した。Wは空中に居る。人は通常空中では身体の位置を調整する事は出来ない。このまま行けば必ず直撃はWに直撃するだろう。

しかし、それは“通常ならば”の話だ

銃弾が直撃する僅か前に……

Wの体が右半身と左半身が交互に“分裂”する……

『!?!?』

弾はそのまま分裂した半身の真ん中を突き抜け、後ろの壁に着弾し爆発。

流星にこの奇怪な現象まで予想は出来なかったのか、驚いて後ずさった時にはWもうすぐ目の前だった。

「『ジョーカーグレネード!?!』」

『ぐぐがああああ!?!?』

炎を身にまとった両拳が、次々とドーパントにぶつけられ、吹き飛んで行ったドーパントは遂に力無くその場に仰向けに倒れた。

『は、ははは……すげえ……すげえよ……おま……え……』

『

次の瞬間、轟音とともにドーパントの肉体が大爆発を起こした。

「さーて、お前が何者か拝ましてもらおうぜ」

目の前を覆い尽くす火柱に向かうW。爆発はしたものの、仮面ライダーの手によってメモリブレイクされた者はメモリが破損し、変身が溶ける。アームズの正体は何者なのか、それを見極めなくてはならない。そう思って爆心地に向かうが……

「!?!」

そこに正体の姿は無かった……
あるのは砕かれたAのメモリの残骸だけ。

『ふむ。どうやら、逃げられたみたいだね』

「そんなバカな？ メモリブレイクを受けてか？」

『だが現此処に居ない』

「じゃあどうやって……」

ソウルサイドのフィリップは冷静に状況を判断した。

ブレイクされた人間に通常死亡することはないが、衰弱や失神などの後遺症が表れその場に倒れ込むケースが多いがこの様に逃げられると言うケースに翔太郎はあまり出会った事が無い。

「畜生、戦ってる最中に無理矢理聞きだすべきだったか？」

『奴のあの狂気じみた性格からして、簡単に口を割るとはとても思えないよ』

「クロ様！ クロ様！」

ソウルサイドのフィリップが言い終わった時、キョウコが叫んだ。

見るとトレインが再び地面に伏せて倒れている。一度は立ちあがっても彼もかなり体力を消耗していたのだろう。

ドーパントの正体も気になったがまずは彼を手当てしなくては。そのそう思った時だった。

ドゴオオオオオオン！！

「きゃあ」

『うわ！！』

「な、何だ！？」

Wの直ぐ後ろで今までケタ違いの大きな爆発が発生。

驚いて振り返ってみると、そこには成人男性の平均の身長くらいのがスタンクが置かれていた。今まで存在に気付かなかったのは戦いに集中していたからだろう。どうやら周りの炎に引火してしまっただらしい。　　というか、今まで爆発しなかったのが不思議なくらいだ。

この爆発により、周りに有った天井や壁が豪快な炎と共に次々と地面に倒れ伏せ、落下していく。

『翔太郎、そろそろ此処も危険だ！』

「解ってる！ キョウコちゃん、逃げるぞ！」

「は、はい！！」

Wは近くに止めておいたハードボイルダーを呼び寄せ、トレインとキョウコをそこに乗せて大急ぎで工場を出て行く。

4人が外へ脱出し終えて数十秒後。

地面をも揺るがすような巨大な爆音と共に、工場全体は周十メートルにも及ぶ炎につつまれたのだった……

No. X 危険なA / 罪負う猫（後書き）

メモリブレイクした人間が逃げる。 W本篇で照井がライア ドーパントを一度倒した時（本当は倒してませんが）メモリの装着者が逃げた事に違和感を持つてなかったのでこう言うケースもあるんじゃないかと思っただんです。

今回は戦闘シーンは無しの危険なA編、エピソード的な話を予定で
す。

トレインと翔太郎達のその後、そしてアームズの装着者の行方を書こうと思います。

感想とご指摘が有れば随時受け付けます。 ただ、何時も指摘される自分がこの様な偉そうな事を言うのは非常に心苦しいですが、誤字脱字を指摘するのは構いませんが出来ればその時は一言だけでも良いので物語に関する感想も追加してくださいますようお願いいたします。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4188u/>

BLACK CAT & 仮面ライダーW = THE TEMPEST GUILTY

2012年1月14日13時52分発行